THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿六年　第十號

第二百七十一號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

△會員は三千名限りです
△申込期日は十月末日限

國民文庫

△菊判大本計卅六册
△規定及見本は御申越あれ

略規

國民文庫が普く日本文學の精粹を網羅し其の校拵の嚴正、用紙印刷の善美、装釘の高雅堅牢を以て書齋客室の一大偉觀たることは世既に定評あり第一次會員の分は既に本年五月を以て完結し、第二次會員の分も方に本年十二月を以て完了せんとする今日本文庫類似せる小叢書の刊行せらるゝもの僂指に遑あらざるに拘らず、本文庫の希望者近來益々多きを加ふるを以て玆に第三次の募集を企つ。乞ふ此の好機を逸せざらんことを。

非賣品にして會員にのみ頒つ―會期滿二ヶ年―會費毎月金貳圓貳拾錢―送本料は別に申受く―入會金金貳圓(但最終の會費の中に補充す)―配本は二ケ月に三册の割(一册の代價一圓四十六錢餘に當る)

會員募集(第三次)

批評

装訂の美と校訂の嚴密とは國民文庫本の雙絶(東京朝日新聞評)用紙印刷製本共に宜しく、校正も好く行屆き書齋客室を飾る新書として先づ申分なき形狀なり(時事新報評)。慥かに書齋の珍なるべし(萬朝報評)。用紙活字に意を用ひ校訂嚴にして誤植なきは嬉しく表装雅美にして俗に流れざるなど誠に國民文庫の名に恥ぢざるものと云ふべし(報知新聞評)

東京市神田區小川町一番地
國民文庫刊行會
電話本局七三三二番振替口座東京一八五七二番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

學講義錄

倫理學研究	マスター、オブ、フィロソフィー	佐藤讃
教育學	文學士	大瀨甚太郎
教授法	講師	樋口勘治郎
哲學概論	文學士	紀平正美
心理學概論	文學士	大槻快尊
近代の文學論	教授	島村瀧太郎
最近美學說	教授	島村瀧太郎
近世文學思想の源流	文學士	坪內雄藏
歐洲近代文藝思潮	早大文學士	相馬昌治
日本文學史	教授	永井一孝
支那文學談	教授	松平康國
日本文法	文學博士	金澤庄三郎
言語學	文學士	藤岡勝二
支那文典	講師	廣池千九郎
古事記選釋	文學士	千秋季隆
萬葉集講義	文學士	岡田正美
近古文評釋	講師	松井簡治
大鏡增鏡選釋	講師	種村宗八
源氏枕草紙選釋	教授	永井一孝
和歌評釋	文學士	尾上八郎
俳句評釋	文學士	坂本四方太
四書小學講義	教授	牧野謙次郎
左傳史記講義	教授	松平康國
唐宋文評釋	文學士	丸井圭治郎
唐詩選釋	教授	桂五十郎
支那時文評釋	早大政學士	青柳篤恒

科外 一講義錄研究法及辭解、文部省檢定
　　 一試驗問題擬答、創作評論、讀者文藝

本講義の特色

政治經濟科講義は本邦唯一無二の講義錄にして立憲國民たるの修養を與ふるを以て主眼とし一面各種受驗者の參考たらしめ且つ實業家其他經世に志す者の指南車たらしむ

法律科講義は公私諸法に涉り斬新の法理を極めて實際的に解說す而も擔任講師には司法官、辨護士、高等文官等各試驗委員を網羅したれば此種の受驗者に必要缺く可らざるや言を俟す

文學科講義は世に定評ある本大學文科の學課に準據し兼て教員檢定試驗の準備に必要なる學課を參酌して成れるもの是亦我邦唯一の獨習機關にして志を教育に寄せ趣味を文學に有する者の絕好侶伴たり

▲講義錄卒業者には本大學無試驗入學及上級編入等の特典あり▼
▲各科共十八ヶ月の短日月を以て能く專門學術の精髓を窺はしむ▼
▲擔任講師は本大學教授若くは學界に重をなせる專門大家なり▼
▲深遠の學理を說て平易明快ならしむ是本大學講義錄の獨擅也▼

見本つき
規則書
無代送呈

早稻田中學講義
（貳年修了）

早稻田商業講義
（壹年半修了）

上記二種の講義錄は本年四月新學期を開始し目下第十二號迄發行せりと雖此際の入學者には月謝の分納を許し第一號より發送す又特に速成の便法あり●●●●●●
詳細規則書申込次第送呈

東京牛込早稻田
振替東京一一二三番

早稻田大學出版部

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

時代の要求する獨立自尊

◎慶應義塾長 鎌田榮吉先生新著

製本出來

獨立自尊

上製美本函入
七百拾五頁
價壹圓七拾錢
郵稅內地拾貳錢清韓臺樺四拾錢

先生は獨立自尊の典型福澤翁の後繼者也先生獨特の識見と多年の實驗とを以て政治經濟宗教文藝教育の多方面に互り明快なる解決を與へられたるもの着眼は趣味ある時事問題也本書は一面より見れば社會史たり又修養書也加ふるに行文平明興味津津たり國民として個人として何人も必讀すべき名著也

試に内容の一班を見よ

▽世態の變化 ▽商工の統一 ▽國民の公忠 ▽國格論 ▽腕力卽國力 ▽人種的憎惡 ▽邦人の長短 ▽文學の發達 ▽偉人の地位 ▽聖人の英雄 ▽青年の就職談 ▽青年の交際論 ▽煩悶 ▽利用厚生 ▽病的成功 ▽福翁を懷ふ ▽肝要な修養

▽積極的道德 ▽思想の向上 ▽禮の說 ▽人物と時勢 ▽工業と人格 ▽二流の政想 ▽國粹保存 ▽士魂商才 ▽財政の計畫 ▽年頭の教育感 ▽學校の獨立 ▽讀書の活用 ▽俗識と學識 ▽學生の立身論 ▽學生の今昔 ▽學問の將來

發行所
東京市京橋區南紺屋町十二番地 郵便振替貯金口座東京參貳六番
實業之日本社
東京芝區三田四國町
慶應義塾學報局

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

夢二畫集

秋の巻四版出來（櫻咲く國 近刊）



語るに堪へない歌はふ。歌はふ小鳥のよふに歌はふてはないか。若人よ。聲を合せて歌はふ

春の巻 八版 定價五拾錢 送料八錢

冬の巻 再版 定價五拾錢 送料八錢

野に山に 再版 定價七拾錢 送料六錢

さよなら 再版 定價七拾錢 送料六錢

夏の巻 七版 定價五拾錢 送料八錢

花の巻 五版 定價四拾錢 送料四錢

小供の國 再版 定價卅五錢 送料六錢

都會スケッチ 定價五拾錢 送料六錢

秋の巻 四版 定價五拾錢 送料八錢

旅の巻 五版 定價七拾錢 送料六錢

京人形 再版 定價四十錢 送料六錢

都會の巻 近刊

發行所 東京市麹町區二丁目二番地 振替東京二〇九一四番 洛陽堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見よ？？政界の眞相を說破せる大快著出でたり

伯爵大隈重信閣下 犬養 大石序評

犬養毅 大石正巳兩先生共述

最新刊

最近政界之眞相

●表裏錯綜の政界を語らんものは識見高遠眼光徹底の士たるを要す。政界を語りてその眞相を穿たむとせば必ずや又自ら廟堂に立てる苦心を解せざる可からず。

●現代政論家少からず而かも能くその資格を備ふる理想的評家それ幾人かある●我が犬養、大石二先生は在野黨の領袖たり、而して嘗て在朝の辛苦を嘗め盡せし苦勞人なり。現代政局の批評家として蓋し理想の人。

●此二先生兩々相携へてこゝに現代政界の眞相を說破す、恐らくは此書を讀まざるものは共に政局を論ずる資格なけむ。

大判 總クロース上製美本 定價金一圓廿錢 小包料八錢

安田善次郎翁著 新刊

克己實話

大判上製 定價金八十錢 郵稅八錢

安田翁の生涯は是れ克己の模範、一粒一庵を積みて今日の大富豪となるその間の難苦而して其間に處せる翁の克己の實歷談本書に躍如として表はる、それ成功を望む者富を欲する者須らく本書を手にして其道を知れよ

發行所 東京市神田區錦町一の十六番 振替貯金東京三四〇九番 二松堂書店

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

事實は小說よりも奇なり

追懐

鮫島大浪著

『あゝ！　矢張艶子は嫁いたのだ……あゝして立派なことを言つておきながら……』と憶ふと激しい、くやしさ、妬しさに胸を掻き挘られるやうな心地がしまして、いかにしても、ちつとして、居ることが出來なかつたのです。

けれどもつく〴〵考へて見ますと、其樣なことを憶つては艶子が可愛さうだ。彼もあゝして嫁くまでには、何んなにか心を苦しめたことでせう、何程自分は決心をして居ましたにしろ、兩親も兄妹もあるものが、何うして默つて獨身でおきませうか、其も憶はずに艶子を怨むだのは僕が無理だ。

あゝ今迄のことは夢だ、夢だ、夢だと思つて絕念ましやう。とは憶ふものゝ、矢張もう再度舊の艶子を視ることは出來ないんだ。あゝ、僕はもう獨ぼッちだな――と思ひますと、賴ない、遣瀨ない、何とも謂はれない悲しい憶がヒシ〳〵と胸に迫つて來ます。そして、艶子も可愛さうだが僕も……あゝ此先つまらないな。と思ふと。淚が頰をながれました。（五十七ページ）＝發行所東京麻布區笄町一五五飯野書房　賣捌京橋眞明堂　定價金四十五錢郵稅金二錢

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十六年第十號目次

新藏相山本達雄論

一九一一年版

ネルソン百科全書

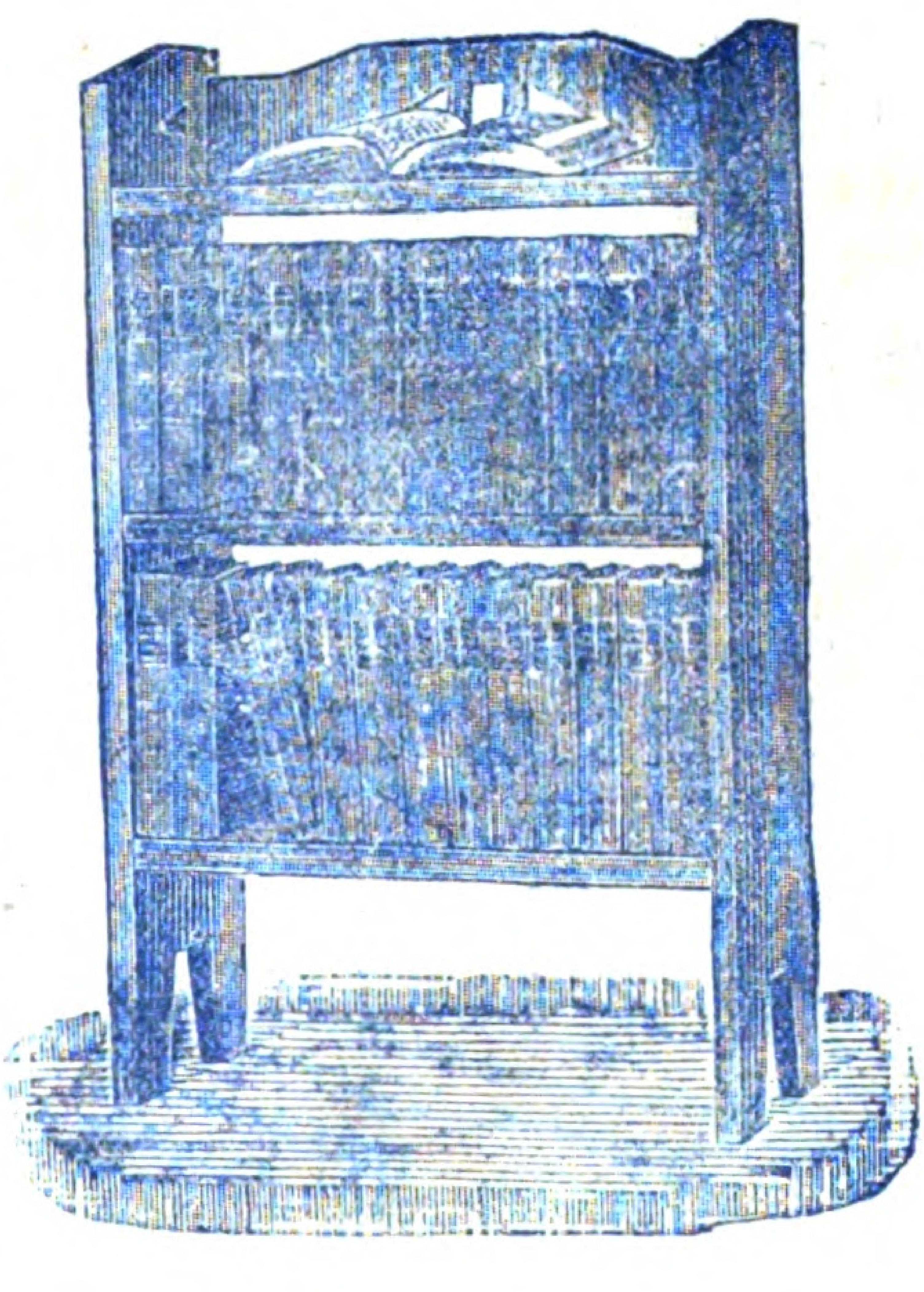
(THE 1911 NELSONS ENCYCLOPÆDIA)

菊半截判バックラム二十五冊

一册五百頁内外金五拾錢

本年四月十五日第一巻發行
爾後月次二回　目下續刊中

米國に於て現に金二百圓を以て盛んに販賣せらるゝルーズリーフ式ネルソンと同一内容を有し露清間の蒙古事件或は墨西哥革命等の最新記事を網羅したる項目六萬餘條一萬餘頁の最廉なる最新百科全書

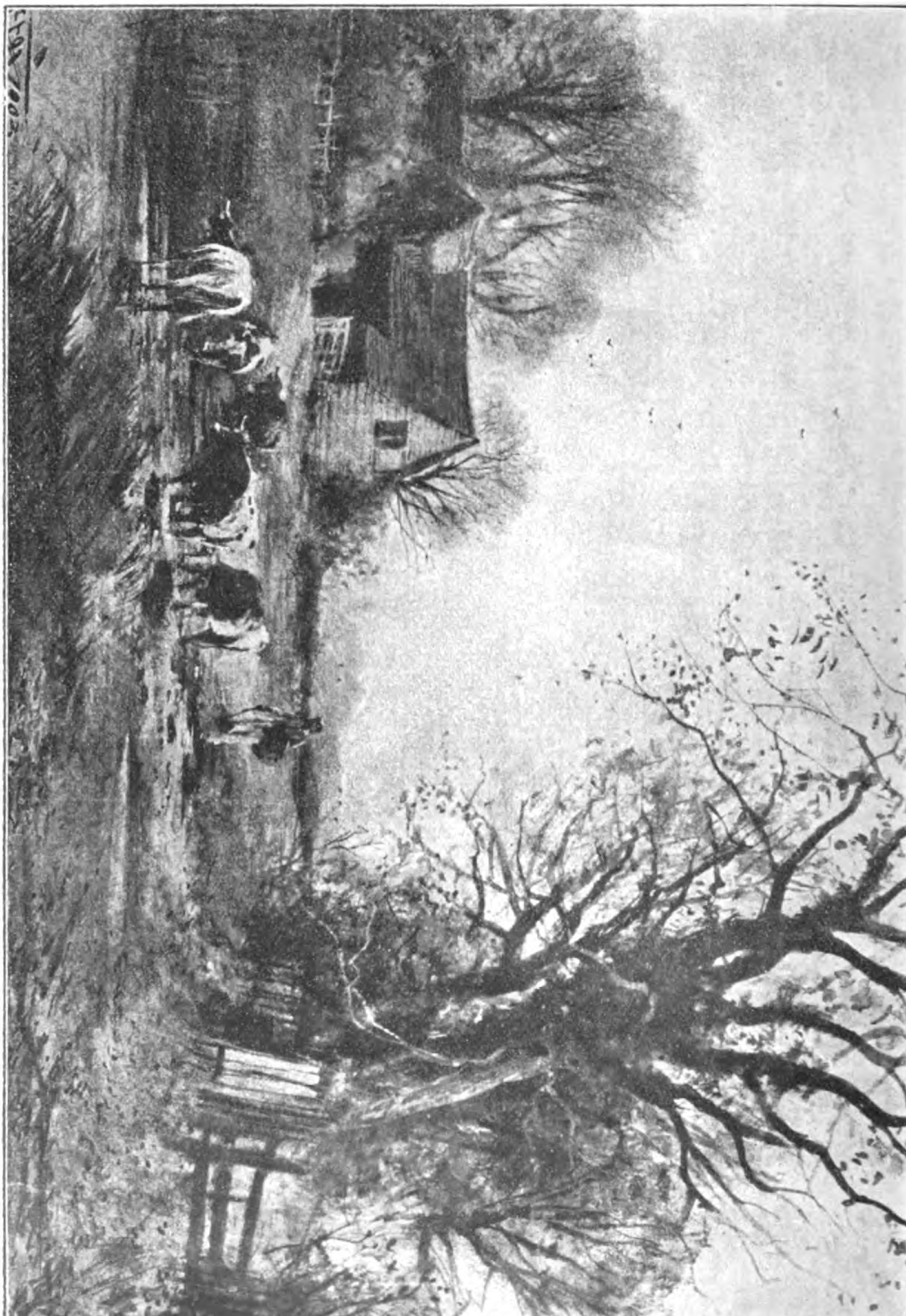


第一回部數は着荷前豫約を充たして即時配本濟、第二回は十月中旬自第一巻至第十巻十册着荷の豫定、目下申込既に數百部を超加したれば至急申込まれよ

説明書照會次第送呈

東京　大坂　京都

丸善株式會社



中央公論



第二十六年
第十號
第二百七十一號

西園寺内閣成る

(上)

吾人が前號に論評したりしが如く、西園寺内閣は、八月卅日を以て成立したり、閣臣の顔揃れも、大略豫想されしが如く、際立て世人を駭かしたるものあらず、概していへば、之前内閣の主として適材を適處に配するの主義に倣へるらしきも、流石に政友會を根據とする丈けに、多少の異色なきにしもあらず、試みに之を概評すれば、海軍は齋藤男の留職となり、陸軍は石本男の昇任を觀たるも、事實に於て寺内伯の留任と多く逕庭なきに似たり、司法の松田氏は岡部子に比して遜色なく、文部の長谷場氏は少くも小松原氏に劣らざるべし、内務の原氏は平田子に比して素より重厚の風なきも、辣腕は乃ち何人も之を

認めざる莫し、農商務の牧野男は大浦子と同く職務に清廉謹嚴なるべきも、明斷は遠く及ばず、素より情弊の生ずると莫かるべきも、事務は恐らくは停滯を免かれざらん、遞信の林伯は、人格に於て遙かに後藤男に優さるも、男の如き事功を建て得ざらん、況んや次官としての小松氏は、遙かに仲小路氏に及ばざるをや、外務の內田子は素より世評惡しからざるも、小村侯に比すれば祖父と孫との如き觀なきにあらず、小村侯の規模雄大にして、一定の方針を立てゝ而して之を遂行したりしが如きは、或は子に望む可からざらん乎

大藏の山本氏に至ては、桂公に比して殊に著るしき逕庭あり、桂公が親から大藏を兼ねて主力を茲に注げるに比すれば、山本氏たるもの果して何を以て相酬ひんとする乎、氏が其の懷抱を披歷して爲すよあらんとするも、別に政黨の後援あるにあらず、實業家の聲援あるにあらずして、果して踏躓し干格する所なきを得るや、其の人物の新たなるがために、昨今頗ぶる評判となれるも、其の評判たる、必らずしも良き評判にはあらず、素より惡しき評判とも斷ずべからざるも、桂公の後を承けし丈け、新人物として評判高き丈け、必らず其れ丈けの苦心はあるべし、若し洒然として前內閣の方針を踏襲せん乎、前內閣派は豎子何をか爲さんと安心しながらも多少見縊るべき姿はあらんが、多數の批評家は交々冷罵熱嘲を浴せて、寸分も寬假せざるべし、幸ひに大に爲す所あらば、聲名隆々たらんも、然らずして單に過失なきに止まらば、却つて大に價値を墜すを免がれざらん、氏たるものゝ最も心せざる可らざる也

有體にいへば、吾人は寧ろ原氏を大藏の難局に當らしめて、以て其の盤根錯節を截るの手腕を試みせ

んとを娯み居たりき、氏が茲に巨腕を揮はざりしは、聊か物足らぬ心地せざる能はざる也

陸海軍外務は素より黨人の窺ふを許さゞる處、而して西園寺侯が遞信、農商務に政友會員を配せざりしは、黨人をして利を罔みせしめざる用意なりといふ、果して然らば心を存なり善なりと謂べし、然かも黨人の弊所短所を曝露したりと稱するも失當に非ず

新内閣組織に際して、殊に其の人物を掲げしは松田氏也、氏や自から求めて司法の閑職に就く、其の雅量實に掬すべし、原氏の明敏快斷は多くあり、松田氏の徳量に至ては甚だ少し、而して此の少さの人、實に政友會に缺く可らざる也

倫敦タイムスは新内閣を評して『歐洲諸國が政黨内閣の効果如何を疑ふに至れる時、日本に於て却つて新たに政黨内閣の成立を視るは奇なり』といへり、政黨内閣は勢ひ也、理に非ざる也、贖々者流之を悟らず、政黨内閣を以て理想とし、曾て適材を適所に配する所以を悟らざるは憐れむべし、然れども西園寺侯が今や何等顧慮する所なき秋なるに拘らず、政友會よりは僅かに原、松田、長谷場の三氏を擧げしに止まり、純平たる黨人以外の内田、林、牧野、山本の諸氏を採れるに視るも、政黨内閣の實は時勢に適せざるものたるを知るに餘あらん

(下)

新内閣の鬼門は謂ふまでもなく財政方面に在るべし、山本藏相にして或は一歩を謬まらん乎、實業家の多數或は猛然として反噬し來るなきを保せず、彼の軍備問題に於ても、内閣は一種のヂレンマに陷ゐ

らざるを得ざらんとする傾向あり

且つ彼の廣軌改築案の如きも、將さに一種の問題を發湧し來らんとす、内閣は最も細密なる注意を加へざる可らず

吾人の領會する所によれば、前遞信大臣兼鐵道總裁たりし後藤男は、其の就職後間もなく、即ち明治四十一年八月頃、病を湯ヶ原の客舍に養へる時、先づ狹軌改良の方法を案じ、各種の項目を分ちて其の精査を命じたりしといへり、然るに調査の結果、狹軌の到底永遠の損失なるべきを信じ、茲に始めて廣軌改築案を立て、調査の後院議を定め、更に閣議を經て前期議會に提出したりしに、議會は尚ほ調査を要するの故を以て其の討議を延期したりき、故に調査委員會を設け、貴衆兩院議員、工學者及び商工業者の中より委員を撰定し、精査審議の上、廣軌案採用を可決するに至れる也

此の調査の結果を一括していへば、略々下の如くなるべし、其の狹軌改良費に殊に多額を要する所以は他なし、彼の米原の一驛のみに於ても、線路の延長せざる可らざるもの、サイドラインとして約二千四百呎と、ポイント十個の増設を要する割合なれば也、而して全線（即ち青森より下ノ關に至る幹線）を廣軌に改むるの比較的甚だ廉價なるは、今より其の準備を爲し、橋梁、道敷、隧道等の改修毎に廣軌に適すべく計畫し得るが故なりといふ

第一　全線狹軌として四十五年度以降二十八ヶ年間に投下する資本總額十二億七千萬圓

此の利率四分二厘として明治百二年度まで即ち四十五年以降　五十八ヶ年

四分五厘とすれば　六十三年　四分八厘とすれば　七十年
にて償還し終るべし

第二　東京下ノ關間を廣軌とし、他を狹軌とすれば同上年間の投下資本總額十二億五千六百萬圓にて之を利率四分二厘とすれば　五十三年　四分五厘とすれば　五十六年
四分八厘とすれば　六十一年
にて償還し得

第三　本州全線を廣軌とし其の他を狹軌とすれば同上期間の投下資本總額十四億零四百萬圓にして之を利率　四分二厘とすれば　五十三年　四分五厘とすれば　五十七年
四分八厘とすれば　六十二年
にて償還し終るべし

蓋し第二案の廣軌とすれば、年々の純益七千萬圓に上るを以て、狹軌に比して九ヶ年間早く償却し終るが爲めに、六億三千萬圓を利するの計算となり、第三案の廣軌とすれば、年々一億圓の純益あるが故に、狹軌に比すれば、償還期限八ヶ年を短縮し得て、正さしく八億圓を利すべしといへり之がために、去る八月七日に開かれし委員總會に於ては、全會一致を以て廣軌案實行と決定したりし也

惟ふに新內閣は、有爲の力量あるとを示すが爲め、又必らずしも桂內閣の方策のみを踏襲せざる所以

を示すがため、廣軌案を延期せんとを欲すべし、政戰に巧妙なる原内相の如きは、後藤男が廣軌改築を豫想し、其の泥近の徒輩をして、早くも沿道の土地を思惑買ひせしめたりと稱し、斯の如き公事を以て私慾を貪ぼるもの正さしく政敵に非ずして人敵なるが故に、必らず力を極めて退治せざる可らずと唱へ、陰に陽に此の說を流布すると雖も、未だ實業家を感服せしむるに至らず、實業家中の先進は、却て廣軌の延期を不利として之を爭はんとする形勢あり、而して新内閣を呪詛する政界一部の策士等は、早くも此の氣勢を看取し、先づ貴衆兩院の議員を聯合して一個の廣軌期成會を組織し、以て一種の示威運動を爲さんとするものゝ如し、彼等の測る所によれば、廣軌案實行は、貴族院多數の同意する所たるに止まらず、政友會中にも、中國派、東海近畿派の如き、九州派の一部の如き、また皆廣軌に左袒すべく、彼の國民黨の如き、犬養氏の一部廣軌案のため政友會と同一步調に出でんも、多數は分裂して、玆に黨界の分野を變更するに止まらず、延きて新内閣を根本より搖撼せしめ得べしと做すに似たり

吾人は素より其の策の當るべきや否やを知らず、又知るを欲するの要なきも、原氏にして廣軌延期の果して不利なる問題と爲るを看破せば、延期案を撤して直ちに之を實行し、以て敵派策士に肩隙しを喰すなるべし、然れども若し之を處すると拙ならん乎、内閣の破綻或は之より來るなきを保せず、事や鐵道院總裁を兼ぬる原氏の擔任なるも、本來財政上の問題たるに於て、新内閣の鬼門が財政方面に在ると、到底否定すべからざる也

* * * * * * *

桂公——山本氏、小村侯——内田子、寺内伯——石本男、此のコントラストは即ち是れ新舊内閣を量定すべき好個の尺度ならざらんや、天成首相の器度を有する西園寺侯にして、眞に公明なる態度を以て、誠意善政を布くにあらざれば、其の成立の始めに於て折角世の歡迎を受けしに似ず、或は意外なる末路を視るに至らん乎、吾人は善意と同情とを似て、殊に侯及び其の閣僚の注意を促がす、夫れ漢賊は兩立せず、成敗利鈍の如きは豫め知る所に非ざる也、侯たるもの夫れ此の亮の意氣なかる可けんや

新版圖の防備を奈何せん

（一）

吾人は曾て韓國併合を賛せざりき、他なし、之を我が領土として直接に露國及び清國と接壤するときは、我が面目上、之を防備するため實に非常の努力と莫大なる經費とを要す可ければ也

英國が歐大陸の一隅に所謂ブリタニアなる一領土を有せしときは、佛蘭西並びに西班牙の諸國と紛爭を絶たざりしが、之を一擲して、純乎たる海表の島國となり、主として海上にのみ權勢を張るに及びて今の所謂大帝國は建立せられぬ、我が上代に於て韓半島と關係を絶たざりしときは、或は任那を保有して新羅高麗と戰ひ、或は其の一を助けて一を伐つがために、幾んど寧日あるとなく、屡々征戰に痛苦したりき、殊に唐大に興りて勢威を半島に輝すや、我が聖主天智は其の皇太子たりし時、所謂黑木殿に坐

して軍旅の苦楚を嘗めさせ玉ひき、幸ひに甚だしき不面目を蒙むらずに、忍びて半島に斷念するに及びて、我が大化革新の內政は始めて大に擧れるにあらずや、時勢は異なれり、素より古を以て今を規すべからずと雖も、我が足場を大陸に架するがために、煩ひ之より生じて、竟に再び天智の轍を踏むに至らざる莫きや否や、是れ國家永遠の名譽のために、審思熟慮を重ねざる可らず、徒らに領土の擴大せらるゝを悅び、曾て遠き變異に處する所以を謀らずして併合を斷ずるが如きは、經世家の憂慮を禁ずるを得ざる所とす

然れども併合は斷行せられて、全く事實となれり、最早議論又は審慮の餘地あるヿ莫し、鞭は揚げられたり、ルビコン河は渡らざるを得ざる也、我が國多年の形勢一變して、茲に大陸に足場を有するヿとなりぬ、今日以後は、日本帝國の面目のために、日本民族の名譽のために、此の新版圖を完全に主持するは勿論、苟くも機會あらば、此の足場を利用して以て大に其の利權を確保せざる可らず、換言すれば進むあるも退く能はざる也、努力奮勵、艱に堪え苦を凌ぎて更らに大に發展するヿを期せざる可らず、形勢の變今日の如きに至ては、素より然らざるを得ざるのみ、而して我が日本國民の力量は、恐らくは能く之に堪えん、否、堪えざる可らざる也

(二)

今の清國は洵に大なれども甚だ弱し、然れども永く斯の如しと斷定するは非也、或は變法自彊して、古の唐宋の如くなるも測るべからず、或は分裂して新國となるも、或は革命易運を視るも、所謂北方の

強國を現出して、勢ひ朝鮮を壓するに至るも亦知る可らざる也、况んや接壤の露國は、今現に世界無比の強大國にして、近く儼然として屹立するをや、我れ朝鮮を版圖としたるがために、日清露の對立する形勢、恰かも歐洲中原に於ける獨佛の關係に類すといふも過當にあらずとす

近く世上の記憶に新たなる我が乃木大將が、同盟國皇帝の戴冠式に陪せる歸途、露國を訪はんとするや、露國宮廷の一部及び軍人の多分と、其の國民の半部との意思を代表すと稱せらるゝノヴオ、ヴレミャ新聞は、露骨に『乃木將軍を冷遇せよ』と題して曰く『互ひに二十有餘萬の死者と癈疾者とを生じたる國と國との戰爭は、輕佻にも區々一婦人のために爭ふ決鬪とは異なるを知れ、決鬪者は僅かに爪大の微傷を交換したる後、一本の三鞭酒を拔きて洒然脫然たるを得べきも、國と國との大戰は、少くも數代の間快癒すべからざる創痍を留む、故らに之を蔽ひ且つ忘るゝは寧ろ卑怯者ならずや、外交上の平和は、眞の和親にあらざるとを記憶せざる可らず、今日日露の和親を主張するものは、單に露國をして總ての恥辱を受けしめんとする猶太人あるのみ、苟くも氣骨ある眞の露國人は、日本に對して怨恨の外何物をも感知せず、眞の露國人は必らず期待す、日露の第一戰は終りたるも大なる意味に於ての日露戰爭は、今僅かに開始されしのみ、思ふに吾人の眼に之を再視する能はずんば、吾人の子か孫かは、必らず次の幕を視るべし、而して其の視るや一再に止まらざるを確信す』又曰く『一千九百五年の役には、日露とも未だ一方が全然敗北せざるに軍を收めたりき、此の不確定なる結果には、日露兩國共に不滿足也、殊に露國に取て大不滿足也、彼の大ナポレオンをすら打拂ひたる我等は、意外にも、國民としても、人種

として、宗教文明に於ても、到底勝者たる資格なき微小なる隣國に破られたり、是れ唯だ不良なる將軍輩の罪のみ、明白に我が敵として知らるゝものに對しては、時運の到來して再び銃劍を交ゆるまでは唯だ冷淡なる他人扱ひを爲すを以て、十分且つ當然とす』と、凡そ政治の要は、國家を最善の方向に指導するに在り、民論、軍人論、殊に新聞論の如き、假令强勁なりとも、之を壓伏又は緩和して、以て至善の方向に轉換せしめざる可らず、即ち一ノヴォヴレミアの主張の如き、必らずしも露國の國是と視るべからずと雖も、露國民の間には、現實に斯る議論あることは、我が國民能く之を領知するを要す

吾人恒にいふ、軍備は平和の保險也、淳良なる古の武人が、其の佩刀を以て殺人の具と爲さゞりしが如く、軍備は實に平和のために缺く可らず、他なし、現今の列國關係に於て、平和は均衡に由て始めて保持せらるれば也、均衡は彼我の武力が優劣なきに由て始めて支持せらるれば也、乃ち露國及び淸國と接壤する我が新版圖朝鮮をして、何等の防備なく、赤裸々の狀態に在らしむるは、決して平和保持の途に非ざる也

看よ、朝鮮と近く相接する滿洲に於て、趙總督は六個師團の兵を置きて、恰かも遼陽守備の我が兵を重圍に陥るゝが如き姿勢を執れるにあらずや、露國は西伯利亞に五十四萬の大兵を駐屯せしむるも尚ほ足らずとし、西歐の兵を轉じて常時百萬の大兵を極東に增置すべしといふにあらずや

徒らに事大思想にのみ囚はるゝ新附の民をして、或は之に蟲惑せらるゝに至らしめん乎、其の廣漠に測る可らざる也、何ぞ況んや平時防備を怠るの弊は、一朝にして恢復すべからざる奇禍を貽すものなる

をや、眞に經世の志あるもの、深く思はざる可らず

吾人は玆に少しく獨佛戰爭及び其れ以來の對抗防備を叙して、以て悠々安眠を貪ぼれる我が樂天先生に應むるの無要ならざるを信ず

（三）

佛帝ナポレオン三世は、初め獨逸に先つて國境を超え、夙くプアルツに突進して以て南北獨逸を兩斷し、南獨逸を自家の薬籠中に收め、長驅して伯林を擣くの計畫を立てたりき、戰略家の評によれば、此の計畫は實に妙を極めたるものなれども、其の準備之に伴はざりしがために、竟に反對の結果を視たりしといへり

當時北獨逸の軍隊動員は、僅々八日を以て完結し、七月廿六日には早や輸送を開始し、殊にライン河の上流に沿へる巴丁の如きは、動員第四日には、既に戰闘準備を完了したりき、然るに佛軍に在ては、ナポレオン三世が七月廿八日已に大纛をメッツに進めしに拘らず、軍隊は尙ほ行進を始むるに至らず、唯だ國境に右往し左往して獨逸軍に機先を制せられたりき、蓋し佛國の兵力は步兵三百三十二大隊、騎兵二百二十中隊、砲兵百五十四中隊、大砲九百二十四門、即ち我が約二十七師團半に相當し、獨逸の步兵四百七十四大隊、騎兵三百八十二中隊、砲兵二百六十四中隊、大砲一千五百八十四門即ち我が約三十四師團に相當するに比して、頗ぶる寡小なるが故に、理に於て早く國境に集中を終りて先づ攻勢を執り得べきに、其の然らざりしは他なし、獨逸は十條の貫通鐵道を國境に向けて使用し得たるのみならず、

其の輸送材料極めて豐富にして、二十個師團は車輛を返還することなくして發送するを得、尙ほ國內現在の車輛の五分の一、機關車の五分の三を使用せずして殘し得たるに反し、佛國は僅かに四條の貫通鐵道を有せしのみ、然かも其の材料甚だしく缺乏して、送兵また痛く遲緩なりしが故なりとす、即ち獨逸に於て名將モルトケが平生十分なる準備を整へしに似ず、佛國は徒らに强盛の名を恃みて晏然怠慢なりしが爲めに、其の勝敗の決は、戰はずして早く已に定まりしのみ

今や獨佛兩國の防備は、疇昔と同日に語る可らず、獨逸の如きはライン河を以て天然の大障壁と爲し之に十有餘の大鐵橋を架し、國內無數の鐵道線路をして此の渡河點に集中せしめ、之より又國境に向つて放線狀に走らしめ、且つラインの兩岸にも併行せる鐵道を布設し、殊に其の左岸には、二條の國境と併行せる鐵道ありて、大軍の側面的移動を自由ならしむ、故に米國新聞は曰ふ、獨佛若し開戰せば、百萬の獨逸軍は一週間以內に佛國の境上を壓すべしと

夫れ動員を迅速ならしむると共に、又大兵を極めて快速に輸送するの外、尙ほ其の下車の設備を完全にし、大兵の集中に要する糧食馬糧にも缺乏せしめざるを要す、幸ひにして其の沿道の物資豐潤ならば必らずしも遠く內地より輸送するを要せず、糧食輸送に要する車輛を轉じて專ら兵員軍器のみを輸送するを得て、其の作戰に及ぼす好影響言を俟たずと雖も、貧寒にして、物資缺乏せる地方に在ては然る能はず、況んや戰時に在ても住民の需要物をも遠く輸送せざるを得ざる地方に於てをや、且つ思へ、幾んど唯一の輸送機關たる我が東海線が、少しく風雨あれば輒ち不通となり、延着となるが如きは實に悚然

たらざるを得ざるに非ずや

且つ交通機關にして寸毫も送兵に差支なくば可なるも、敵は百方之を妨害すべく、或は破壞遮斷の虞なきを保す可らず、茲に於てか其の萬一に備ふると共に、敵の集中を妨害するがため、平時國境に多くの兵力を配置するの必要生ず、今乃ち更に現在に於ける獨佛の國境防備の實狀を敍述せん

佛國は北方カレーより、東北白耳義との國境より、獨逸及び瑞西の國境を經て伊太利國境に沿ひ、地中海に亘る間に、全軍隊の約三分の二を配備す、就中直接獨逸の國境二十五基米の間には、三軍團を第一線に置く、此の内二軍團は三師團編制（他の軍團は伊太利國境に在る第十五軍團を除き、凡て二師團編制にして歩兵一聯隊は三大隊）にして歩兵聯隊は四大隊編制を用ゆ

之に對する獨逸は、東方に强大なる露國を控ゆるを以て、全軍隊の大部分を佛國々境にのみ偏置するを許さゞる事情あるも、國の殆んど中央を貫流するエルベ河の西方に十六軍團を置き（獨逸の全軍は廿三軍團也）就中佛國との國境線には三軍團を配置し、此の内二軍團は、三師團編制（他の軍團は第三軍團を除き凡て二師團編制）とす、而して其の定員も多く、司令長官には、ヘーゼラー將軍の如き、極めて優秀なる良將を置くを例とす、以て其の用意の深遠なるを知るべし

佛國は更に國境の要塞構築にも多くの力を用ひ、アルサス、ロートリンゲンの國境に對しては二個の築城地域を置く、第一はベルフォール及びエピナルの二大要塞を兩翼の據點とし、其の間に數多の堡壘を點綴す、其の延長實に三十里に達し、之を以てモーゼル河上流と瑞西國境に亘る間にある諸道路諸鐵

道を閉塞す、第二はツール及びウェルダンの二大要塞を兩翼の據點とし、中間數多の堡壘を有して延長廿五里に亘るものにして、ストラスブルヒよりナンシーを經てシャロンに通ずる鐵道以北の地帶を閉塞す

尙ほ瑞西、白耳義等が獨逸のため中立を破るの場合を豫想して、此の方面にも要塞を設く、即ち瑞西及び伊太利に對するが爲め、ブサンソン、アルビーユ、ブリアンソン、グルノーブルの各要塞あり、白耳義に對するがためには、獨逸軍がメッツ、チーデンホーフエンを左翼の據點として、左方に旋回しつゝ攻擊し來るべきを考慮し、モーブラージユ、リーユ、バルグ、グラ、ヴリーヌ等の各築城圍又は堡壘を設く、然かも尙ほ足らずとして、巴里を中心とする第二線の防禦網としては、リヨン、ディジョン、ラングル、ラム、ラオン、フエールの各要塞あり、更に最近の新聞によれば、佛國は重要なる國境の地點に、五十基米(約十二里餘)を隔てゝ飛空機を配置し、偵察を兼ね、尙ほ水雷の如き爆藥を携行せしめ空中より敵の建築物並びに軍隊を粉碎せんと欲すといへり

獨逸は始め戰勝の意氣盛滿にして、佛國が巨資を投じて築城に孜々たるを冷笑し、敗者の心事憫むべしと做せしが、要塞の價値漸く兵家の間に重視せられ、殊に露土戰役に於けるプレブナの攻守城戰が、守將オスマンパシャの名と共に世に傳はり、次て露佛同盟(一千九百一年)締結せらるゝや、獨逸は俄かに眠より覺めたるが如き體度を執れり、即ち國境附近の地勢たる、大軍の運用に適するは、アルサス方面にあらずして、フオゲーゼン山と、ルクセンブルヒの中間地たるロートリンゲンなりとし、大兵を茲

に集中する目的を以て、メッツの要塞に大修理を加へ、所謂金城湯池たらしめたり、獨逸新聞の報によれば、メッツの城塞には數多の砲塔あり、砲塔とは、ベトンと鐵とにて蔽へる洞穴中に大砲を据ゑ、砲手は此の内に寢食し得べく、之を地下室によりて後方に連絡するもの也、之に對しては遠距離より目撃しがたきを以て砲撃せんとするも容易ならず、假令中徑一尺に達する巨彈の命中するとあるも之を破壞するに至らずといふ、此の砲塔内に十五珊の榴彈砲及び二十珊の臼砲數門を備へ、數砲塔を一團として、數團皆佛國の方面を睥睨す、其の他歩兵及び機關銃また皆甲楯の掩護を受け、而して數個の堡壘は鐵條網、殊に鐵桿を柱とし、之に棘を有する鐵線を纏はしめ、戰時には電流を通じて觸るゝ者皆斃れしむ、斯の如き堡壘團は、ロートリンゲン、カイゼリン、クロンプリンツ、グラーフ、ヘーゼラー等にして、モーゼル河の西岸にあり、東岸にも亦砲塔並に堡壘團を備へて佛軍に包圍せらるゝを防ぐ、斯くて軍事費中の國防費たる約一千五百萬圓の大部分は、此のメッツ要塞のみに費さる

メッツ大要塞は北方二十五基米のヂーデホーフエン要塞と密接なる連絡を保ち、中間にブス堡を設け戰時には更に築城して、メッツ、ヂーデホーフエンの一大鐵壁を形成せしむるといふ

ストラスブルヒの大要塞は居然としてライン河の兩岸に跨り、其の南方に散在せるフライブルヒ、ノイブライザッハ、ノイエンブルヒ、イスタイン、ヒユーレンゲンの各要塞と相俟て、佛國ベルフオール方面よりの突進に對し、獨逸の西南角を固む

獨逸もまた瑞西、白耳義（甚だしきは和蘭まで）の中立を破らるゝのときあるを慮かり、此の方面に

もキヨルン、ウエーゼル、コブレンツ及びエムデン等の要塞を築けり

獨逸の露國に備ふるまた至れり、其の兵要鐵道及び要塞の設備皆嚴密を極む、即ちタンチヒ、マリエンブルヒ、ヂルシヨウ、グラウデンツ、クルム、トルン、ポーゼン、ナイセ、グロガウ、グラッツ皆堅固を以て名ある要塞にして、一部分は素より墺匈國にも備ふ（之に對して露國も亦ワルシヤウ、イワンゴロド、ウオグオルギーエウスク、ロムシヤ、ゼグルゼ、カリーシユ、ウエチドウレスク、コブノー、グロドノ、ブレストリトーフスク、ドウインスク、バラノーウイッチ、ドウブノー等の諸要塞を以て獨墺方面を防禦す）

吾人は獨佛對抗の狀態を以て、直ちに移して我が朝鮮に及ぶものと做すには非ず、唯だ將來の事を考へ、並びに清國東三省に於ける配兵の用意と、露領ポシエット灣の防備及び浦鹽斯德が、將さに改修せられて一大要塞たらんとし、且つ黑龍江鐵道完成し、露國の輸送に一大便宜を加へ來り、而して其の極東常時の配兵が百萬に達するの事情とを併せ考へて、朝鮮の事必らず忽せにす可らざるを感ずると最も切なるのみ

（四）

清露兩國に對する我が朝鮮國境に於ては、果して獨佛の如く堅牢不拔の要塞を築くべきや否や、兎も角も朝鮮をして完全なる其の防備に由て、能く治平を保持せしむるとは、經世家の深く考慮すべき要點なり

南滿洲に在ては、多大なる我が利權を防護するにも、常時僅かに一師團の兵を配し得るのみ、ポーツマス條約及び日清條約に於て、是れ以上を置くことを許さゞれば也、然るに滿洲總督は現に六師團を配置し、更に增して十師團と爲さんとすといふ、日本兵如何に精鋭なるも、衆寡は勢ひ敵すべからず兵の要は機先を制するにあり、假令防禦のみを目的とするも、尙ほ進んで敵兵の未だ集中せざるに先んじて之を粉碎するを要す、獨逸の佛露同盟軍に對する、數に於て素より相較するに足らざるも、機先を制して第一に佛軍を未だ集中せざるに掩擊して之を挫き、更に東方に轉じて露軍に當る戰略なりといへり、機先を制せんと欲せば、第一に能ふ限り多數の軍隊を國境に配置するの外、尙ほ其の輸送機能を十二分に發揮せしめ、且つ輸送機能の完全を支持せざる可らず

今實地に視るに、朝鮮の防備を完全ならしむるがために、出兵の輸送を十二分ならしめんと欲せば、第一に最も海上、殊に朝鮮海峽並びに日本海の制海權を完全に保持せざる可らず、兵員、軍器、及び糧秣等を輸送するがため、朝鮮海峽に由るの外、尙ほ小樽、青森、敦賀、舞鶴の各港よりも、海路輸送の必要あれば也

第二には汽車の輸送を十分ならしむるを要す、唯だ東海道の一線のみにては、平時の貨物輸送にも停滯を免かれず、且つ少しく强風猛雨あれば、直ちに故障遲滯を來すを常とす、殊に日本本土と朝鮮とには、其の軌道を異にするがため、機關車及び車輛を共通し得ざる不便有り、況んや又朝鮮の道路甚だ不良にして、車馬の往返甚だ不便なるをや、軍隊集中に不便なる、實に言語に絕すと謂べし

故に萬一の虞に備へて、平素成るべく完全なる準備を爲さんとせば、朝鮮に多數の守兵を配置し、且つ之に要する一切の軍需を積畜するの外あらず、世上の朝鮮防備を論議するもの、果して茲に着眼するや否や、吾人は先づ敢て之を問はんと欲す

（五）

孫武の曰へるが如く、兵は實に兇器也、近く日露戰役の實驗に徴するも、物質界の進歩に伴ふて、戰爭の慘禍彌ゝ深度を加へ來れり、現に遼陽の一役のみに於て費せる砲彈の數は、日清戰役を通じて費せる砲彈と匹敵し、出兵總數各百萬、生靈を殺すと實に二十萬、不具癈疾となりし者數ふ可らず、軍費に至ても、直接戰費となれるもの、日本は二十億、露國は三十億に及ぶも、未だ對手に致命傷を與ふるに至らざりしと、實にノヴオヴレミア記者の言へる所の如し、故に苟くも經世の識慮あるものは、戰爭の慘禍を避くるに鋭意し、此がため寸時も列國の均衡を破るを欲せざる也、即ち軍備を以て平和の保險と爲すの思念彌ゝ深きに至れる也

昨年四月一日墺匈國大藏大臣が議會に於て演說せる所によれば、開戰の曉、恩給及び損害賠償を加算せざるも、尚ほ兵員一人の一日に要する所五圓宛なるを以て、六ヶ月間二百萬人の兵員を用ふとせば、約十八億圓を費さゞる可らずといへり、又或る學者の計算によれば、將來獨逸にして宣戰を公布せん乎其の最初の六週間內に費す所實に十二億圓に達すべしといひ、又或るものは、戰爭若し六ヶ月に渉らば假令戰勝を得るも尚ほ三十億圓を損すべしといふ、若し戰爭のため、軍費以外國民の損する所、全國財

産額の一割を損すとせば、英國の如きは實に八十億圓を失ふべしと斷定する學者あり、佛國の如きは、彼の一千八百七十年の戰役に由て、償金廿五億圓の外、尚ほ四十億圓を損せりといはずや、軍備果して平和の保險ならば、保險料金の如き素より太だ惜む可らず、之を惜むは愚の極のみ

苟くも朝鮮を併合せずんば則ち已む、既に併合したる以上、能く朝鮮人を統治して以て我が仁義を全ふし、彼等を平寧康福ならしめて、以て天地の化育を贊襄すると共に、其の版圖を完全に保持して寸分だも之を失墜するが如きとなく、以て我が日本の名譽を支持せざる可らず、此がためには如何なる保險料をも吝む可らざる也

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

或は曰く、漫りに他國に關する軍備を口にせば、列國の感情を害するを奈何せんと、然れども怯むを休めよ、眞率に國家のとを論ずるもの、如何ぞ常に翩々婆娑たる美人を相手に外交的辭令をのみ弄する夜會交際家たる可けんや、看よ、獨逸人は其の著書に於て、瑞西の中立を破られし時、及び伊太利が他年獨逸と敵對する時あるを假想して、之に處すべき方法を研究し論斷せるとを、現に三國同盟の一楔子たる伊太利とすら反目の場合あるを推想して、侃々乎として揚言せるにあらずや、維也納に於ける列國會議の承認せる瑞西の中立をも違犯の時あるを公言せるにあらずや、此の公言の裏面には、獨逸も亦場合に由て自から此の中立を破るの意思あるとを暗示するものに外ならず、若し吾人の言議を以て露骨に過ぐると做すものあらば、吾人敢て異言を立てず、唯だ識者が深く新版圖の防備を嚴にして、以て他と均衡を破るとなく、能く平和を完ふせんとを祈るのみ

獨逸帝國論

法學博士　戸水寛人

一體獨逸といふ國は近頃出來た國であつて元はあゝいふ風に帝國となつて居なかつた。誰でも知つて居る通り、獨逸にはいろ／＼の小國があつたのであるが、普魯士が率先して他の國と共にあゝいふ帝國を作り出したのである。普魯士が他の國を率ゐてあの帝國を作るに至る迄は餘程奮勵した者である。フレデリック、ウヰリアム一世の死んだ頃には、普魯士の人口は三百萬位しかなかつた。然るに其常備軍は八萬の多きに達した。人口三百萬に對して八萬の常備軍。比例の上からいへば今日の大抵の國よりも兵隊の數が多い。其次ぎにフレデリック大王が普魯士の政治を行ふことになつた時に、大王は更らに一層軍備の擴張をなした。大王の死んだ頃は普魯士の人口は五百五十萬であつたが、其常備軍は十九萬五千になつて居る。人口も二倍近くに殖えて居るが、常備軍は二倍以上になつて居る。日本の現役兵は現在廿四萬であつて、國民黨の連中などは多過ぎるといつて居るが、人口に對する兵隊の數からいへば、普魯士とは殆んど比例にならない。フレデリック大王は斯くの如く軍備を擴張し、而して其傍ら又文學を奬勵して居る。大王が佛蘭西からヴォルテールを聘してポツダムの宮殿に置いた事は誰でも皆知つて居る。ヴォルテールの住んで居つた室は今でも猶

現存して居る。大王が斯くの如く學者を優待したのみならず、全國の學問を振興するには非常に力を盡した者だ。今日普魯士が獨逸聯邦内の牛耳を執るのは固より偶然でない。フレデリック大王實に其基礎を作つて置いたのである。而して其遣り方を見るに先づ軍備を擴張し且つ又文學技藝を盛んにした。然し今日の獨逸人は斯くの如き大帝國を以て滿足せず、尚更らに一層其勢力を世界に增進しやうと掛つて居る。即ち獨逸帝國は墺太利をも其中に加へんと欲して居る。墺太利に於ては獨逸人の數が先づ九百萬位のものだ。スラーヴ人の數は更らに一層之よりも多い。然しながら其等スラーヴなるものは悉く同一の言葉を話し同一の種族に屬して居るのではない。スラーヴの中にはポーランド人もあり、ボヘミア人もあり、クロアチア人もあるのである。此等はスラーヴの中に屬しても互に言語を異にして居る。クロアチア人の如きはセルビア人と同じ言葉を話して居る。それでスラーヴ人なるものは數が多くても聯合の力が極めて薄い。そして智識の程度も亦獨逸人よりも劣るから、墺太利帝國に於ては獨逸人が牛耳を執つて居る。匈牙利に於ては獨逸人種の數は僅かに二百萬である。之に對して所謂マギアールなるものは八百萬以上も居る。其外に羅甸人種たるルーマニア人も居るし、其他又スラーヴ人も居る。だから獨逸人は匈牙利に於ては未だ大勢力を有して居る譯でない。けれども兎に角獨逸皇帝及び獨逸の主なる人々は、墺太利に於ける獨逸人と、匈牙利に於ける獨逸人とを聯合せしめたい希望を持つて居る。匈牙利に於ける獨逸人は此聯合に加入し得るや否や疑問であるが、墺太利に於ける政治及び社交の牛耳を執りつゝある獨逸人は、固より此同盟に加入する考を持つて居る。墺太利に於ける最も立派なる新聞といへば誰でも指をノイエ、フライエ、プレッセに屈する。此新聞は獨逸人が同盟の機關である。墺太利の現皇帝はフランツ、ヨセフであるに拘らず、此新聞は殆んど之を度外視して盛んに獨逸人大同盟論を唱へて、皇帝は之に干渉しない。斯くの如き奇觀を呈して居る。而して聽く所によれば

此のノイエ、フライエ、プレッセと伯林の獨逸官憲とは多少の聯絡があるといふ事である。斯くの如くして墺太利に於ける獨逸人と獨逸内の獨逸人と相聯絡するの考が、着々其歩を進めて居る。而して其背後には例の有名なるカイゼルの居らるゝ事は論を俟たない事である。此等の獨逸人は、露西亞人がバルカン半島に於て勢力を擴張するとを望まない。千八百七十七年から八年に跨つて露西亞人は土耳古と戰爭をして、戰勝の結果サン、ステフアノの條約を結んだ。之れは千八百七十八年の三月三日である。さうすると列國が之に干渉して墺太利の名義を以て之に故障を持込んだ。此時墺太利の背後には獨逸のビスマルクがあつた事は何人も知つて居る所である。列國が此條約に故障を申込んだ爲めに伯林會議を開くことになり、同年七月十三日に決議をなした。此決議の結果バルカン半島に於ける露西亞の勢力が大いに減殺せられた。此伯林會議に於てビスマルクが露西亞の贔負をしないというて、ゴルチヤコフは非常に憤慨して居る。けれども、ビスマルクは恐らく獨逸人一般の意向を代表してゴルチヤコフに同意を表しなかつたのである。今日に於ても矢張り墺太利の背後に獨逸が居るのであつて、墺太利を利用してバルカン半島に獨逸人の勢力を扶植せんとして居る。だから先年土耳古政府の同意を得て、墺太利がノヴイ、バザールの鐵道を敷設することにした。ノヴイ、バザールはセルヴイアとモンテネグロの間に横はる所で、州の名も首府の名も同じくノヴイ、バザールである。墺太利がボスニアの首府たるサラエヴオからノヴイ、バザールを通過してミトロヴイツアまで鐵道を敷設する計畫である。而して其一部は今已に出來て居る。之が全部出來ると墺太利の汽車がボスニア。ノヴイ、バザールを通過してミトロヴイツアに達し、直ちに地中海のサロニカまで出て行くことが出來る。如何となればミトロヴイツアからサロニカまでは已に鐵道が出來て居るからである。サロニカは世人の知るが如くマセドニアの一つの港であつて土耳古國内に於てはコンスターチノーブルに次ぐ所の大きな町である。若しコン

スタンチノープルを東京に比することが出來ればサロニカは大阪にも比すべき商業繁盛の地である。そこで露西亞人は又此鐵道に對抗してバルカン半島を横斷する所の鐵道を考へて居る。それは露西亞のオデッサからモンテネグロのアンテヴアリまで續く鐵道である。此鐵道はルーマニア、ブルガリア、及びセルヴイアを通過すべきものであるので一部は已に出來て居る。若し此兩鐵道出來るとすれば互にクロッスすべきものである。斯くの如くバルカン半島に於ては露西亞人と墺太利人と互に競爭するのであつて、そして墺太利の背後には獨逸があるといふ事を知らなくてはならぬ。

之を要するに今日の獨逸人は彼の大帝國を以て滿足せずして更らに墺太利をも獨逸の中に入れて、歐洲東部に於て大勢力を振ふ積てある。若し此計畫が成功すれば北はバルチックから南は地中海に跨つて獨逸人が勢力を有する事になる。加之獨逸人は又世界に於て澤山の領土を得やうとして居るのである。是は獨逸人種の繁殖に原因して居る。獨逸に於ては一年に九十萬程人口が増加する。日本人は年々六十萬位増加するとしても獨逸人口の増加に比すれば三分の二に過ぎない。獨逸人種は斯くの如く其繁殖力が强大である。此勢で進めば獨逸人種は直ぐ倍になる恐がある。何處かに殖民しなくてはならぬ。然るに若し殖民する個人の意向に一任して置けば或は英吉利の領土に移住し或は佛蘭西の土地に移住して遂には英吉利人、佛蘭西人になる恐がある。そこで獨逸人の方では諸所に殖民地を得ることを考へた。そしてビスマルクは一般の意向に基いてサモアを取つた。現皇帝の時代になつても何人も知る如く亞弗利加に於て種々の領土を取つた。阿弗利加の一番よい土地は已に英吉利が取り、次は佛蘭西が取つて、獨逸は後れ馳せに取つたから一番惡い土地しか取られなかつた。けれども獨逸の領土の面積も餘り少くない。東海岸にも西海岸にもある。今尙獨逸に於ては同じ方針を繼續して世界に覇を稱せんと欲して居る此事を遂げるについては海軍擴張が必要である。强大なる海軍を有するにあらざれば此等の殖民地を繁榮せ

しむることが出來ない。そして出來得べくんば英吉利の勢力を打破したいと思つて居る。若し之を打破すれば世界に廣大なる領土を有することになる。之れは獨逸人の宿望である。

今日の獨逸の陸軍は決して小ではない。獨逸の人口六千萬に對して六十萬の常備軍を有つて居る。之をフレデリック大王の陸軍に比すれば人口に比しては少い然しながら日本の陸軍に比しては人口の割合上非常に多い。日本は人口五千萬に對して廿四萬しかない。日本は五十萬の陸軍を有するにあらざれば獨逸と比較を取れない。それ位獨逸は强大なる陸軍を有つて居る。それにも拘らず其傍らに又海軍を擴張しつゝある。之を擴張するに當つては先づ海軍協會(ネーヴエー・リーグ)に重きを置いて居る。之は政府の拵へたものではなくて、人民の拵へた一つの團體である。そして人民一般の海軍に對する智識を盛んにすべき機關である。そして此協會の背後には獨逸皇帝の居らるゝ事は誰も知つて居る。斯くの如き海軍協會は所々にある。英吉利にも伊太利にもあるけれども獨逸のが最も盛んである。その海軍協會が盛んな爲めに獨逸人の海軍熱が日に昂まる。それだからして獨逸皇帝が議會に海軍擴張案を出せば獨逸の議員は之に賛成せざるを得ない。若し賛成せぬと獨逸人一般の攻擊を蒙ることゝなる。要するに獨逸人は自分の勢力を海外に發展することには餘程心を用ゐて居る。斯くの如き事をするについては又いろ／＼の根據を造る。即ち教育を盛にし及び製造業を盛んにすることに力を用ゐて居る。現今學術の最も盛んな國は何處かといへば何人も獨逸を推す。工業に於ては獨逸よりも先進國たる英吉利が盛んである。然し獨逸人は學術を應用して今や英吉利と競爭を試みて居る。一例を擧げていへば、獨逸人はクリスマスに用ふるクリスマスカードを造つて英吉利に輸出して居る。英吉利でも無論クリスマス、カードを作れぬ事はないが、今や獨逸人の造つたものに壓倒されて居る。以て獨逸工業の進歩の程度が察せらるゝ。其外獨逸人の工藝品は追々英吉利に入つて來る恐がある。そして英吉利の方からは

獨逸に入つて來ない。何故といふと、獨逸人は外國品に對して高い關税を課して居るからである。例へば毛織物に對しても非常に高い關税を課して居る。英吉利に於ても從來の自由貿易論を抛つて獨逸から來る工藝品に關税を課せよといふものがある。それに關聯してあの有名なチヤムバレンの如き、英吉利の本國と殖民地との間に關税同盟を結ばなくてはならぬといふて居る。英吉利の本國と殖民地との間に關税を取らずに他の國から殖民地に入るものには關税を課せなくてはならぬといふ論てある。夫れで今日に於ては獨逸は英吉利に對して競爭を試み、英吉利も亦主として獨逸に對して國防を講じて居る。其結果獨逸て澤山のドレッドノートを造れば英吉利に於ても又之に匹敵する丈けのドレッドノートを造り。英吉利てドレッドノートを增せば、獨逸も其れを凌駕する丈けのドレッドノートを造る。英吉利が飛行機に力を用ふれば獨逸もやるといふ事になつて居る。今後世界の情勢が如何に進むかは固より計ることが出來ないが恐らくは獨逸の勢力が駸々乎として進むであらうと思ふ。日本は今日英國と同盟を結んで居るけれども此同盟は果して幾年續くか豫知し難い。今直ちに英吉利との同盟を破るべしなどいふ暴言を吐くんぢやないけれども、日本の將來の事を計畫するに當つては、英吉利の勢力のみを眼中に置かずして獨逸の勢力も亦眼中に置かねばならぬと思ふ。

試に支那に於て獨逸人の施設する所を見れば、獨逸の商人は盛んに支那に於て旅行を試みて支那人の嗜好を研究して居る。而して其嗜好に投ずる品物を賣り込まんと欲するのである。先年獨逸人が新式の剃刀を山東省に於て賣り込んだ事がある。其剃刀は從來支那にあつたものよりも鋭利である。而して其價も亦格別高くない。之が爲に獨逸の剃刀が非常に賣れた事がある一事は萬事である。斯くの如き遣り方を以て獨逸人が支那に於て商業を營む積りである。現今の狀態をいへば英吉利人が支那の商權を握つて居るといつてもよいが、他日に於ては又支那に於ても獨逸人が英吉利人と

拮抗することになると思ふ。一面から考へれば獨逸は日本の商敵であるかの如き觀があるけれども、支那から獨逸人の勢力を除くといふ事は恐らく不可能と思ふ。然らば日本人と獨逸人と此點に於て提携することも得策かも知れぬ。此等大いに識者の注意を要する點と思ふ。(完)

國民道德の革新

マスタア・オヴ・アーツ　村田勤

現今我邦の諸學校に行はれて居る倫理敎育の効果の擧らないといふことは往々吾人の耳にするところである。滔々たる世界の新思潮に動かされつゝある現代の青年を古い道德の形式に嵌め込まうとするのがそもそもの誤りであるまいか。吾人は新時代の道德を建つるに先つて舊時代の道德を根柢から吟味する必要があらうと思ふ。

忠孝道德の尊重すべきことは吾人も能く之を認めて居るが、果して之を以て道德の標準とすることが出來やうか。吾人は此點に疑なきを得ないのである。仁愛とか正義とか無上の善とか幸福とかいふ事を標準として人類の道德的行動を解釋せんと試むるやうに、吾人は忠孝を標準として人類の有らゆる道德的行動を解釋することが出來やうか。君に忠であるといふ一事が果してその人の品性がすべての點に於て善であり義であり又高尙であることを保證するであらうか。父母に孝である者は果して夫婦仲も良く兄弟に親切で朋友に信實で社會に對しても能くその義務を盡す者と斷定することが出來やうか。何人も此二問に對して明かに然りと確答することは出來まい。戰爭の際目覺ましい振舞を以て殊勳を立て、凱旋後金鵄勳章を授與されたほどの勇士が、親に心配をかけたり、詐僞取財の大罪を犯

したり、甚しきは竊盗を働いたり姦通をしたりするやうな事を折々耳にすることがある。また極端に氣儘な分らずやの老爺の命令に絕對的に從はうとする孝行息子が、罪も過ちもない花嫁をたゞ家風に合はぬといふ單純な理由の下に離緣してしまふ例が世間には幾らもある。それどころでなく平生學生の前で忠孝の講釋をしたり人民に向つて忠孝主義を鼓吹して居る人々が果してどの點から見ても善良高潔、萬人の師表として耻しくない方々であらうか。吾人はたしかに世間その人に乏しからぬことを信じては居るが、かゝる人物は反て平生忠君を喋々しない仲間に多いやうに思ふ。〇〇と緣故淺からぬ某官省は長たりし人又は長たる人又その幕下の面々は八面玲瓏玉のやうにあるべき筈であるが、不幸にして吾人の眼にはさう映じないのである。寢ても醒めても忠義の念に驅られて一身一家一族の利を圖るやうの俗念露ほどもなく、虛榮を求めず、不義の利を惡み、豪奢淫樂を視ること蛇蝎も啻ならざる人々のやうにも受取られないのである。予の僻目かも知れぬが、それと正反對の人物ではなからうかといふ疑念の起ることを禁じ得ないことがある。かくの如く具さに考へて見ると、忠の一念が行住坐臥彼等の生涯を律して居る原理原則であらうとはどうしても思はれない。一面から見ると忠は彼等の手段であつて目的でなからうかとも疑はれるのである。貨幣や紙幣にさへ贋物のある世の中だから、人間の中に僞物のあるのも無理はなからうと思ふ。忠孝並立の困難は平氏第一の偉人重盛の親しく經驗したところである。忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずといふヂレンマに出會つたものは重盛一人に限らぬ。昔しから澤山あつたことであらう。予は遂に忠臣孝子必ずしも品性完全道德卓越の人でないといふことを決論せざるを得ない。また忠孝だけを以て世界人類の道德的標準と爲すことは勿論不可能であるといはねばならぬ。

抑も忠孝は封建時代の社會制度に能く當嵌まつて居た道德である。その時代でも忠の方は只武士階級に限られて居たやうに思ふ。町人百姓の社會でも幾分かは

その間接の影響を蒙むつて之を主僕の間柄に適用しやうとして居たのであるが、とても君臣の關係のやうには旨く行なかつた。忠といひ孝といひ何れも報恩の念を土臺として居る。平素君の祿を食んで居る者はその御恩に酬ゆる心掛がなければならぬ。父祖の受けた恩は子孫の代になつても之を忘れてはならぬ。ましてその子孫も亦君恩に衣食するに於てをやてある。まさかの場合には生命を棄つることを厭はない。著しい功勞のあつたときは昇格增祿の恩典がある。これは君主がその功臣に對する報恩の一種と見るべきである。報恩の念の外に、名譽心や競爭心も加つて來て臣下の活動を刺擊した結果、終に武士道の發達を見るに至つたのである。忠を武士道の神髓として見るときは實に此上もない道德の標準であつた。しかし君を戴いて居る武士以外には當嵌まらぬ道德である。同じ士でも浪人となればもはや忠の目的がなくなるのである。忠を盡すべき對象がないのである。況んや自己の努力に由て獨立生活を營んで居る百姓町人に於てをやてある。勿論彼等の中には嘗て主人を持つて居た者もあらう。それらの者はやはり舊主人の恩を忘れぬやうにした。又分家は本家に對して相當の禮を施した。但し此種の關係は君臣の夫れのやうに明瞭確實てはなかつた。時の運て本家よりも分家の方が榮えてアベコベに本家を助けた例もあるし、主僕が社會上の地位を顚倒した場合もあつたから、君臣關係を以て平民道德の基本とする事は出來なかつた。只漠然と互に義理人情に背かぬのを世の習としたのであつた。忠の觀念を博く民間に傳播した點からいへば、吾人は義太夫と芝居の功果の偉大なりしことを特筆して置かねばならぬ。忠を理想化して藝術の上にあらはし、之を一般人民に曉り易からしめたものは實に近松門左衛門竹田出雲以下少數の淨瑠璃作者の功勞に歸せざるを得ないのである。

封建の時代武士階級の間に行はれた忠の道は上述の如く極めて明確適切のものであつた。人間の生涯に取りて第一の必要條件たる生活問題を土臺とした道德系統の强固なるべきは殆ど論を待たないのである。しか

しその時代の忠は日本六十餘州の各藩の士が擧つて德川將軍一人に忠を盡さうとしたのではなく、只各人が事ふるところの君に忠ならんことを期したのである。勿論藩主に對しては同藩士が諸共に忠の義務を負ふて居たのではあるが、家老がその君に對した心持と家老の家に養はれて居る足輕がこれに對した心持の間には少からぬ相違があつた。但し主家の名譽幸福は最下層の臣僕に至るまで多少之に與つたのであるから、利害休戚を同ふすることは出來た。

維新の革命に由つて封建制度は廢せられ、四民平等の世となり、各家各人は父祖傳來の財産を有せざるかぎりは自らの才能と勉勵とに由て衣食の道を立てゝ往くべきことゝなつた。特殊の社會の組織を土臺として一階級の間にのみ專ら維持されて居た忠の觀念に大變動を生じたのは自然の數である。今や三府四十三縣を首として其他の新領土に住する約七千萬人の人民は一天萬乘の我が大君の統治を受けて聖代の恩惠に沐浴して居るのである。上は宰閣に參して輔弼の重任に當つて居る國務大臣より下は千島の端處の漁民や臺灣の山奧に住む蠻民に至るまで皆至尊陛下の御威德に服して居るのである。況して先祖代々日本の國土に生息した我々が陛下に滿腔の敬意を表すべきは言ふにも及ばぬことである。しかし吾人の胸裡に存する忠君の觀念と封建時代の各藩の武士がその藩主に對し或は藩主及幕臣等が德川將軍に對して抱いて居つた忠君の觀念の間に徑庭あることは誰しも自覺せざるを得ないのである。勳位官爵を有する者及び官途に就いて居る人から見れば、成程封建時代の君臣の關係に類したものゝ今尙存するのを認めることが出來やう。しかしその人員は七千萬の臣民中の何萬何分の一にも當らない。尙官吏について考へて見ても、彼等の大多數は勞力に對する報酬を受けるのであつて、眞に君恩に衣食して居ると自覺し得るものは極めて少數である。これは世界の大勢が然らしめたので少しも惡いとてないから、悲觀するには及ばぬ。たゞ忠の觀念を新しい土臺の上に据え更へねばならぬ。新時代の要求に應ずる新しい解釋を之に

下すべき必要が起つたのである。新しい學問を修め新しい思想の中に養はれた新日本の青年を傳說的道德的桎梏を以て束縛せんとするのは愚の至りである。啻に愚策である計りでなく、甚だ有害危險なやうに思ふのである。近頃政府が危險思想の取締に力を盡して居るさうであるが、その取締法が宜しくないと却て反對の結果を生ずる恐れがないとも限らない。日露戰爭の影響としてロシアは兎に角立憲國になつたが日本はアベコベにロシア式に後戻りしつゝあるやうに思はれる。思想言論の取締り方は正さにロシヤ式の適例である。均しく立憲政體ではあるが、日本と英國との間には千萬里の懸隔あるやうに思ふ。

將來の忠君思想はその基礎を愛國心に求むべきである。愛國心は家鄕を愛する人間の天性と共同の存在とその利益を保護せんとする精神とに基いて居るから、これほど鞏固博大な基礎はあるまいと信ずる。萬世一系の皇室に對する崇敬の念は深遠卓牢殆ど第二の天性となつて居るから、將に擴張され進化されつゝある新しい忠君思想を前に言つた愛國の精神と結び付けたら邦家の前途は極めて安全であらう。之に反して或政治家等の唱ふるが如く舊式の忠孝道德を以て狹隘なる國家主義＝政府萬能主義を維持する方便に用ゐんとするは危險千萬である。華族は皇室の藩屛なりといふとは屢吾人の耳にする語であるが、熟考へて見るとそれこそ反て甚しい危險思想である。貴族高僧を以てその藩屛として居つたルヰ十四世の子孫はどうなつたか。十八世紀の末に破裂して佛國に於ける第三階級の大反抗がルヰ十四世の專制主義の結果であることは凡そ西洋史を繙いたものゝ皆首肯する點である。華族を皇室の藩屛と爲すといふ語の中にはたとひ一般人民を敵視するまでの考を含めずとするも、彼等を劣等視し若くは外變視する觀念を含めて居るといはねばならぬ。此の如きは寧ろ不祥の語で舊時代の殘物と見ねばならぬ予は信ずる國家百年否千年萬年の最安全策は七千萬の全臣民を以つて皇室の藩屛と爲すにあることを。論より證據、英國の皇室は正さに此主義に由りて萬古不動

の地位を維持しつゝあるてはないか。多數の人民中に少し位了簡違ひの徒が顯はれたとて別に驚くにも足らず周章てるにも及ばぬことである。その爲に有らゆる思想言論の自由を禁じて新思想を蛇蝎視するは反て危險至極てあらうと思ふ。

舊い忠孝主義を擔ぎ廻る國粹保存論者は意外な勁敵の背後に現はれて來たことに氣付かない。彼等は日本には日本特有の道德系統があつて歐米諸國のものと全くその選を異にして居るといつて、得たり顏であるが、此事は外國人に少からざる驚愕を喫せしめた。就中日本贔負の歐米人を驚かし且失望させたのである。即ち日本人の道德觀念の中には排外的分子を多量に含んで居る、また含めやうと故らに努めて居る。日本人は子々孫々外國に住んで居ても彼等は故國を愛し故國の君に忠ならんことを是れ事として、その住んで居る國を愛せず且その國の主權者に不忠てあらう。果して然らば日本人は永久に同化しない人民と認めねばならぬ。米國へ移住した伊太利人や愛蘭人やその他の外國人は國籍を移すと同時に米國の人民となつてしまう。一二代も經てば全くの米國人になり了はるが、日本人にはこれが出來ない。表面丈はその國風に從ひその國語を話し滑かに交際もするが、一朝事ある時は油斷がならない。仇敵となつて故國の爲に盡すてあらう。それては日本人の移住を許すことは國家にとりて危險千萬てあると心配し始めた。丁度太平洋の彼岸にこんな考が起りかけた際、日本には外國にない一種特別の國家道德といふものがあることを演べ立てたから堪らない。彼等の言論は恰も世界の排日論者の說に裏書したやうなものてあつた。すてに重大な經濟的の理由ある上にかやうな屈强な口實を排日論者に提供したのてある。サー・エドウヰン・アーノルドやラフカヂオ・ハーンの晩年の著書に由つてうすうす此點に杞憂を抱いて居た人々は、更に一段の好材料を捕へたのてある。排日論は獨り米國の西海岸に止まらず同盟國なる英領殖民地にも唱えられて居る。夫れ位てすめば良いが、追々他の諸國に蔓延して世界の反感情を蒙むるやうになつた

ら由々しき一大事である。此點から考へても吾人は鎖國攘夷主義の行はれた時代の狹苦しい忠君の觀念を超脫すべき必要がある。開化した忠君思想は決して排外主義を豫想(プリサツポーズ)するものでない。開化した愛國の精神は家庭を愛する觀念とも並立し得る通りに、世界主義とても兩立することが出來得べきものである。今の世に鎖國攘夷式の舊道德を振り廻はして世界各國の人々に惡感情を與へたり誤解をさせたりするのは愚の極みである。

孝は忠よりも普遍的の道德である。又一段深く人間の本能に刻まれて居るやうに考へられる。勿論親が子を愛するほどには廣くない。子が親の恩に報ゆることを知らない下等動物でも親は子を愛する本能を具へて居る。昔しから鳩に三枝の禮あり烏に反哺の孝ありといふが、之れは例外である。恐くは人間が自然を美化して見たものであらう。孝道の起つたのは人間が動物的狀態からよほど進化した後の事であらう。親に對する義務を重んずることは理性と人情の發達した結果と見ねばならぬ。文明の今日に於ても各國人が孝を視る上に輕重の差がある。而もその差が甚しいのである。

孝の觀念も忠と同じやうに報恩の念に基いては居るが、元來相關的(コリレーチヴ)の義務である。親が子を愛して養育してくれた恩を子が老いたる親に報ゆるといふのである然るに封建時代になつて君主の權力の發達するや家庭でも親の權力が强くなつた。恰も臣が君に服從する通りに、子は親に對して理が非でも服從せねばならぬといふ說が勝利を占めた家族主義の土臺が確立され、子孫は父祖の業を世々にし、父祖の功又は遺產の御蔭で衣食して居つた時代には、家長の絕對權も通用したのであるが、今日のやうに立憲政體が行はれ、各人皆その力量又は勤勞に賴つて衣食し、權利義務の範圍が明確となりし上は、昔のまゝの孝道を維持することは困難であらう。いつまでも舊時代を夢みつゝ絕對的服從をその子等に迫らんとする兩親と、新時代の自由思想を呼吸し單純な家庭の幸福を充分に享樂せんとする子女等の間に、衝突を生ずるは止むを得ない結果である

まいか。吾人は決して孝道を蔑視するのではないが、之を改良する必要があらうと思ふのである。予は夫婦を家庭の基本とする西洋諸國に老父母を冷遇虐待するもの丶多いことを見て戰慄すると同時に、我國舊式の家庭組織の中に幾多の波瀾と不幸の原因となるべきもの丶伏在するのを見て改良の必要を叫ばざるを得ない。近來の新聞紙上に親子兄弟叔姪などの間に訴訟犯罪などの頻繁に起ることに徴しても能くその弊風の一斑が察知し得らる丶やうに思ふ。國家がすでに立憲政體となつた上は家庭も亦之に倣ふべき筈である。教育家がいかに舊時代の家族主義を維持せんことに努めやうとするも、時勢は之を容さぬ。舊時代の法律は君や親に對する臣子の犯罪を他の人間に對する罪よりも幾倍も重くしてあつた。予の郷里で親子喧嘩があつた。子が親を蹴つたが急所に觸れたと見えてそのまゝ死んでしまつた。その子は町中を引廻はされた揚句磔殺されたのである。今ならば情狀酌量の上長くとも十年位の禁錮で濟んだかも知れぬ。現今我邦の民法は個人の權利に重きを置き且人權の平等を認めて居る歐米の民法に基いて造つたのであるから、舊時代の家族制度は既にその存立の基礎を失つたのである。恐しいものを並べた俚語に地震、雷、火事、老爺といふことがあるが、消防術が行屆き避雷針が發明され耐震家屋も金と相談で出來る今日に於て、老爺のみその權力を振り舞はすことは不可能であらう。新時代の孝道は老爺の暴威を抑ふると同時に何歳になつても親の脛を嚙つて居るノラクラ息子を減少する功德があらう。双方の獨立心を增し責任を明かにする結果、若隱居の弊を一掃し財產爭ひの紛議を鮮くすることゝならう。かくして國民の活動力を增進することは喜ぶべき進步であらうと予は信ずる。

今日のやうな商工業隆盛の世に於て尊重すべき道德はすべての人々が日常奉行すべきものでなければならぬ。當局者も口を開けば殆ど口癖のやうに躬行實踐の必要を唱へて居るが、實際にはさうでない。普通に唱へられて居る忠孝の理想は之を日常生活に當て嵌める

ことが甚だ困難てある。忠と孝とは兩つとも非常の時に行ふべき道德てあるやうに考へられる。敢て問ふ七千萬の人民が君に忠を盡くし得べき機會のあるはどんな時代てあらうか。即ち建武中興の代とか、維新革命の際とか、近くは日清日露の役とかいふやうな非常臨時の場合に限られて居るやうてある。勿論理論上から考へて見れば軍人が平時に於てその職務を盡すときにも戰時と同樣の心がけを持つべき道理てある。現に佐久間艇長の崇高なる奉公的精神はその適例てある。しかし佐久間大尉の遭難事件も矢張非常の場合といはねばならぬ。況して軍職以外官途以外の一般人民に於ては、盡忠の精神を日常生活にあらはすことは頗る困難てある。前にも述べた通り戰時の忠臣が必ずしも平時の良民てないといふ實例が澤山ある。命がけて大功を立てた烈士にして操行修まらず日常道德に於て殆どお話にならぬ人間もある。

今一つは孝の事てあるが、我邦ては孝子の例を求めると、必ず非常稀有の事件を擔ぎ出すに定まつて居る所謂二十四孝中の人物の如きがそれてある。近くは澤柳氏の『孝道』の中に引例された孝子等も同樣てある。例へば足腰の立たぬ老母に二十年一日のやうに能く事へたとか、無理無體な事を命じた父の言に背かなかつたとかいふ類てある。それて孝子といへば大體人間の型が一定して居るやうてある。固より敏腕家てなく、有爲の人物てもなく、青雲の大志あるものてもなく、又金持ちてもない。貧乏て正直て社會國家の進運とは先づ沒交渉といつた人達に多いのてある。この種の人々を引例として現代青年の心を動かすことが果して出來るだらうかどうか。甚だ覺束ない次第てある。今の道學者は逆境の孝を勸めて順境の孝を重んじない。消極的の小孝を賞して積極的の大孝を賞すべきことを知らぬ。若しかゝる意味の孝子たらんことを期するなら國家社會に有用の人物とならうといふ大望を棄てなければならぬ。世間には身を立て道を行ひ名を後世に顯はして居る大孝子が澤山あるが、道學者は彼等を孝子の列に數へこまないのてある。それてあるから孝も亦

忠と同じやうに日常道德たる價値を失ふてしまつた。否に日常道德てないのみならず、忠孝の二つを以て人間品性の全部を絶えず律する原動力とすることが出來ないのてある。若し夫れ忠孝の二字を存して道德の根柢たらしむる事が出來るとしたら、即ち大孝大忠主義てなければならぬ。大孝の事はすてに前にいつたが、大忠とは孔子のいはゆる忠恕の忠てある。文天祥の言つたやうに上は君に事へ下は友に交はる内外一誠終に能く長久ならんの意味てある。菅原道眞が心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らんといつた心てある。御製の御歌にあらはれて居る

めにみえぬ神のこゝろにかよふこそ
人のこゝろの誠なりけり

の意味てある。かくの如く廣義に理解するときは忠を以て天意人道と見ることが出來る。忠とは決して君恩に報ゆる丈けの心得てなく、國家主義の手段てもない之を裏返せば此大忠の心あつてこそ始めて君にも國にも本當の忠を盡すことが出來、朋友にも忠信なることが出來、外人と貿易を營みても信用を博することが出來るのてある。世の道學者は意をこゝに致さないて、忠を或目的（時として政略的の）に當て嵌めやうとするから此高尚な道德は生命なき形式となり或は狂暴なる一時の感情に了はるのてある。

先年歐米諸國を漫遊された床次氏が歸朝後公にされた歐米小感の開卷第一章に盛に宗教的信念の必要を說かれた事は吾人の寧ろ意外として驚いた點てあつた。是れ即ち炯眼なる氏が日本人の道德が歐米先進國の夫れに比して劣るところがあることを見出された結果てあらうと思ふ。近來の洋行者が文明國の皮相の觀察に滿足せずしてその眞相に及ばんとするは確かに祝すべき傾向てある。日本興業銀行總裁添田壽一氏が新日本の記者に話されたことに頗る吾人の注意すべき點がある。「一體私の考へては日本はまだダメてある。成程物質的には進歩も發達もしたらうが、精神的にはトント向上の跡が見えぬ。今日の狀態ては日本人は責任の觀念がないと思ふ。（中略）是ぢや新日本とはまだ言へま

せん。今から新日本にするには、如何しても國民に此責任の觀念を鼓吹しなければならぬ』。歐米諸國の記者等は筆鋒を揃へて我邦商人の不正直であつて信頼の出來ぬことを公言して居る。勿論例外は澤山あるが、をしなべて論ずるときは日本ほど虚言の盛んに行はるゝ國は珍しいやうである。商人が人に由つて價を變ずる惡習は依然として行はれて居る。約束に背く位の事は朝飯前の事で『どうも失敬』の一語で一切濟んでしまうものと心得て居る。嘗て鬼權とうたはれた大阪府の富豪木村權右衛門の述懷を傳聞した。『世人は予を惡口して鬼權などゝいふが、予は嘗て人に迷惑をかけた覺えがない。彼等が何月何日にはキット返へすと約束した金を返へさぬから嚴しく催促もするし愈々その債務を果さぬと法廷に訴へたこともある。自分の不都合を棚に上げて人を惡口するなどは以ての外の次第である。』若し木村が英國に生れたならばかゝる嘆聲を洩す必要はなかつたであらう。情實萬能主義を楯と賴んで居る多數の日本人には英國人に通有の正義（ジャスチス）の觀念が

甚だ乏しい。義務責任の重んずべきことを深刻に感じない。米國に遊學した日本人の中には隨分善い加減な口實を作りて一身の利便を私し歸朝後平氣で尻喰へ觀音をきめ込んで居るものが少くないやうだ。嘗て有名な東方の一大學で試驗の際不正な答案を出して放校處分を受けた日本人があつた。その時學長は彼に宣告した。本大學創立以來（即ち二百餘年來）かゝる不正手段を以て教授を瞞着しやうとしたものは貴下を以て嚆矢と爲すと。アゝ何たる日本人の面汚しであらう。彼は國家の體面を辱かしめた不埒者である。しかし退いて考へて見ると、此の事は偶然に起つた過失でない。中學より高等學校或は大學までも我邦學生の間に蔓延して居る惡風の一端が外國で發見されたまでゝある。カンニングの意味を知らぬ學生は恐くはなからう。即ちそのカンニングが露顯したのである。學生が入學試驗若くはその他の試驗を受けるに際して寫眞を添へて願書を出すことになつて居る。試驗官がその寫眞と見比べて答案の僞物や受驗者の代へ玉を防ぐ爲である。世

界の文明國にかゝる制度の行はるゝ國がどこにあらうか不正直と虛僞のいかに我邦の社會に充滿して居るかを測知することが出來る。これでも東洋の君子國などゝ己惚れることが出來やうか。敎師が問題を與へしまゝ生徒だけを敎場に殘しおきて少しも監督をしなくとも、生徒各々その德を守りて些の不正を見ざる國風に比べてその懸隔幾何であらうぞ。

海外に於て旅の恥のかき棄てをするものは獨り靑年のみでない。堂々たる知名の先輩中歐米の大都會で往々魔窟探險の隱くし藝を演じた世界漫遊者がある。その中には政治家あり代議士あり富豪あり高等官ありまた學者先生も寡くないさうだが、最も甚しく吾人を驚倒せしむるのは我邦における德敎の木鐸を以て自らも任じ世間からも推戴されて居る立派な大敎育家にして此種の秘密探險をやられたことである。是等の大先生等は臆面もなく大使館員や領事館員を水先案內者として女護の島に遊ばれたさうである。國費支辨でかゝる內證の娛樂を試みらるゝ方が一たび橫濱灣頭に著せらるゝや、忽ち一代の君子と豹變せられ、鹿爪らしい顏して忠孝の御講釋、知らぬ人こそ涙も出やうが、吾人は實に片腹痛く覺ゆるのである。予はその少數者の姓名をも知つて居る。彼等もし良心あらば宜しく慚死すべしてある。しかし讀者諸君よ決して失望すること勿れ。千人の中に十人の義人あらば天は此國を亡ぼさないのである。僞君子は己れと同樣の僞君子を養成し得るであらうが眞の忠誠義烈の士は『人を相手とせず天を相手とする』新日本のペスタロツチヤマシユー・アーノルドに由て養成されねばならないのである。

予をして忌憚なく現今の德育法を評せしめば柱に膠して琴を彈ずるの類であると思ふ。當今天下の秀才が滔々として官立諸學校の門前に集まるといふことには何人も異論がなからう。又その出身者が社會の各方面に於て着々重要の地位を占めつゝあることも亦看過すべからざる事實である。しかしその卒業生の數の夥多なる割合に第一流の地位を占め得る偉人が寡くはなからうか。三田の慶應義塾や早稻田大學や京都の同志社

が殊にその學課不整頓なりし初期に於て、且又その卒業生の尠なかつた時代に於て、比較的多く間に合ふ人間を社會に出し得たのは何に原因するてあらうか。予は現今の官立學校がその資力に於てその教員の資格に於てその校長の人物に於て私立學校に比して一日の長あることは否むことが出來ない。然らばその弊源那邊にありや。勿論明治の教育史上に特筆大書すべき故福澤諭吉先生の如き、故新島襄先生の如き、將た大隈伯の如き偉人の感化に由るもの極めて多からうが予は夫れのみてあるまいと思ふ。曰くその弊源は人間を機械扱ひにする點にある。形式に拘泥し過ぐる點にある。別言せば繁縟夥多なる法令や規定の中毒てある。先づ人格を破滅し去つて然る後活きた人間を養成せんと欲す。撞着も亦甚しからずや。軍隊教育は或は此方法によりて成功するならんも國民教育、將た人材養成は、到底かゝる方法によつて成功し得られないのてある。抑も有爲の青年には必ず覇氣がある。野心がある。時としては謀叛心も起るものてある。然るに今の教育法は此欝勃たる青年期の特徴を惡魔視して遮二無二之を押潰さなければ止まぬのてある。譬へば牛の角を折り象の牙を切り鷲の爪を拔き去らうとすると一般てある。成程おとなしくはならうが、同時に牛の牛たり象の象たり鷲の鷲たる威儀勢力が無くなつてしまうのてある。中學五年の間に大抵の青年は一種の去勢術を施されて高等學校に入るのてある。高等學校に入るには(少數の優等生を除き)選拔試驗といふ攻め道具に苦められねばならぬ。高等商業若くは高等工業を卒へ或は帝大を卒業しても尙昔日の雄心勃々覇氣滿々の氣風を存續して居る者は千人に一人二人てあらう。アヽ設し是等の多數の青年をして各々自由自在にその天賦の性格才能を發揮せしめば幾多の偉人天才の輩出するとてあらう。統一を重んずるのあまり個性の特徴とその自由なる發展を沒却するは現代教育の弊風てある。英米諸國の教育法とは正反對の教育法といはねばならぬ。此の如く青年を一種の模型に嵌め込まんと努めつゝある教員等が不知不識の間に自ら活きた機械たらんとす

るは自然の數てあらう。教員は自己の考を押へて校長の手足とならんければならぬ。校長は視學官や知事や文部省に對して唯命これ從はんければならぬ。教授細目から教授心得に至るまで悉く規定通りにやらねばならぬ。少しでも自由な取計ひでもしやうものなら忽ちお目玉頂戴てある。德育の事に至るまでチャント紋切形に定まつて居るのてある。此の如く法令がらめにされた上は多少出色の人物が校長にならうとも教頭にならうともどこに手足の出しやうもないのてある。吾人は之を名けて法令萬能人格沒却主義の德育法といふのてある。個性沒却の精神は學校の名に徴しても知ることが出來る。制服制帽に徴してもすぐ分る。高等學校や府縣立中學校を一二三の數字て區別するはそれてある。日本人の審美性に悖るのみならず、殆ど無意味に近い名稱てはないか。膠柱彈琴的教育法と評したのも過言てあるまいと思ふ。かゝる教育法の結果、道德は一種の儀式と化し虚飾僞善の風を盛ならしむるのみてある。現今の社會は明かに之を證明して居るてはないか。

形式拘泥は獨り日本人丈て なく東洋人の通弊てある。特に甚しいのは支那人てある。彼等は此弊習に囚はれた爲世界の進歩に遲れてしまつた。我邦が西洋諸國と通交を開いて泰西の思想が潮の如く入り來るや。其時代の覇氣あり氣慨あり活眼ある有爲の青年等は一大革命を起して幕府を倒し藩政を廢して維新の大業を成就した。これ實に二百五十年間に欝積し來つた有らゆる形式を打破したのてある。爾來四十餘年茲にまた新らしい形式を作つた。活きた人間は死した形式の桎梏の爲に束縛されてしまつたのてある。それて其弊害が年一年といよ／＼甚しくなり、につちもさつちもならなくなつた曉に天下の大輿論が起るか大偉人があらはれて革命を生みその形式を一掃するのてある。この事は政治にあれ宗教にあれ藝術にあれ將た教育にあれ皆同樣てある。維新革命に參與した當年の青年志士も今や大半凋落して殘るは概ね古稀の齡を超えた白頭翁てある。我邦の精神界は第二の維新に近いて居るやうに

思ふ。

然らば將來我邦の道德はどうなるてあらうか。どういふ風になるのを希望すべきてあらうか。極簡短に予の豫想を述べて見やう。(一)日本國民の遵奉すべき道德はその大體に於て世界萬國共通のものでなければならぬ。固陋な排外分子は之を一掃して四海同胞主義を執るべきてある。吾人の愛國心は優に四海同胞主義と相包擁して毫も矛盾する心配なく又國家を危殆に陷るゝ憂もないのである。(二)新時代の道德は個人の權利自由を充分に尊重すると同時に社會國民に對する奉公的精神を奬勵せねばならぬ。(三)新時代の道德は商工業勃興の氣運に相應ずるものでなからねばならぬ。各人その義務を忠實に行はん事を期し、虛言を戒め、誠實を尊び、個人並に國民全體の信用を高むることに勉めねばならぬ。(四)忠の德は之を廣狹兩義に解してその廣義の方を高調せんければならぬ。即ち教育勅語にあらはるゝ各條を日常の生活に於て實踐躬行するものを眞の忠良の民と見るべきてある。而して狹義の忠道を人間第二の天性なる愛國心の上に打建つるならば我皇室と日本國民の將來は極めて安全であらうと信ずる。(五)將來我邦の德育は飽くまで人間を本位とし人格の獨立を尊重することを方針とすべきである。法令規定を成可く寬大にし、上下互に信任して教育の大目的を達せんことに重きを置き、些末の點は個人の自由判斷に一任すべきてある。

予は最後に我邦の教育家に宗教的精神の必要なことを一言したい。(予は敢て宗教といはない。宗教には幾多の弊害の伴ふて居ることを知つて居るからである)別言せば正心誠意である。カーライルのいはゆるシンセリテーである。予が維新時代の名士豪傑等の傳を繙き又その詩歌をよんで一種不思議の感にうたるゝのは、彼等が生命を賭して國の爲に千辛萬苦を嘗めた結果胸中に燃ゆるが如き至誠心を發起し、終にある宗教信念を捕捉したことてある。藤田東湖が獨坐三更天地静一輪明月照丹心と吟出したとき、横井小楠が姑置是非心、心虛即見天とうたうたとき、梅田雲濱が東山の

襲、庚申塚のあたりにあつた茅舍から幕吏に曳き立てられやうとした際に今朝死別兼生別、唯有皇天后土知と詠じたときに彼等はおぼろげに或宗教的生命に觸れたやうに思ふ。嗚呼若し我七千萬の同胞が前に掲げた陛下の御歌を座右の銘として日夕之を玩味服膺し、之を以て立身齊家治國の心得と爲すことを得ば我邦道德の振起指を摟へて竢つべきであらうと吾人は信ずるのである。

新内閣の財政策奈何

武富時敏

前桂内閣が、財政上これまで隨分遣り繰りに遣り繰りを重ねて來た末であるから、若し新内閣にして本當に仕事をする積りならば、思ひ切つて遣れ、思ひ切つて根本から改革せよと希望するの外はない。彌縫に次ぐに彌縫を以てしては、どう〳〵行き詰つて、救ふべからざるの窮境に墮するの外はない。どうか此際大勇氣を振ひ起して根本的の改革を斷行して貰ひたい。

近頃新聞などの傳ふる所によれば、山本新大藏大臣は公債償還額を減じて減税をする考を持つて居るとか或は今其取調べをして居るとかいふ事である。之が果して本當の事か噓の事か分らない。が若し本當とすれば、我々は最も之を歡迎する。

全體からいふと減税をするといふ事は歳入を減らすといふ事であるから、從つてそれ相當の歳出を減らさねばならぬ事になる。歳出を減らすといへば即ち政費を節減するといふ事が其第一着でなければならぬ。政費を節減するには即ち世間で矢釜しくいふ行政整理といふ事が其根本である。然し行政を整理して其結果として政費を節減するといふ事は、なか〳〵大困難の事業で、是れまで度々行政整理、政費節減といふ語が繰

り返されたに拘らず、實際に於いて旨く之を遣り了せたものがない。もう何れの內閣でも大抵此語を口にする。前桂內閣でも一昨年遣りは遣つたが、僅かに五百萬圓位節減し得たに過ぎない。今日の我國の如き財政狀態に於いて僅かに五百萬圓位の減稅では仕樣がない。殆んど何の役にも立たない。然しそれによつて數千萬圓の政費を節減するには行政組織を根本から改めてかゝらなければ、左樣な大きな節減は出來ない。殆ど行政上の大革命を起すといふ位の大英斷を施さなくては出來ぬ仕事である。それを遣れといふ事を此內閣に望んで果して出來る事か出來ぬ事か殆んど期すべからざる希望と思ふ。若し出來るとしても一朝一夕には出來ない。百般の行政組織を取調べてやらねばならぬから玆一月や二月で成功しやうとは思はれない。さうしてグヅ〳〵して居れば今度の豫算編成にも間に合はぬ。さういふ大改革を豫算編成を目前に控へて居る今日にやれといつても誰でも出來ない。出來ないんぢやない。遣れば出來るかも知れんが、容易に出來る事でない。それを此內閣――而かも豫算編成を目前に控へて居る此內閣に望むのは無理と思ふ。

然しそれならば減稅といふ事は悠々として、政費節減の出來るまで待てるかといへば、それが到底も出來ぬ。今や重稅は國民を苦しめて一般經濟界は萎靡不振殆んど沈衰の極に達して居る。此際國民の肩を休めて經濟界の一新を計らねば產業の發達などは到底思ひも寄らない。減稅は最早や一日も猶豫することが出來ない。實に目下焦眉の急である。此焦眉の急に應ずるには、新聞紙に傳ふる如く、公債償還額を減じて、一時の間に合せることは惡るい事でないと思ふ。それならば豫算編成を目前に控へて居る今日でも直きに出來る。少しも時日のかゝる事でない。詰り右に使ふものを左に使ふ丈けの事で、公債償還に出さずに、歲入を減ずる爲めに出すのである。今からでも出來る。豫算も直ちに組める。急場に間に合せる策としては誠に結構な策と思ふ。

全體ならば、借りた金は返さねばならぬ事は分り切

つた事であつて、誰も異論はない。國債は早く返して負債額を減して置かねばならぬ事も又異論はない。國債といふのも政府の負債でない、矢張り國民の負債であるから、國債も早く返して了ふに越した事のないのも是れ亦異論はない。然しながら國債といふものは如何に焦つて償還しても茲五年や十年で償還し盡せるものでない。將來五十年か六十年かゝらねば償還し盡せない。そこでさう五十年も六十年もかゝつて償還し盡すべき國債を、今一年や二年を爭うて急いでやらねばならぬといふ必要は强てないのである。財政の都合によつては一時償還を見合して、國民の肩を休めても差支はない。世人或は償還を見合はすれば、國家の信用を害し、公債價格の下落を來たすと心配して居るがさういふ事は我々はないと信じて居る。此事を詳細に論ずればいろ／＼統計なども擧げねばならず餘り專門的に流れるから今は略して置くが、兎に角さういふ事はないといふ事を明言して置く。そこで此國債償還額を減じて之を以て減稅の財源に充つるといふ事は急場の策として決し不可なるものでないと思ふ。本當の事をいへば政費を節減して減稅をしなくてはならぬのであるが、それは前に述べた如く急場の間に合はぬから今の處先づ國債償還額を減して減稅をするといふ事より外なからうと思ふ。

然し其國債償還額を減ずるといふ事になれば此前の西園寺內閣が議會に提案した國債償還整理基金特別會計法といふものと抵觸する事になる。此國債償還特別會計法なるものは明治三十九年に出來たもので、それによつて一般會計から國債償還整理基金特別會計に向つて、戰役公債の元利支拂の爲め、毎年一億一千萬圓を下らざる額を繰り入れろといふ事を極めてある。そこで其一億一千萬圓といふ制限ある以上は國債の償還額を減ずるといふ事が出來ない。若し國債償還の額を減ぜんとすれば、特別會計法の一億一千萬圓の制限を取らなければならぬ。此制限があつてはどうしても出來ない。そこで今若し風說の如く國債償還額を減じて減稅の財源に充つることを今の內閣が計畫するならば

第一に先の西園寺内閣で極めた特別會計法の改正をしなければならぬ事になる。此特別會計法を西園寺内閣が議會に提案した當初、我々は之に反對した。然し政友會の大多數は贊成してとう〳〵法律となつたのである。それで自分がした事を、今日では其非を悟つて之を改正するの勇氣ありや否や。どうせ此法律は將來長く實行の出來ぬものといふ事は分り切つて居る。早晩改正をしなくてはならぬといふ事は論を俟たんが、人情として、自分が實行した事を自分が打毀すことは出來にくいから、前年の非を悟つて此特別會計法を改正するの勇氣ありや否や、之が第一の疑問である。

それから前の桂内閣が國債償還額を増して年々五千萬圓以上としたのは桂内閣の唯一の財政政策として誇とした所で、彼等が辭職の際にも財政上の効績の最も顯著なるものとして自贊して居る。その後を繼いだ西園寺内閣が之を打毀して減税の財源に移すといふ勇氣ありや否や。若し之をやらうとすれば隨分官僚系なり或は實業家の一部なりから反抗を受けるに違ひない。此國債償還については世間でも間違つた考を持つて居る人が多いやうだから、其れを減ずるか罷めるといふ事になれば八方から反抗が起るだらうとも想像せらるゝ。そこで前内閣系なり、貴族院なり實業家なり、又は一般世人なりの反抗をも押切つて之を斷行するの勇氣ありや否や、之が第二の疑問である。

然し今度の内閣が果して大いに國民の耳目を新たにして國家の利益を進めて行かうといふならば、大いに勇氣を鼓して之を手初めに斷行して貰ひたいものである。之が出來ない位なら到底何にも出來ない。今日の財政の成行といふものは只彌縫を事としては到底行はるゝのでない事は分り切つて居る。一つ根本から改正しなくては出來ない。今のやうな國民の耳目を一新するやうな手段を、一つ大勇氣を鼓して是非遣つて貰ひたいものである。(九月十八日)

軍港、要港、防禦港

海軍大佐 太田三次郎

海軍擴張といふ事が目下我國の重要問題の一つとなつて居る。然し私は海軍擴張を唱ふる前に、先づ海軍の整理を實行しなければならぬと思ふ。日清日露兩戰役後我財政は頓に膨脹して、國民の負擔がなか〱重くなつて居る。此の上更らに其負擔を重くするといふ事は國民にとつて非常の苦痛である。然しながら國防問題は國の死活問題である。如何に苦痛であればとて國の存立上海軍擴張を行はなければならぬ場合には、それこそ犢鼻褌を質に置いても斷行しなくてはならぬ。事實に於て我國の海軍力は極めて微弱である。各國皆競うて「ドレッドノート」以上の艦隊を組織するに腐心して居るのに、我國では「ドレッドノート」型の戰艦三四隻を有するに過ぎない。固より我國の國是は平和であつて、毫も他の國を覬覦するの意志がないから、進んで歐米諸海軍國を侵すに足るべき海軍を備ふる必要はない。常に東亞の海面に於て覇たることが出來ればそれで充分である。それが爲めには我が海軍は世界最强海軍國の有する最强艦隊に等しき二艦隊を備へればよい。それ以上は要らぬ。何故なれば今日世界何れの國と雖も東洋に向て斯の如き優勢なる戰艦隊に對し勝算を立てやうとすれば少くとも三艦隊を派遣せなくてはならぬが、今日に於て一艦隊は戰艦六隻乃至八隻を以て編成するを通則とするが、之には各種の巡洋艦、驅逐艦、水雷艇、通信船、運送船、工作船、病院船、水雷母艦等が附くから一艦隊といつても全體で百數十隻となる。是は東洋に在る其の根據地が頼みにならぬから航海と戰爭とに對する總ての準備が必要となるからである。かゝる艦隊を三つも遠隔の地に航行せしむ

るといふ事はなかく容易の事てない。よし航行せしむるにしても長途の航海殊に本邦附近へ來ては夜襲などの恐れがあるから兵員は寢ずの番をして疲れるとか機械は弛んで居るから締め直さなきやならんとか、汽罐は掃除をしなきやならぬとかて戰爭を開く前には必らず策源地に入らなくてはならぬ。處がかゝる二艦隊の入るやうな策源地を東洋に有する國は今日何處にもないのてある。それは費用倒れがするからてある。元來本土に備ふる兵力の消長は直ちに其國の安厄に關するから、經濟上の打算以外の設備もしなくてはならぬが、歐米諸國の東洋に有する關係は皆殖民地若くは經濟的利益の爲めてあるから、其爲めに損得償はぬ軍備をなすことはしない。例へば英國は東亞に幾多の屬地を有し、又商業上の關係も最も深く、且つ香港、新嘉坡等の良港を有つて居るから、費用さへ吝まぬならば平時に於て二艦隊を東洋に泛べやうと思へば出來ぬことはないのてある。が之には巨額の費用を要するからそんな事をせぬのは明瞭てある。て我國は世界の形勢が激變せざる限り、世界最强の二艦隊に拮抗すべき二艦隊があれば充分と思ふ。然しながら目下は前述の如き有樣て、ドレッドノート型のものが三四隻しかない。然らば我海軍の擴張せざるべからざることは誰が見ても明白と思ふ。

然しながら海軍を擴張するにしても、今日の如き國民の負擔が重き時に當つては、成るべく其負擔の苦痛を增さしめぬ樣の手段を擇ばねばならぬと思ふ。然るに現に我國海軍々政當局者の施設する所如何と顧れば實に心あるものをして痛嘆措く能はざらしむものがある。(第一)人の爲めに官を設け、情實によつて人を黜陟し、無用の高官を增して巨大の俸給を授け、無能の鈍物若くは輕薄の才子を擧げて樞要の椅子を與へ、其結果無用の金が掛つて必要の事務が擧らず有爲の士は不平滿々て士氣は萎靡して振はぬといふ事になる。(第二)軍事教育の方針が不完全なるが爲めに、參謀官の養成を初め一般の海軍教育が甚だ不合理であつて、不統一なる教育機關の尨大を來たし、玆にも無用なる費

用をかけて居る。(第三)艦政の方針が確定せぬ爲め非常な經費を投じて無用の船や不完全な船を製造して居る。(第四)全國皆兵の制を採りながら海軍には豫備制度を用ゐぬ爲めに巨額の費用を要する。然しながら私の最も無用なるのみならず、更らに有害なりと思ふのは。(第五)鎮守府の不統一であつて、其結果作戰上何等の効果なき處に巨額の費用がかゝるのみならず、開戰の場合には却て我にとつて不利益となることが多いのは默過すべからざる事と信ずる。私は近來「海軍改革論」を唱へて、以上の諸點を改革すれば少くも一千萬圓以上の節約の出來ることを論じて世人の注意を乞うたのであるが、第五の鎮守府の不統一が最も重大の問題であり、而して鎮守府の不統一を默過して置くのは主として世人が軍港と要港と防禦港との區別を明かにせざるより起ることゝ考へるから、以下少しく右三つの港には截然たる區別あることを論じ、我國の現下の無意味なる港の組織を改めなければならぬことをお話しして見やうと思ふ。

一體島國の防禦といふものは、實は海軍丈けあれば充分であるけれども、然し其海軍といふものが、世界の何れの國よりも一番優勢にして置くことが出來ぬ事があるし、又其海軍が數ヶ國の聯合にも當らなければならぬといふ事もあるし、又或事情の爲めに一時其海軍が自國の沿岸に居ない場合がある。其時に敵から乘ぜらるゝといふ恐もあるから、島國と雖も多少の陸軍が要ることになる。けれども此場合に於ての陸軍の兵力といふものは我内地の交通機關さへ整うて居つて、何れの地點へも短時日の間に陸軍の兵力を集中することが出來るといふやうになつて居るなら、陸軍の兵力は、我が假想の敵が一回に輸送することの出來る兵力を、敵の第二回の輸送までに打毀はすに足る丈けあればよいのである。然しこういふ場合に敵の方からいふと、第一回と第二回との輸送の時日を成るべく短くせんとする爲めに、上陸地點に近い自分の領地か或はこ

ちの無防御島のやうな處があれば、さういふ處を占領して、先づ必要の兵を其處へ集めて置いて、其處からそれを我内地へ上陸をさせるといふ事に極つて居る。さういふ島があるならば、さういふ島は平時に先づこちらで防御して容易に敵の手に落ちぬやうにしなければならぬ。即ちこれを要港として置なかければならぬ。然し之を絶對に完全に防禦するには海軍が無ければ出來ぬ。砲臺をいくら堅固に築いても、持耐へるのは時日の問題であつて、海軍が無ければ兵糧責などに逢つてとう〳〵落ちることにはなる。それはまアそれとして敵が先づ我本土へ兵を上陸させやうといふ時には、その第一回の輸送の兵がこちらの本土の兵よりも少くて第二回目までに破らるゝ恐がある時には、必ずその兵を集むべき或地點を選ぶ。例へば滿洲へ兵を上げやうとするやうな場合に、貔子窩とか鹽大澳とかいふ所に兵を上げやうとしても、其處へは兵を集中して打毀される恐があるなら、先づ海軍を以て大連灣のやうな所を占領して、海軍の力と少數の兵で金洲半島の咽喉を扼して、而してこちらの兵を半島へ送ることが出來ぬやうにして置いて、滿洲にある兵に敵對するとの出來る丈けの兵を先づ其半島に集める。それから咽喉から出て來て戰さをするといふ事にするだらうと思ふ。さういふ大連灣といふやうな所は敵から占領せられぬやうに平時から防禦をして置かねばならぬ。それが即ち又要港となる所と思ふ。

それから又た敵の艦隊なり、運送船なりが我に策應する爲めに便宜の港灣に據らうと勉むることがある。例へば日清戰爭に於ける長直路とか、日露戰爭に於ける長山列島とかいふやうに敵の根據地となるやうな所が自分の領土内にあるなら之も平時から豫め防禦して敵に取られぬやうにしなくてはならぬ。之も亦要港とすべき所と思ふ。日露戰爭の後に英吉利の一將官が、旅順の防御を全くせんと思はゞ、露西亞の方では先づ長山列島を防禦せなければならなかつたと評したことがあるが、之は無論さうでなければならぬのである。それがない爲めに、日本の艦隊はあすこを前進根據地

として非常の便宜を得た。我要港の選定は果して右の如き主義に協つて出來て居るかどうか。今日我國の要港とせられて居るものは竹敷、澎湖島、大湊の三つであるが、我當局者は要港を以て只軍港の小さなものとして居りはせぬか。二者の性質根本的に違つたものであることを認めぬてはないか。軍港の性質は後に述べるが、要港は敵に取られぬやうに防禦するのを其主眼とするのである。斯ういふやうな事は、軍人のみの專門に研究すべきことでなくして、外國などでは寧ろ政治家が論定する所となつて居るから、私は敢て之を世人に問はんと欲するのである。

若し日本の艦隊が敵よりも微弱であつて、進んで敵の艦隊を打つことがどうしても出來んといふ場合は、敵はどうするかといへば、日露戰爭の例に於ても、日清戰爭の例に於ても分る通り、必らず日本の艦隊の據つて居る附近に適當な島があるならば、それへ前進據根地といふやうなものを置いて、我艦隊を封鎖するといふやうな事が起つて來るだらうと思ふ。其點から考へると瀨戸内海などに無用な砲臺などを築いて置くよりも、五島などの防備は如何にと思はれる。こういふ所を充分に調べたならば、現在の防備を罷めて、新らしく防備しなければならぬ所が方々にあるだらうと思ふ。

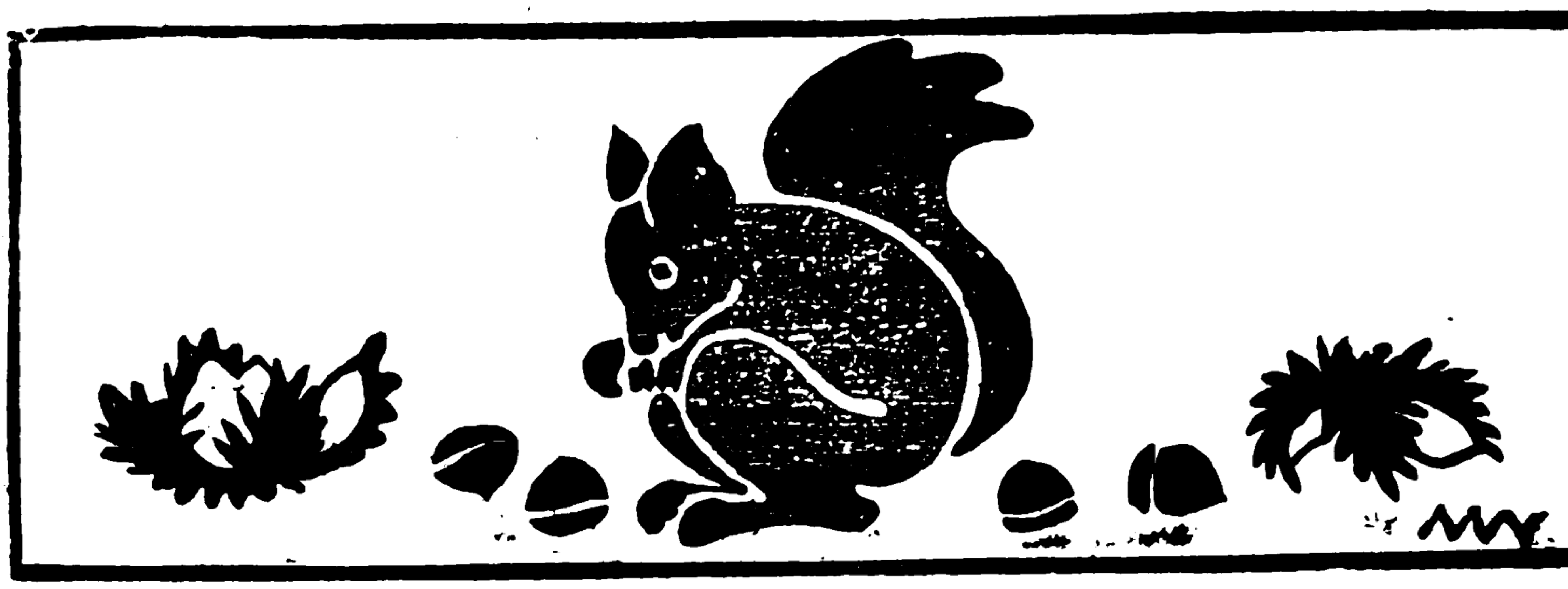
右は要港のことてあるが、艦隊を活動せさる爲めには、策源地（ベース、ド、ペラシヨン）—即ち軍港が必要である。策源地といふのは艦隊に物資を供給したり、兵員を補充したり、艦船兵器を修理したりする處であつて、最も戰地に近く、又内地との交通のよい處で、艦船の出入に便に、又敵の奇襲に對してよく防禦せらるる所でなくてはならぬ。之れは日清戰爭の時に日本の艦隊の據つた長直路とか日露戰爭の際の長山列島の如き一時據つて居る所の前進根據地といふのとは違ふ。艦隊の進出して以て敵に當らんとする本據地てあつて、物資の供給、艦隊の修理、兵員の補充をする本になる所である。そして艦隊の策動すべき方面は日本ては略ぼ一定して居るから、日本の策源地としては佐世保が適當であらうと思ふ。

何となれば日本は只西南に策源地を持つて居ればよいからである。露西亜は今や浦鹽に海軍を置かず、又近い將來に於ても置くことはあるまい。又淸國にも殆んど海軍が無い。只亞米利加は我國の東方にあるけれども、其艦隊は其西岸又は布哇から數千哩の長途を航して直ちに我國を衝くとが出來ぬから、必らず先づ比利賓に據つて然る後北上すべきものと思ふ。況んや英佛獨等の海軍は必らず北上するに極つて居るから、我國の策源地は佐世保の外にないと思ふ。旅順は露國にあつては實に重要なる軍港であつたが、我國の領有に歸して了つた今日我國の軍港としての價値は全でない。又鎭海灣も朝鮮に海軍があつて我に對するならば唯一無二の良港であるが、我にとつては軍港として何等の價値が無い。只大陸に事ある時に我陸軍の上陸地點となり、運輸交通の站驛となるから、敵の快速巡洋艦が我艦隊の目を掠めて、我運送船を砲擊したり我上陸點を破壞したりするのを防ぐ爲めに、灣口に一二の砲臺を築き、水雷を敷設すべき備をなすことは固より必要だが、之を軍港となす理由は毫もないのである。況んや横須賀、吳、舞鶴の如きは、之を軍港となすの必要なきのみならず、之を軍港となすが爲めに却て幾多の害をなすのである。何となれば(第一)之が爲めに徒らに防禦地點を增す。(第二)之が爲め必要なる軍港の設備を等閑にする。(第三)之が爲め强て艦籍を分ち、或は豫備艦隊を之に配し、以て艦隊の集中を遲緩ならしめる。(第四)之が爲め通商交通の障碍をなすもので、若し單に横須賀を造船の工業地。吳を造船兵器の工業地となして專ら艦船兵器の製造と大修理とに當らしめ舞鶴軍港は全然廢して、力を佐世保の改良に用ひ、之に數多の修理工場を加へて、悉く我豫備艦船をこゝに集め、大修理を要するものは横須賀、吳又は私立造船所に於てなし、修理が出來次第此處に復歸せしめ、小修理丈けてよいものは此處の修理工場てやり、常に艦船を完全に維持することを努めしめたなら、一旦有時の日には號令一下すれば兵員を乘せ需品を積み込めばもう出師の準備は出來、兵力の集中も行はれたといふ

とになる。我作戰上實に非常の利益であらうと信ずる。且つや資源地を成るべく少くせんとするのが、世界を通じての傾向である。亞米利加でも先頃數ヶ所を減じ、佛蘭西でもロシフオルとロリアンとはもう罷めやうとの議が屢々起つて居る。獨逸などもウキルヘルムス、ハーフエンに重きを置いてキールの方は甚だ輕く今は見て居る。ダンチッヒなどいふ處があるけれども始めから軍港とはしないのである。先日英吉利ではスコットランドの北の方のロサイスに新らしく軍港を開いたのであるか、此軍港は獨逸の海軍が勃興したについて、あの邊を劫かさるゝ危險があるから、其防禦の爲めに開いたのだと素人の方ていふて居るが、之れは非常の間違で英吉利の海軍は獨逸の艦隊に對して、あの邊を根據地として當るといふ必要があるからこそ開いたのである。軍港そのものは決して防禦の用をなすものでなくて、軍港に艦隊が據つて居るとか、水雷艇が潛んで居るとかで、初めて防禦となるもので、軍港その物は防禦せらるべきもので、軍港をいくら置いたからとて、防禦にはなるものでない。軍港を餘計置けば害があるとはこの事である、東京は帝國の首府てあるから東京灣の口はどうしても防禦せなくてはならぬが若し橫須賀の軍港に我敗殘の艦隊が逃げ込んだとすれば此艦隊は何の用をもなさぬので東京其物と同じて要塞から保護せられる目的物となるのである。旅順の港に屛息して居た露國艦隊と同じである。處が軍港を少くすると平時の艦隊の航海に不便であるとかいふやうな事を懸念するものがある。けれども船の普通の航海に必要な需品を供給したり、又艦隊を修理するやうな事は必らずしも軍港でなければならぬといふ譯のものではない。要港で出來れば要港でするとも出來るし、又要港で出來無ければ普通の港でして差支ないのである。こういふ普通の港は無論戰時になれば敵から毀されるとか或は港の中にある船も敵から攻擊されるといふ恐がある。無論海戰の目的は先づ海上權を得るにあるから、こちらの艦隊と向ふの艦隊と戰つて海上權を爭ふことが主てあるから、主力の艦隊を以てさういふ

枝葉の目的に使ふやうな愚な敵もなからうと思ふけれども只牽制の爲めとか或は一時內地の人民を嚇かすとかいふ爲めに我艦隊の目を掠めて、極く速力の早い巡洋艦などで、さういふ枝葉の仕事をするものがあるといふ事は想像しなければならぬから、それに對しては戰時にさういふ敵の巡洋艦などが平氣で入つて來ることが出來ぬやうに港の口に水雷を置くとか、又は砲臺などを築くことにすれば澤山である。之は即ち防禦港であつて、最近の戰爭に於ける長崎とか函館とかにしたと同一の設備でよい。若し以上の標準によつて我國今日の港に對する防備を見れば、實に國防の本義を謬り國財を糜するといふものであつて、之は必らず改革せざるべからざるものと思ふ。

本誌前號「秋期大附錄號」は發刊後數日にして賣切れとなり、其後の御注文に對しては遺憾ながら應ずること能はざりしことを謹んで謝す。(反省社營業部)



數奇傳（五）

——一小文學者の自叙——

田岡嶺雲

（拾貳）自業自得の落魄

(1) 恰も天長節の朝であつた

敗北の戰場を捨て丶遁る丶落武者のやうに、予は精神に負へる痛手の血潮に塗れながら津山を去つた。後から浴せかけられる嘲笑を、宛ら耳に聴くやうに想つた。此等の輩を、吾が乘つた馬車の前に這ひつくばせて、上から見下す身分にならねば、忘れても再び此の地に足を入れまい。予は心窃かにこんな幼なうしい事をも想つた。

津山を遠ざかるに隨うて、都に還る希望の嬉しさが漸く心に浮ぶ。薄れゆく闇を透して、行手に功名の光が漂ふて見える氣がした。

東京に着いたのは、恰も十一月三日の天長節の朝であつた。秋の空に晴れて高い、麗かな旭が品川灣の朝凪に照つて、大森から此方には軒毎に國旗が飜つてゐた。予が前途を祝福してくれる樣にも見へた。

歸つて間もなく、初めて新聞記者の生活に入つた。週に一度か二度、其

の文學欄に評論を書くのと、時々二面に時事の短評を書くのが、自分の割當てられた務めてあつた。爲すべき事があまりに閑で、譬はゞ髀肉の嘆があつた。僅に數十行の文を草する爲めのみに、日々千駄木から（此頃予は白河鯉洋の千駄木の寓に寄食してゐた）京橋へ往復する時間の浪費が如何にも惜しい樣にも考へられた。爲すべき務めをより多く命ぜられるか、若くは今の通りの務めに過ぎぬとすれば、出社せずに自宅で書くことを許されたいと社長に申込んだが、そんな我儘な言分は固より聽かれなかつた。縱使んば手を空けて遊んでゐやうとも、先づ顏を揃へて居並ぶことが、傭人に要求する傭主氣質の第一條件たることを解せぬほど、其頃の予は人情の委曲に迂濶であつた。

自由の空氣が漲ぎつてゐるやうに想像してゐた新聞社に社員の勤惰を督す出勤簿が備附けられたことは空想にのみ憧るゝ青年の矜持を傷くるに十分であつた。予は斷じて此に捺印しないと決心した。出勤簿の予の姓名の上のみは獨り空白てあつた。

予は退社の意嚮を社長に通じた、夫の直ぐ後、反對に予は社の方から退社の通知を受取つた。

見下すと前に泥溝の樣な汚い水が流れる此社の二階の、塵埃に息の窒りさうな編輯局に、予の勤めたのは僅に半歲にも滿たなかつた。

予は再び無收入の浪人となつた。

(2) 懸阪がヅラリと並んだ

此の半歲の間の予の品行は、放縱を極めたものであつた。

捨てた戀に執着する、そんな女々しさを自分は恥だとおもつてゐた、さうは思ひながらも心の奧には、蟠つて除かれない黑い影があつた。半は捨て鉢な氣分に唆られての放縱であつた。

或る編輯物の原稿を抱へて、長い日を流連した事もある、昔は振袖の少い女を傍に集めて、其の己がじゝに振舞ふ無邪氣さに興じながら、筆を執るのが常であつた。

肉のために遊ぶのでなく、興のために遊ぶやうにな

つた、女のために遊ぶのでなく、遊ぶために遊ぶやうになつた。

終には遊びに疲れ遊びに倦みながら、夫でも猶家に歸るに懶いほど不檢束さが一種の習慣とまでなるに至つた。

此んな有樣が正月から櫻花時分まで續いた、吾等の身分としては不相應な豪興をも試みた。

初めは自分の俸給以外に、敎科書の編纂や、或る叢書の執筆やて、收入が較々裕であつたが、夫れてすら勿論足りなかつた。其内に新聞社は退社する、編纂物も出來上つて、財源が全く止まつて仕舞つた。

是より先き鯉洋は創刊の神戸新聞に聘せられて神戸に去り、千駄木の家は自分が主人になつてゐた。出入の商人などへの負債が追々に嵩つた。終に家を持ち切れなくなつて、予は又友人の家に居候となつた。

予は面と向つて自ら債主に對するにはあまりに矜が高く、而かも又あまりに卑劣であつた。予は先づ身を脱れて書生を債主との交渉委員に殘した。書生は召寄せた米屋、酒屋、肴屋、八百屋、車屋等にヅラリと取り卷かれて、空手て延期の談判を開いた。一番先きに氣負な魚屋が手を打つて、其他も皆々承諾したのださうだ。予は書生から此の報告を聽きながら芝居の浪宅の場などに手々に弓張提灯を携げて詰寄する懸乞の樣を想ひ浮べた。

(3)　綠雨は口を歪めて字を書いた

東片町に再び下宿屋住居をした、其頃齋藤綠雨は西片町の此も下宿屋に居て、萬朝に例の『眼前口頭』を書いてゐた。心も體も荒み果てた予は、浪々の所在なさを每日のやうに綠雨を訪れた。其の兩頰のこけて稍や括れた長い顏の、廣い額に垂れ被さる眞中て分けた長い髮を氣にしては、女の樣に瘦せ細い指てかき上げながら、圓い慧しい二重眼を、何物かの秘密を探し索むる樣に、絕間なく動かしつゝ、稍大きな唇を尖らせて、ボツリ／＼と話出す警語多き皮肉を聞きながら、一日を其室に暮す事も珍しくなかつた。

綠雨の原稿の字は、皆右の肩下りであつた、筆を持

つ手に力を入れて、其字と同じく唇を歪めては書いた神經質な彼が此にもよく現れて居た。消した字なども丁寧に四角に塗り潰して、一寸した手紙にまでも正しく句點を截つてあつた。

此頃大野洒竹も同じ下宿屋に居て確か博文館發行の俳諧に關する古書の校訂をしてゐた。鼓といふ字の作は皮か支かといふ問題が三人の間に議せられた事を覺えてゐる。

戸川秋骨君や馬場孤蝶君なども、予と同じく屢々綠雨の客であつた。

去年、秋骨君と會つた折、其頃の談が出て、綠雨を今まで生かして自然主義に對する皮肉が聽きたかつたと話し合つた。

(4) 開いてゆく花の蕾を眺めてゐた

秋風のそゞろ肌に沁む頃、寂しい思ひを懷いて予は再び帝都を去つた、水戸の『いばらき』新聞社に、謂はゞ身を賣つたのだ。

新橋から東海道を西に下るときは、明るみに向つて進む心地がするが、上野から乘る滊車は、陰鬱な薄闇とさびれの裡に引込まれて行くやうに想はれてならぬ。

水戸の停車場に下りた時、予は陰氣な町だと思つた絃の切れた三味の胴へ撥があたつた音のやうに、勢の拔けた町だと感じた。此が天下に響いた水戸の城下とは信じられなかつた。

水戸でも一二を爭つてゐるといふ宿屋の玄關へ車をつけた。フト見ると障子の破れが目についた、三階建ての外見は立派でも、有繫に田舍は田舍だとおもつた。

水戸にも半歲許りしか居なかつた。

予の生活は依然として放縱であつた、家を持つには持つたが、隣りの宿屋から賄を取つて、家には勿論女中も無ければ、何の家具も無い、机一つに火鉢一つ、押入れには唐草摸樣の木綿の堅い貸蒲團が一組ある許り、晝は入口を鎖したまゝ、日曜の外は多くは戸すら開けた事が無い。不味いので内で食ふのは晝飯兼帶の朝飯だけて、編輯が濟むと、毎日の樣に社の誰彼を誘ひ

出しては晩飯は外で食つた。華やかな絃歌の巷から、燈も無い自分の家へ歸るのは毎も十二時を過ぎてゞあつた。

遊ぶのには多く少女許りを集めた。踊らすのでも、唱はすのでもない、唯丹精して造つた花の蕾が開いて往くのを樂んで待つ樣な心持て、遠くから眺めるのみてあつた。

一體予は他人に對して其意思を强制するが如きことを敢てするに忍びなかつた。自分が厭とおもふ事を人から强ひらるゝ時に感ずる不快さを推して、我からも人に强うることを欲しなかつた。從つて對手の人の氣を種々にかねて、自分の思ふ事欲することを口に出すと憚る場合が常に多かつた。

殊に異性に對しての予の態度は極めて大膽を缺いてゐた。予は所謂世間慣れた人の樣に、女を與し易き者を見縊るには、予は寧ろ女を高く買ひ過ぎてゐたかも知れぬ。予は女人の性情や、智識に對しては侮蔑の態度を持しながらも、之を男子と同じき一箇の人格と見て其の德行の薄弱を疑ふに忍び無かつた。加之予には異性に對して之を牽引し得る自信が乏しかつたのと、拒絕せられた場合に於ける自負心の毀損を豫め想ひやつての遠慮もあつた。

直ちに其肉を金で買ひ得る女の外は、異性に對して唯だ觀るのみを以て滿足した。美術品に對する如く唯だ其美を靜觀するのみを以て滿足した。否滿足せざるを得なかつた。

予は水戶に居た半歲の間も、行ひに檢束は無かつたが、遂に一度も此の寂しい家へも歸らぬやうな事は無かつた。

蕾の花が咲く頃は予は既に水戶に居なかつた。咲いた花も今は皆もうすがれたらう。其中の一人が或る娼樓の人妻となつて過日の洲崎の海嘯に非業の死を遂げた事を聞いた。

(5) ポンチ繪にでもありさうな

水戶を去る日であつた。別を告げる爲めに新聞社へ寄つた。愈よ出發の時刻が近づいて、車ももう門前に

待つてゐる、其時債をはたるべく樓下に來た女がある、給使は心得て不在だといつたが立去らぬ。終には樓下の庶務室へ上がりこんで長鬪の策を取つた。

汽車の時間には愈よ迫つてくる。予の懐には東京への汽車賃以上に餘裕が無い、固より債を拂ふことは出來ぬ、左ればといつて又永遠に此地を去る予自からが逢つて斷つたとして聽かれやう筈も無い。予は殆ど進退谷まつた。

時計の針は、チクタクの音を刻んで容赦なく進む。樓下の女富樫は見張りの關を構へて一寸には去りさうな樣子が無い。門前の車夫は欠伸を呑んで予を待つてゐる。

蛇に魅れらた蛙のやうに樓上に立すくんで、氣のみ焦燥つてゐた予の態は定めて外目には可笑しかつたらうと想ふ。

併し吾の上に天佑があつた、下を窺ふと、流石に待あぐねてか女は新聞を讀んでゐる。何でも時事新報であつたとおもふ、一杯に擴げたのを、双手に擴げて顔を蔽うてゐる。此の隙に乗ずるより外、予の活路は無い。

予は音せぬ樣に梯子を下りた。

女富樫は、面白い雜報でも見當つたか、讀み耽つて身じろぎもしない。

予は其前を悄と拔けた。

女は依然として勘附かない。

予は車に飛び乘つた。振顧ると女は依然として新聞をさゝげて其顔を遮ぎつてゐた。

ポンチ繪にでもありさうな圖だと獨りて可笑しかつた。

(け)　赤提灯を軒に下げた安宿であつた

東京に歸つて暫くは、其頃水戸で相識つた佐藤秋蘋と落魄の苦みを偕にした。

此時の予の裝は、下宿屋にも謝絶さるべきほどの慘さであつた。上も下も黒の眞岡木綿の、而かも羽織には袖に燒焦げさへある者の着たまゝの外には、風呂敷包一つの荷物さへ無かつた。纔に秋蘋が詰襟の洋服を

着てズック鞄を持つて居た爲めに、どうにか宿りを許す家が有り得たのだ。

二人が宿つたのは、新橋から四五丁の、火の見櫓のやうな三階のある赤毛布宿であつた。美しい髪をもつた三百代言のやうな男妾を持つた見るから因果な女主人の家であつた。

何がしか入れてあつた前金が盡きると、嚴しく宿料を督促し始めた。

予は一時の急を救ふが爲めに、急いで書上げた原稿を番頭に或雜誌に屆けさせた、生憎其日が土曜の午後であつた、月曜に稿料を渡してくれることを承知したので番頭も安心したらしい。

其日曜は恰も月末であつた、其月の勞力の價を懷にした一友の男と宿を出て、其夜は終に歸らなかつた。其翌日は降りしきる雪に閉ぢられた。稿料は終に宿屋へ渡す前に自分等の手へ受取つて仕舞つた。

宿屋へは歸るにも歸られない始末になつた。翌日は雅邦の展覽會を觀ながら一日を上野の茶店で暮らして其夜は其友人の下宿にとまつた。其宿も予等に快くは無かつた。

翌日友人の下宿を出た時には予等二人の懷には二十錢銀貨が一つあるのみであつた。

歸るべき家も無い、行くべき處もない、二人は宛もなく歩行いて、芝の公園に入つた、山を上つて暫く茶店に憩うた。

此頃津山の女が赤羽橋のあたりに住んでゐることをほのかに聞いてゐた。宛もなく南の方を望んでは流石に懷かしいおもひがした。

懷の廿錢は茶代に置いて、山を下るときは二人は文字通りの一文無しであつた。

時は段々正午に迫つて來た。二人は忽ち晝飯の代に窮した。芝から京橋へ出て一二の友人を新聞社に訪うたが、皆不在であつた。

京橋から又芝の方へ歩を反した。喪家の狗の如く、飢ゑを忍んで歩行いた。

脚は疲れ腹は飢ゑて歩く勇氣さへ索きた。フト秋蘋

の知つた質屋があることを想ひ出した、此場合予等二人の間に質草となるべきものは、予の眼鏡があるのみであつた。

眼鏡を典して二圓五十錢を得た、洋銀緣の代りの眼鏡を買つて、剩したのは二圓足らずであつた。

ロースにビールで腹をこしらへて、愛宕下の肉屋を出た時は、懷は又輕くなつてゐた。

寄席で半夜を過ごして、其晩漸く宿まつたのは、「やすやど」と大書した赤提灯を軒に吊した家であつた。破れた障子は煤に黝んで、緣も無い疊がじめ〳〵と坐るにも氣持が惡い、便所の穢ないのには最も弱つた。

此の家に五日許り蟄伏した、其間に二人は襦袢を脫いて湯錢にあてた。

予の舊稿を蒐めたものが、或家に預けたまゝになつてゐるのを想出した。秋蘋が夫れを持つて春陽堂へ交涉に往つた、

廿五圓を懷にして秋蘋が歸つた時は、吾等は蘇つた樣におもつた。元の宿へ歸つて宿料を淸濟した。宿では今日にも警察へ屆ける所だつたといつてゐた。

（拾三）滬上の一年

(1) 大陸の飛躍が理想であつた

自由民權論は內治に對する國民の不平の聲であつた此の自由民權論は廿三年の國會開設と共に聲を收めた此に代つたものは對外硬の絕叫であつた、對外硬は外交に對する國民の不平の聲であつた。

對外の第一問題は、即ち征韓論に由來する對淸處分であつた。支那、此一語は久しく志士の血を沸かした。鬱積せる國民の不平は廿七年に至つて終に爆發し、乃ち日淸戰役があつた。

遼東半島を分割せしめて日本の領土とした媾和條約が馬關で訂せられた時、予は恰かも學校生活を卒へた際であつた、吾等は心窃かに我が活動の舞臺の出來たのを喜んだ。少時から政治運動の渦中に生長した吾等には、豪放な志士的行動が寧ろ理想であつた、且つ

學者として立つには吾等の頭腦はあまりに粗大で非組織的であつた。大陸に飛躍する!!!漢學を専門とした吾等には支那大陸が唯一の好舞臺と信じてゐた。

遼東還附は少なからず吾等を失望せしめた。吾等は伊藤侯を秦檜以上の奸物の樣におもつた、吾等は唯譯もなく我が外交の軟弱を憤慨した。

併し機會さへあれば、支那に行かうとの志は抱いて忘れなかつた。

其内に敗後の支那は漸く覺醒した、康有爲は南海の草廬を出てゝ變法自彊の說を以て帝者の師となつた、康は一蹶して亡命の客となつたが、其首唱した範を日本に採るの說は漸く實現せらるゝ機運が熟した、陸軍や學校や新聞社に日本人の招聘せらるゝ者が漸く多くなつた。

予の志は益々熱して來た。

會々陸軍の一大尉の四川に聘せらるゝ者に隨ひ行く事を約した。

大尉は予に廿金を與へて其日迄に長崎に來れと命じた。

窮迫を極めたる當時の予は、固より與へられた廿金を以て千里遠征の旅裝を治むることを能くし得なかつた、金策に奔走する間に遂に期を愆つた。

是がために予は詐僞漢のやうに一部の人々に誤られたやうであつた、期を愆り約に違うたのは固より予の責任である。予の罪である。併し如何に窮迫したればとて、僅に廿金では無いか、是がために終身の名譽を犧牲にするほどに予は愚ではないと自ら信じてゐる。

併し金策に奔走する間に此廿金を費消した事は予の弱點である、僅に二十金ながら當時の予には咄嗟に辨償する力が無かつた。其後此の廿金を大尉の友人の手許に返還し得たまで、予の心は少からず此に苦しめられた。

水戸から歸つた歳の五月に予は漸く素志を達して渡淸する事となつた。

(2) 世界の廣さを數へられた

上海の一年は予に無意味では無かつた、支那人に日

本語を敎へる其事には餘りに感興も起らなかつたが、併し予が思想の上に或變動を生じた事は、予にとつては一の大事であつた。

從來予は一種の偏狹なる國粹主義に感染してゐた。明治廿年頃の歐化主義に對する反動の思想が一時を風靡した其頃の空氣の中に予等の思想は育て上げられた者である。夫れに自分の專門とした學問が漢學といふ様な古典的(クラシカル)な動もすれば頑陋に陷り易い者であつたことが、何時となく予を自國の長所のみを認めて、自國を世界唯一の國柄と妄想する一種の偏見に導いてゐた。

然るに上海は支那の一開港場といふ名の下に、實際は方幾里かに縮圖せられた小世界(コスモス)である、世界の民を集めて成つた一の小共和國である、黄白黑あらゆる種類の人種を一區に集めて、碧い眼黑い眼、明るい髮闇い髮、寛袍の人窄袴の人、辮髮を垂れた支那人、紅巾に頭を裹(つゝ)んだ印度人、スカートを地に曳く反身(そりみ)の白人の女、赤い蹴出しの足にもつるゝ日本は島原産の女、宛然たる人類の共進會である、風俗の博覽會である。天津の桃、苹菓(りんご)、廣東の茘枝、龍眼肉、南洋のバナヽ、パインアップル、あらゆる南北の珍菓は食ふに任せるマニラの葉卷、ボルドーの葡萄酒、燕巣の羮(あつもの)に、日本流の鯛の刺身、あらゆる東西の珍羞に朶頤し得る。上海は實に此くの如き地である。予は上海によつて獨り支那を觀得たのみならず、朧げながらにも世界を觀得た。予は溪谷の間を出てゝ始めて豁然たる大景に接した氣がした。

自己の從來の思想が竟に井蛙の陋見たるに過ぎなかつたことを予は此の實物敎授によつて敎へられ、予は世界の大を敎へられ、世界の廣きを敎へられた、人は國民として以外世界の人類のために、天下の人道のために竭さゞる可らざる者たることを敎へられた。

(3) 讀書人としての訂交であつた

上海では敎育の事に關係したから、夢想してゐた大陸飛躍といふやうな方面とは全く沒交渉であつた。併し二三の志士とは相識つた。

上海居留地は治外法權地で支那の法律の威力が及ばぬ處であるから、丁戊の亂に逃れた志士、若くは此に關係ある人々の最も善き避難所であつた。

文廷式氏は魁偉な體格を具へてゐた、體格に似ず嬰兒も親むやうな無邪氣な眼の細い丸々した顏に、何時も和氣が溢れて、而して大口を開けて無遠慮に哄笑する、隔てのない蟠りのない人であつた。内外典に通じた學者で、自らの手で鈔錄した隨筆が等身ほどの嵩があつた。惜哉、故人となつた。

康門で梁啓超などと名を齊しうしたといふ汪康年氏は此頃中外日報に筆を執つてゐたが、肺病で痛々しげに弱つてゐた、艶のない顏に唇の色が褪せて歩行くのにも力が無かつた。眼の細い鼻の心持ち大きい、話すにも大きな聲を立てぬ柔和な人であつた。

拳匪の亂に乘じて、漢口に事を擧げんとして成らず捕へられて頸血を市に濺いだ唐才常は、顏の丸い、併し眉の濃い眼の險しい、何處かに叛相を具へた人であつた。

其他相交はつた人々は多く康有爲の一味であつた。併し其交は單に讀書人としての交で、相結て風雲の變を期待する志士としての交では無かつた。

居留日本人にも手に唾して風雲を望む豪傑が寡からず居た。其頃は上海も未だ今のやうでなく洋妾の外には四十を越えた老妓が一人居るのみであつた。女といふ調和の脂の缺けた荒くれ男のみの間は頗る殺伐で、酒を飲んだ揚句が動もすれば喧嘩になり勝ちであつた。

此等の殺伐の豪傑連に引かへて、折目の正しい新流行の服に、香水の匂をさせて髮をチックで堅めてゐたのは、三井物産の社員などに多かつた、洋妾と浮名を流してゐるやうな人もあつた。富籤に當つて握つた萬金を懷にして洋妾と道行を極めて、忽ち元の杢阿彌と還つた男も其中にあつた。

(4) 城壁に月が寂しく挂る

上海には日本の專管居留地は無い、有るのは英佛米の三國のみである、日本人の主として住つてゐるのは

米租界なる虹口で、領事館も、郵船會社も、日本人經營の宿屋も料理屋も皆此處に在る。

我等の學校は初めは英租界に在つたが、經濟上の都合から後に高昌廟といふ處に移つた。今の同文書院の在る處で、虹口からは上海城の郭外を沿うて約二里近くもある。酒を飲みに往つては夜闌けて虹口から歸る事も珍らしく無い。頽れかゝつた城壁の上に、弓の樣に缺けた月が寂しく挂つてゐるのは、日本の今に見られぬ景色であつた

併し冬の夜を寒風に吹曝されて歸ると、膝から下は感じの無い迄冷い氷るやうな事が常であつた。此んな不攝生からでもあらう、予はインフリエンザに罹つた豫後が良くない、咳嗽が出る、熱が出る、津山で一たび傷めた肺を又損う疑があつた。醫師の勸告によつて歸朝した。

前年長崎を去つた時は恰も家々に五月幟の飜めく端午の節句の日であつた、歸つた時も亦同じく五月五日であつた。支那に在つた間は僅に一年に過ぎなかつた。

其頃仲兄が長崎に居た時であつた、暫く兄の家で靜養してゐる間に疾は輕快した。

東上の途次に福岡に寄つた、福岡には白河鯉洋が九州日報に筆政を掌つてゐた。

此時山東に起つた拳匪の亂が漸く重大となつた。獨逸公使は殺された、日本の書記官も殺された、北京の外人は包圍せられた、鐵道電線は破壞せられ、北京天津の交通は斷たれた。列國の連合艦隊は太沽の砲臺を砲擊して終に之を占領した。日本は公使救援のために兵を出すことになつた。

人間が其生存慾を超越した際に發揮する悲壯なる決心、熱狂なる勇氣。吾人は戰爭に於て人間の力の絶大を觀得るのである。戰爭はあらゆる物の中に最も壯烈なるものである、最も雄大なる者である、最も大なる悲劇であり、最も傑れた哀史である。日清戰爭を觀得なかつた予は、此度の事件を戰爭なる者を實驗するに又と得べからざる機會と想つた。鯉洋と談じて九州日

報の名を藉りて出征軍に從ふた。

(拾四) 從軍

(1) もつそう飯に福神漬

予の便乘したのは、土佐丸といふ六千噸の、其頃には珍らしい巨船であつた。

船は廣島師團の砲兵で一杯であつた、甲板に馬欄をしつらへて馬も澤山載せられてあつた。

予等所謂從軍記者は三等即ち卒同樣の待遇を受ける筈であつた。元來が貨物船であるから客室の設備が不十分な爲めもあらうが、氣位の高い予等一行は頗る不平であつた。監督將校の好意で、二等の食堂を假りに予等の室に充てゝもらうことになつた。

風塵に飄零して、忘るゝともなく忘れてゐた昔の戀を夢に見た、其朝吾等の船は山東角を左に見て海に入つた。

予は望遠鏡一つの外は水筒さへ持たない、固より素手であつた。船のボーイからブラッセルで買つたとかいふ短銃(ピストル)を賣附けられて、始めて武器が出來た。

酷暑ではあり、不良な支那の水を飲まねばならぬ場合を慮つて、ボーイに賴んで梅干を一包み、短銃の景物に附けて貰つた。

太沽の沖には浮城のやうな列國の軍艦が、海を蔽うて並てゐた。

太沽の砲臺では、馬丁等と一つ棟に置かれた、馬と一處でなかつたのがマダしもだ、地べたに藁を席いて其上にゴロ寢をした。食事は半煮のもつそう飯に、何時も福神漬の罐一つが吾等四五人の副食物であつた。水が乏しいために、朝も滿足に盥嗽することは出來ぬ、手拭を濕して顏を拭くのがやつとであつた。食事の時の茶さへ、小さな土瓶半分位しか、予等の間に與へられなかつた。

隣りに海軍の舍營があつた、其處には電燈が點つて飲料水が氷冷しにしてあつた。秘密一點張りの陸軍の不愛想に似ず、海軍の士官は我等を善く待ち又善く款つた。陸軍は野蠻で海軍は何處迄も文明的であつた。

固より便所などの設備は無い、地の上に丸太を二本並べたのが厠てあつた、流石に晝は人目が憚らるゝから夜に入つて用を足す。夜更けて丸太の上に蹲踞んでゐると、頭の上の天を絕つて探海燈の光りが閃めく、馬の嘶の外は營中闃として何の物の響もせぬ。營中の兵士の夢は圓らしい。

數日にして予等は同船した砲兵隊と同行して天津に向つた。

(2) 日本兵は緞帳役者

出發の朝は勇ましかつた。終夜營中何となくどよみがする、軈て喇叭が靜かな早曉の空に谺して響く、人の聲、馬の嘶、さま〲の物の響が入り雜つて聞える劈くやうな號令が彼方にも此方にも起こる。進行の喇叭の音に連れて、靴の音、蹄の音、劒鞘の相觸れる音地を軋る轆々たる砲車の轍の音が、一種の諧調をなして勇ましく過ぎる。吾等も結束して外に出てた、歩武粛々として進行する黑衣白袴の長い列が蜿々として百足のやうだ。

砲臺附近の葭の繁つた水邊などには血にくろずんだ靑い服の淸兵の屍骸が斃れたまゝに棄てゝあつて、人肉をあさる野犬がウロついてゐた。

此時破壞せられた汽車は工兵の手に修繕せられて塘沽から軍糧城迄通じてゐた。太沽から塘沽まで一里、其間に予等は海軍の營舍から貰つてきた麥酒瓶の水も旣に殆ど皆飮乾して了つてゐた。

塘沽停車場附近の家は戶布や布片や壞れた箱やが狼籍に取散らされた儘に、固より住む人は無い、砲火の中を周章て逃げた樣が想はるゝ。

停車場の守備兵であらう、停車場側の平地て露兵が馬を驅けてゐる、馳騁周旋自在てある。我が軍隊の馬が汽車に乘ることを嫌つて手に餘るまで荒れ廻るのは聊か體裁が惡かつた。

獨り馬のみでない、兵士も列國の兵士の間へ出ては緞帳役者が初めて檜舞臺を踏んだ樣に、場うての氣味が無いても無かつた。

汽車から兵火にかゝつて燃えてゐる聚落が見える、

線路に沿うて委棄されたまゝの屍骸が處々にある。

軍糧城から天津まで五里。木蔭も無い草原つゞきを炎天に曝されての徒歩は弱らされた。殊に水の無いのが何よりも苦しかつた。

八貫目の背嚢を背負つた兵の辛さが察しられる。田の間を流るゝチョロ〳〵水でも、水さへ見れば、掬うて飲む。水だといふ叫びが聞こえると、有繋に命令嚴肅な隊伍が忽ち崩れて、我先きにと駈出したのを見ても、如何に彼等が水に渇して居たかゞ想像される。

船中から持つて上つた梅干は効能があつた、氣息奄々として落伍する兵士の幾人かにも頒ち與へた。自らも梅干を含みながら歩行いて、いくらか渇を慰し得た。

されど照りつける日の光と、照りかへす草のいきれに、喉はから〳〵に乾く、終には梅干を含んですら猶堪へ難い渇を覺えた。

黄濁した白河の水をさへ掬んで飲まうとした。恰も馬の屍骸が前へ流れて來たので、掌に掬んだ水を捨てた。

僅に五里と思つたが、中々に遠い、遙かに一抹の樹影が地平線に雲のやうに見える、夫が天津だらうと想像しながら疲れた足を曳きながら歩行いた。

人に後れ後れて予は終に一人となつた。梅干も盡きて仕舞つた、路傍の圃に葱を見附けて、其髓を嚙みしめて其液に舌を濕ほした。

萬朝から從軍した小林天龍氏が草原に仆れて居た。其傍に嚙りさしの胡瓜が棄てゝあつた、ナイフで兩端を斫り棄てゝ與へると少しく勢づいた。

漸く天津眞近の邑まで來た。巨きな寺が焰を吐いて燃えてゐる、邑の入口に、逸れ彈に中つたのであらう一人の男が蒼白い顔に齒をくひしばつて仰向けに仆れて死んでゐる、雜貨の行商人らしい、其側に肩に吊す樣に紐のついた箱が投げ出して、南京珠が散ばつてゐた。

兩側に家のある小路を少し行くと、一發銃の音が聞えた。清兵が狙撃すると聞いてゐた予等は、思はず踏止つた、例のピストルへ彈も込めた。後へ退かうとい

ふ說も出た、既に天津は眼前にある、予は同じく逃げるなら前へ逃げやうと主張した。其中に前面に馬に騎つた露の將校が現れた、大きな豚を鞍につけてゐて、手招きで予等を麾く、銃音の原因は譯つた。予等は窃に臆病を耻ぢた。こめた短銃の彈を詮方なさに、傍に蠢めく豚をねらつてうつた。幸(?)に中らなかつた。

天龍氏は終に天津の入口まで來て卒倒して仕舞つた。

國姓爺の芝居で見る樣な樓門があつて、其上に看視の露兵が歩いてゐる。予は仰いで其兵を呼んだ、手眞似て水を請求した、其兵は降りて來て予に其水筒を渡した。

受取つて天龍氏が倒れてゐる場處まで引返へす途中て、予は水筒の水を一口窃と飲んだ、何だか腥い水であつた。

天津へ着いたのは日の暮れ方であつた。先着の人々は麥酒を飲んでゐた。其時に飲んだ米國製の地球印の麥酒の味を今に忘れぬ。

天龍氏は軍醫の診察を受けて、氷で頭を冷しながら吾等の酒を飲む旁に寐て居た、天龍氏は其酒が一杯飲みたいと言ふ、予等は天龍氏の頭の氷を一片貰ひたかつた。

枕頭へ土瓶に一杯の茶を置いて寐た、寐附く迄にもう飲んで仕舞つて空になつた。夢心地に煎豆のはじける樣な銃の音を聞きながら、晝の疲れに熟睡した。

(3) 陣中生活は暢氣であつた

兵燹に罹つた天津の街は、火が未だ全く消えてゐなかつた。巨人の骸骨の樣に煉瓦のみが燒けのこつて、彼方からも此方からも煙がブス〳〵と立揚つてゐた。曠野のやうに大通りもない、刧餘の景は荒凉であつた。

唯一人頸に銀の十字架をかけた老婆が杖に倚つてトボ〳〵と歩行いてゐた。予を見ると十字架を指さして何かいふが譯らない、多分耶蘇敎徒であるが危險は無からうかといふ事を訊くのらしかつた。一家離散の悲しい運命に遭つた賴りない者であつたらう。

日本領事館へは居留民が籠もつて防戰したといふ、

其名殘を留めて壘壁に用ひられた俵や麻嚢が庭の此處彼處に散らばつた儘てある。樓下を僅かの病室として負傷した人々を收容してあつた、中に脳を擊たれて發狂した人の譫言(たはこと)をいふ狀(さま)が最も憐れてあつた。

領事館は海軍の陸戰隊が守護してゐた。火見櫓を望(のぞみ)樓(み)として遙かに敵の動靜を候(うかゞ)つてゐた。

天津城からは三十分位宛の間を置いては砲擊した、放(う)つたと思ふとヒユーと空を截る音が頭上に響いて即(やが)て炸裂の激しい音がした。我が司令部の廐にも落ちた領事館の賄部屋にも落ちた、砲兵隊の舍營に落ちて予等と同車して來た一(ある)砲兵大尉が僵れた。

初めは屋上を飛ぶ彈の音に頸を縮めた我等も、慣れては平氣て外へ出る樣にもなつた。但或時砲擊の激しい爲め外出を禁ぜられて酒の氣が全く絕へた事がある、其時は有繫に誰も浮かぬ顏をして意氣甚だ揚らなかつた。

陣中生活は想つたより暢氣(のんき)てあつた、危險だといつて觀戰は許されない、司令部の奧の離れた一室に籠城して、永き日を書を讀むか、酒を飲んて氣焰を吐くかの外は無い。但此處ては水も自由てあつたが、何時も罐詰許りの菜には閉口した、或朝司令部へ行く途中、味噌汁を煮て居た其匂ほど、生れてより予等の食欲を刺激したものは無い。或時白菜が少許手に入つた事がある、晩餐の菜に當てる筈を待ちかねて、支那ボーイに油煮にさせて皆の間に食つてしまつた事もあつた。

此のボーイは逃げ遲れて蟄伏してゐたのを使つてゐるのてあつた、人品賤しからざる、利口さうな若者てあつた。我等は各自毎日一弗宛醵金してボーイの給金や酒代に當てた。

(4) **文字に迄容喙した**

新聞原稿に對する當局の檢閲は、嚴といふよりも寧ろ酷てあつた、當局者の語る所以外には通信を許さなかつた。許す事があれば用語の文字にまて干涉した。予は苟くも文を以て立つ一人として、武辯の徒に吾が文章に容喙せらるゝを屑しとしなかつた。

加之(それに)賊の勢は熾んて、天津城は容易に落ちさうも無

い、而して長日月を支へるには予の旅嚢はあまりに貧しかつた。予等の豫想は聯合軍は破竹の勢を以て一氣に北京に押寄せて城下の盟をなすに至るものと信じてゐたのであつた。

一行の半數以上は歸程に上つた、予も亦其中に加はつた。

傷病兵を送還する露國の汽船に便乘して白河を下つた。

途中數々坐洲して、徒らに時を費した。午前に天津を發して塘沽に着いたのは眞夜中であつた。

漆の如く眞暗な夜であつた。闇を劈いて空に閃めく探海燈の光も却て物凄い、船に日本語の解る露國士官が居て着いたから上れといふ、陸かとおもつたら、夫も矢張船であつた、天津の居留外人を芝罘へ送る船で早朝に出帆するのだといふ、露國士官は吾等をも避難居留民と考へたのであらう。

闇さは闇し、眞夜中に不知案内の土地をいづこと指して往くべくも無い、已むを得ず我等は積重ねた荷物の間に倚りかゝつて、立ちながら假睡んだ。

翌朝飢と疲憊とを忍て太沽へ還つた。太沽から水雷艇隼に便乘して月夜に黄海を横斷して芝罘に向つた。

芝罘のビーチ、ホテルて、久しく美味に飢えた腹に飽くまで食つた、食後麥酒の微醉に葉卷を薫らして天津の戰況をホテルの客に語つてゐる中に、フラ〱と眩暈を起して倒れかゝつた。

其夜は蒸暑い晩であつた、打寄する濤の音も凄まじく空は曇つて雷鳴が聞こえた。拳匪襲來の警報に威されて一行は海上の阿蘇山丸に逃げた。

食堂で珈琲の馳走になつてゐる頃、激しい驟雨があつた。雨が歇むで夜が明けた。甲板に出ると天は拭ふた樣に晴れて、海にも陸にも平和な旭が照つてゐた。予等の臆病を嘲ける樣におもはれた。

一行は海軍御用船に便乘して佐世保に向つた、石川半山と予とのみは恰も上陸中て乘りはぐれた、二日ほど遲く門司に向つた。

芝罘を出發するとき水蜜桃を大きな籠に一杯買つて

笑はれた。太沽から天津迄の水に渇いた苦しい記憶が頭に遺つてゐたからである。

ボスカスル

倫敦　繞石生

カメルフオオドの停車場へ二人が下りたのは八月四日の午後六時頃であつた。

カメルフオオドといふのは、倫敦を西に去る二百四十六哩の、北コンヲオルの、海岸へ四哩餘の、一小寒驛である。二人といふのは、僕の親友エリイノオ孃と僕とだ。

豫て手紙て交渉して、二人が二週間の假の宿と定めたボスカスルの田舍家から迎のフエイトンが來て居たので二人のバグやケエスを積まして直ぐと乘込んだ。

倫敦を出る時は晴れて居た空が、ソルスベリイあたりから曇り出して、汽車がエキセタアへ着いた頃から小雨となつたが、幸に僕等が下車すると間も無く歇んだ。道は殆んど眞北に向つて一直線になつて居る。勾配緩やかに下り一方だ。田舍道とはいへ、自動車が樂に行違ひ得るだけの幅はある。立派なもんだ。でも電信柱を見ると、線が一本しか架つて居ない。道の兩側は高さ二三尺の土手だ。土手には種々な雜草が生ひ茂つて居る。ゴオスの花の黄、男郎花に似た野芹の白、フオツクスグラヴスの紫、いづれも雨に洗はれての色鮮かに美しい。土手の左右は大方牧場だ。處々麥畑もある。牛の居る牧場よりも羊の居る牧場の方が多い。麥畑は既に刈られた處もある。馬はトロツトで蹄の音勇ましく僕等を乘せて走る。

『雨が歇んで仕合せだね』

『わたし帽子が濡れはせぬかと心配してましたが安心しました』

と孃は言ふ。かぶつて居るのは、縁幅一尺もある、櫻んぼと葉の飾の業々しい、海ピンク色の麥藁帽てある。それにまた、トオクだの、ソフトだの、大きい紙袋に入れて手にして居るのてある。心配するのも無理は無い。

二哩許り進むと、道の勾配が稍急になつて、前方に海が見え出す。海までは、幾つか小山が起伏して居るので、そして此邊の海岸は斷岸絶壁つゞきになつてるので岸打つ波は見えぬが、海面は廣く見渡される。カメルフオオドは餘程海面から高いと見える。

道は傾斜の度を増して下りに下る。前方斜め左の、四方の小山の底のやうな處に林がある。木の間々に人家が見える。

「あれがボスカスルてすよ」

と孃が言ふ。

「海へは遠いんだね」

「村はづれから小山の鼻を廻ると直ぐてす。」

「泳げるのかえ」

「泳げますとも。遠浅ぢや無いさうてすが。あなた泳ぐと出來て?」

「少しゃ泳げる積りだ」

其の實一間が六つかしいのだ。

「泳ぐの?」

「四分の一哩位なら泳ぎます」

「浴場の設備はあるのかえ」

「あんな村に設備なんかありやしますまい。岩蔭へ衣物ぬいて入りやいゝてせう」

「泳ぎの衣服持つて來たの?」

「持つちゃ來ませんてしたが、宿て貸して呉れるてせう。」

自分の持つてる水泳用のタイトは、紫の縁の着いた鍜茶色のだなどと話す。馬車は先刻見下ろした林の中へ下つて行く。

やがて目ざす村へ着いた。間に林檎畑や野菜畑を置いて、二軒並び三軒並びと、總て所謂田舍家だ。壁は扁平な石を積み上げて、漆喰て塗り固めたものだ。地

下室の無いのが普通て、多くは地階と一階だけだ。地階は天井も尋常の高さだが、一階は頭の支へる程低いのが普通だ。家根はスレイトて葺いた家もあり、草葺のもある。大方道に接して建つて居るが、中には道から三四尺引込んて建つてるのもある。そんなのは道から家までの空地に、草花を植ゑて居る。紫陽花を戸際に植ゑて居る家が尠なからずある。

僕等の馬車は、村の——勾配の急な坂道に沿ふた村の——殆んど谿底に近い、とある一軒の田舎家の前て停つた。

家は道に接して居る。低い石段を二つ上ると門だ。石段の右側に大きな八ッ手が植はつて居る。左側にはアネモネが繁つて居る。英吉利へ来て初て八ッ手を見た。アネモネは花盛だ。

馬の止つた音を聞きつけて、家から主婦と、それに似た顔の二十四五の女とが出て来て、

『よく入らつしやいました。御荷物は直ぐ運びますから』

と直ぐ部屋へ案内して呉れた。仲々御愛想がいゝ。Rの音の強く響く主婦の言葉が珍らしくきこえる。

廊下の右側に小さな綺麗な部屋がある。家の客間だといふ。突当りに二十畳許りの大きな部屋がある。此へ案内される。安物てはあらうが、壁には山水畫の油絵も懸つて居る。右側にマントルピイスがあつて、その上の大鏡も仲々立派なものだ。マントルピイスの中央には、希臘風の殿堂の正面を現はした飾時計があつて、その左右に金メッキの蠟燭立があり、その左右に黄薔薇を生けた花瓶がある。右側のレセスには、花模様の綸子てつくつたクションの置いてある大きなカウチがあり、左側のレセスには、ライチング、デスクが壁に接して置いてあつて、インキ壺もペン軸も備てある。その近くにアアム、チエアがある。

部屋の左側の壁に接して、中央にサイド、ボオルドがある。飾鏡もある。中央に銀臺の飾りラムプが据ゑてあつて、ヂンナ用のクルエット、スタンド、ランチ用のクルエット、スタンドと二通り載つてる。ハネ、

サクルを一枝づゝ生けた小さな花瓶も左右にある。
入口の扉と反對の側は、大きな窓が一つしか無い壁だ。三つはあつて差支なからうと思ふ程に廣い壁だが。其窓際に小机を置いて、それには葉蘭の鉢が載つて居る。小机の左に安樂椅子が一つある。
部屋の中央には、純白のクロオスのかゝつたテエブルがある。田舎のこととて、瓦斯も、電氣も無いので、臺ラムプがテエブルの眞中に据えてある。心の二つある、大きいラムプだから、部屋は眩い程明るい。此部屋を二人の坐間兼食堂に使ふのだといふ。
窓から裏を覗いて見ると、少し空地があつて、空地とその向ふの草原との境に樫の大木が四五本聳えて居る。空地には鷄を飼つてると見えて、隅に鷄小屋がある。空地の向ふの草原は、谿底迄なだらに下つて居る其處には小川があるらしく、淙々たる水の音が遠くに響いて居る。閑靜だ。
「御湯を上げて置きましたから」
と主婦が來て言ふ。二人は、田舍家には珍らしい、絨氈の敷いてある階段を二階へ上る。
二階には表側に一つ坐敷がある。主婦と其の妹の部屋だといふとだ。裏側に二つ寢室がある。右側のが少し廣いらしい。右側のを孃のに、左側のを僕のにと定めて、僕は左側のへ荷物を運んで貰ふ。僕等のと表側のとの間に、横に小さな部屋がある。之は主婦の弟の馬車の御者渡世してるのが夜寢る處だといふ。
僕の寢室は――孃のもさうだらうが――壁紙、カアペット、窓のカアテン、ブラインド、總て新らしい。氣持がいゝ。ベッドはダブルだ。箪笥も、鏡臺も、洗面臺も頗る上等だ。大に氣に入つた。
持つて來てある湯で充分に顏も洗ひ、身も拭つて、衣服着かえて、下の食堂へ下りる。見ると食事の準備は早やとゝのふて居る。
暫て孃も下りて來た。今日は紺のサアジのスカアト同じ色のヂャケッ、それに襞のある純白のブラウズて居たのだが、下りて來たのを見ると、薄モオヴ色のスカアトに、肱までの薄ピンク色のブラウズを着て居

る。眞珠つなぎの頸飾が目に立つ。胸のブロオチも晝のとは違つて居るらしい。その琥珀色がブラウズの色といかにも對照(うつり)がいゝ。

孃はマントルピイスを脊にして坐る、僕は孃を右に窓の方を向いて食卓の隅近く坐る。

聞けば此の家(うち)——此家(うち)に限らず、こんな村の田舍家——では、日本の木賃宿式にやるのが普通なんださうな。こつちから頼んだもの程造つて呉れるので、それも上等の料理は出來んのだといふ。今夜のサツパも倫敦を出る前に孃から言ひ付けて置いたのださうで、茹玉子に萵苣(レツテス)にトマトにチイズだといふ。いさゝか情無(なさけな)いが我慢する。

孃の前に御茶道具が一式出て居る。僕の前に大皿にパンのロオフが置いてある。その横に萵苣とトマトの入つた皿もある。僕がパンを切らなきやならぬものと見える。そこで僕はパン切りナイフを執つて切る。慣れぬとて分厚(よあつ)のスライスが出來る。フオオクに突きさして、不手際な切片(きれ)を孃に渡す。

『タア』

と、馴々しい言葉遣をする。お茶のコツプを孃から受取る。

『僕はビイルが飲みたいんだが、此家(うち)にあるか知ら。』

『無いでせうよ。何處か酒屋があるでせうから、明日注文なさい。今夜は我慢なさいよ』

といふ。それも我慢するとにする。そして小匙で玉子をすくつて食つてはパンを嚙ぢる。玉子がすんでから僕は僕の横に置いてある小皿を一つ取つて孃に渡す。そして萵苣とトマトとの皿を交互に孃の前へ置いてやる。孃は萵苣の心(しん)の處の葉を四五枚引剝がして二三枚自分のへ、同じく僕のへと置いて呉れる。そしてトマトを半分に切つて半分を僕のへ置く。萵苣とトマトとを刻み合はして酢と鹽とをかけて、今度は之を副食物に、茶を啜つてはパンを嚙る。腹が空いてたので割合に旨い。チーズも旨かつた。

食し終つて、マントルピイスに近くしつらえてある呼鈴を鳴らす。主婦が來て食器を下げて、クロオスを

取りのけてたゝむ。

『明日は土曜日で、カメルフオオドから肉屋の來る日て御座いますが、何か御用は御座いませんか』

と主婦が訊く。八百物屋は此村にあるが、牛肉屋は無いのださうな。そして一週に二度か三度、カメルフオオドから肉屋が來るのださうな。

『何にしませう、あなた。明日の晝はマトン、チヨップていゝでせう。えい。――オルドさん、家鴨なら此村て買へるでせうね。――明後日の日曜のヂンナアには家鴨はどう?』

『僕は何でも關はん。明日はマトンて結構。明後日は僕には珍らしいから、家鴨にしやう』

『オルドさん。それぢや、明日の晝はマトン、チヨップ、それに林檎のパイを造つて下さい。それから明後日は家鴨一匹ロオストにして下さい。』

『他に御用は御座いませんか』

『チイズや、クリイムや、他の物は明日私達が出て買つて來ますから、それ丈けて結構』

と孃は言ふ。僕は

『おかみさん、麥酒や葡萄酒を賣つてる家はありますか。』

『この坂を下り切ると小さい橋があります。その橋を渡つて右へ三四軒目にバワリングといふ酒屋があります。大抵な酒は有つて居ります』

明日僕が行つて注文するとにする。

散歩に出やうと孃がいふ。いつも僕はさう思ふが、當地の女は出好きだ。二百四十何哩汽車に搖られ、それから四哩も馬車に搖られて來たのに、さして疲れた樣子も無く、更に散歩をしやうといふ。日本には斯んな女はあるまい。

連れ立つて出る。そして坂の下り口、橋の處まで散歩する。橋は三間幅位の小川に架つてる石橋てあつた橋から左へ四五分て海岸に達しられるのだといふ。田舍村だが、それでも道には二十間置位に街燈が立つて居る。橋までに人には二人遭つたきりだつた。

道の兩側の、高さ二三尺の積石壁に、三四十間置に

水道栓が設けてある。山水を貯めて引いてあるのだといふ。村の人が。バケツを携へて此の水道栓の處まで水汲に來るんださうな。その水栓の下に、石の水槽が置いてある。汲みしたりの水が一パイになつて居る。道行く馬にその水を飲ますのだといふ。

霧雨が降りだしたので、坂を登つて宿へ歸つた。

「何時に御湯を持つて來ませう」

と主婦が訊く。嬢は

「さう。今夜は疲れて居ますから、九時半に持つて來て下さい。明後日からは八時十五分に。」

「承知しました。御休みなさい」

と主婦は地下室（此家には珍らしく地下室がある）の料理部屋へ下りて行つた。

「私しね、懐中時計を忘れて來ましたから、明日は九時過に壁を敲いて下さい。明後日から八時に。明日は何處へ行きませう。海岸？」

「海岸へ行かう、天氣だつたら。僕は寝坊だから早く起きられるかどうか分らんよ。旨く目が覺めたら、壁をたゝいて上げやう。」

「雨が降つたからでもありませうが、倫敦と比べりや涼しいとね。昨日は私ん處は午後二時が八十七度でしたよ」

「倫敦と比べりや涼しいね。日中十度は違ふだらう。——さう〳〵、僕は日本服を持つて來たよ。明日着て見して上げやう」

「キモノ？」

「英語でキモノといふのは、衣物の上へ羽織る、ガウンのやうなのを言ふんだらう。あんなのも持つて來たが、あの下へ着る本當の衣物も持つて來た」

「今見して下さいな」

といふ。僕は二階の寝室へ行つて、手探りにケエスを探して持つて下りた。そして荒い縦縞の絹セルの單衣と、絽羽織と、縮緬のへコ帶とを取出して、洋服の上へ着て見した。

「いゝこと。そりや何んてす」

「これ、これは僕の家の紋だ」

「シャムロックですね、あなたの家の紋は」

「シャムロックぢや無い、當地でウッド、ソレルといふ草の葉の紋だ」

『妙な處へ着けるのですねい。私に着さして御覧なさい』
といふ。羽織だけ着せて見る。左右と袂を珍らしさうにながめて居る。
『此處は何にするの？』
『うーん、まあ、ポッケットだね』
『大きなポッケットだこと。何んでもはいるわ』
僕はケエスから、朝の化粧道具を出して置かうとすると、日本煙草の包と煙管が見つかつた。之は此間義兄から貰つたのだ。
『僕は日本煙草も持つて來た』
と、之も示す。
『まあ、細かく刻んであること、髮毛のやうね。これは何？』
と、四十匁袋の包紙の字と繪とを指さす。
『フ、ク、ジユ、サウと、此の煙草の名が書いてあるんだ。これが福壽草といふ草花だ。』
と説明する。
『へえー。をや、それがパイプですか。まあ小さいよ。此處は何？』
『いゝのは、此處が銀か何かで、彫刻のあるのもあるんだがね、こりや廉物だから、眞鍮だ。此處は竹だ。』
『へえー、斑が入つてるのですね。珍らしい。』
早速一プク吸つて見せる。香ひはいゝと言ふ。そんなに一度吸つたきりで打いちや不經濟だらうと言ふ。紙て卷いて吸つた方がよからうと言ふ。それから日本の卷煙草の話をする。專賣の話をする。佛蘭西のマッチ專賣の話になる。そんな無邪氣な話で夜は大分更けたさつきの霧雨が本降になつたと見えて、裏の大木の葉がサア／＼音をたてゝ居る。
『寢ませうか』
『寢やう』
先刻食器を下げに主婦が來た時に、蠟燭立二つと、蠟燭二本と、サイドボオルドの上へ置いて行つた。マッチを擦つて二本ともに點して燭蠟立へ孃が挿す。僕が窓のブラインドを下ろしてラムプを消す。そして蠟燭立を一つ受取つて、孃の後から、コトリ／＼と二階へ上る。
『御休みなさい』
『グドナイト』
と、互に寢室に入つてボルトをしめた。

（八月二十五日認）

米の代用食物の研究

米の問題は實に重大なる我國社會問題の一つであつて、本誌は前號に於て、諸學者の之に對する意見を掲載した。本年の米作の豫想は幸にして豐作との事であるから來年は或は現在の如き暴騰の現象を呈さないかも知れない。然し我國に産出する米の産額が全國の食料とするに足らず、又米其物の性質が年によつて豐凶を免れざるものとすれば、又何時現在の如き暴騰――否な其れ以上の暴騰を來さずとも限らない。とすれば米に代るべき營養ある食物が有るか無いかといふ事が重大の問題となると思ふ。是れ次に稻葉軍醫正が陸軍の兵營の爲めに調査せられた「高粱」の研究と、竹内精白商會々長が自ら發明された「人造精白米」の話を掲けて、社會問題に心を注ぐ人士の參考に供したいと思ふ理由である。(一記者しるす)

高粱の食物としての價値

陸軍二等軍醫正　稻葉良太郎

日本人の食物といふものは、申すまでもなく米が其大部分を占めて居る。一體人間といふものは、食物を喰うて、其中にある養素を燃やして、それが即ち熱―エネルギーとなつて、活力並びに溫に變化して百般の生活現象を營むのである。即ち動くとか、考へるとか又は見るとか、聞くとか、總ての五官の官能や、筋の運動やは皆其有機體化合物が燃えて熱になるから出來るのである。恰かも蒸流機關が働くのに、石炭が燃えてモートルが動くのと變りがない。若し人間が食物を喰はずに居れば、身體の中の物質が燃燒して、生活に必要なるエネルギーを作る。然らば生活に必要なるエネルギー即ち熱量は如何程かといふに、働いて行くのに充分な熱量は、健康な成人は體重一キロ(二百六十六匁)について四十乃至五十カロリー(一カロリーは水一キログラム即ち一リットルを攝氏一度だけ溫めるに要する熱量)であるから、日本人の壯年の男子は體重五十五乃至六十キロと見て、二千五六百乃至三千カロリーを給する食物を要するといふ事になる。處で其カロリーの大部分を供給するものは日本人では穀類である。どの位かといふに、日本人の食物は上流は扨置き、中流

以下の人民は、全體のカロリーを百とすれば、米は八十五乃至九十のカロリーを供する。であるから日本人の食ふものは米が主であつて、其他のものは極めて少いと斷言しても差支ない。上流社會のものは、文明の進歩と共に肉や肴を澤山に食ふが、下流のものは肉を食ふことが出來ず、副食物は主として野菜とか、干物とか、目刺とかいふ位のもので、カロリーの百分の八十五乃至九十は實に米が給するのである。だから中流以下の日本人は殆んど米を食つて生きて居るといつてもよい位てある。夫れ故に米が高くなれば下層社會の營養上に多大の打擊を蒙る。經濟上米を澤山に食ふ事が出來なくなるから、從つて營養上に非常の打擊を蒙ることになるのである。此關係は日本ては餘り世の中の注意を惹かぬやうだが、西洋ては衞生學者經濟學者などは皆此關係に熱心に注意して居る。佛蘭西の學者が統計によつてなしたる廣汎なる研究によれば、食料品が騰貴すれば下級勞働者の死亡率が殖える。妊娠中に旨いものを食へば生れて來る子供の重量が多い。又出產の時分に營養不良になつて居ると子供の目方が少い。又勞働者の食物の量と工業上の製作額とも關係がある。即ち充分の營養ある勞働者は生產が多い。營養が不良になれば生產が減少することを研究した學者もある。伊太利の學者も、同國の勞働者の主要食物たる米とか玉蜀黍とかゞ騰貴すると、其死亡率が殖えることを論じて居る。此等の關係は輕卒に全然贊成することは出來ぬ。尙仔細の研究を要するが、兎に角此等の一事を以ても營養の過不及が體力並びに精神力、勞働力、死亡率、疾病率等に關係あるといふ事丈は分らうと思ふ。

夫れ故に何處の國でも食料品の價値の變働は必らず研究すべきもので、成るべく高低の甚しからざるやうにしなくてはならぬ。日本は昔から自國の生產した米とか野菜とかてやつて來た。近來通商が盛んになり、文明の程度が進むに從つて、上流社會の食物は漸次向上して來たが、下層社會、殊に農民社會などの副食物は未だ一向に進步しない。依然として米ばかりから其營養の大部分を仰いで居る。然るに其米は年の豐凶によつて甚しく價値の變動がある。之を救ふて此等下層民の生活狀態を向上せしむるといふ事は、我々が論ずべきことてなくして、爲政者、經濟學者の究むべき問題と思ふ。

日本人の常食として居るものは米であるが、米ばかりを喰ふのは上流の都會の人ばかりてあつて、普通一

般の農民は米に麥を混ぜる。米と麥と五分〳〵にして食ふ。丸麥を混ぜるものもあるし、中には碾割麥を混ぜるのもある。又或地方では粟を混ぜる。又黍を混ぜる所もある。東北あたりの米の出來ぬ所では、甚しきは藁を叩いて其れを玉蜀黍などゝ混ぜて食ふやうな處もあるといふ事である。かゝる地方の農民が如何なる營養狀態にあるかといふ事は醫家、爲政家の研究すべき重要問題の一つと思ふ。

　そこで日本人が主要食物とする米といふものは一體如何なる成分のものかといふに

水	蛋白質	脂肪	澱粉
一四・五	八・四	○・五	七五・一

の要素を含んでゐるものであるが、其米を人間が喰べて、どの位の養素が吸收されるかといふに、先づ蛋白質が八十パーセント。含水炭素(澱粉)が九十九パーセントまで吸收される。麥の成分は

水	蛋白質	脂肪	澱粉
一四・三	八・九	一・二	七〇

てあるが、其中人間に吸收される分量は米に比してずつと少い。丸麥は蛋白質が約五十パーセント。含水炭素が九十四五パーセントである。以上は米とか麥とかを單獨に喰ふた時の話であるが、一體混食即ち動物性若くは他の植物性の副食物と一所に喰ふと、米とか麥とかを單獨に喰ふよりも全體の吸收がよくなる。例へば米の飯に副食物を混ぜて喰ふとすると、其吸收さるゝ率は米にあつては蛋白質は八十五パーセント。含水炭素は九十九パーセント。碾割麥(碾割麥は普通の丸麥よりも吸收がよい)は植物性の副食物に加へると蛋白質が六十五パーセント。含水炭素が九十七八パーセント。壓搾麥も普通の麥よりも吸收がよいが、大抵蛋白質が七十六パーセント、含水炭素が九十八パーセントである。又粟と米と四分六分に混ぜたるものも吸收がわるくない。即ち蛋白質が七十一二パーセント。含水炭素が九十九パーセントである。

　此頃私は高粱が日本人の食物としてどうであらうといふ事を調べて見た。支那に産する高粱は其産額少からざるもので滿洲地方一帶の茫漠たる平野は、殆んど高粱を以て滿たされて居る。滿洲の土民は高粱を柔かく炊いて喰つて居る。或人の調べた所では土人は隨分大食である。一日に高粱一升も喰ふ。土人の喰ふ所の

高粱は搗精法が不充分で、精白の度が少いが、いろいろ研究を加へると、餘り搗き減りがしないやうにして精白することが來來るんだらうと思ふ。

高粱は大連あたりの仕切が一貫目(一貫目は二升五合位)十六七錢位であるから、一升の價が大約六錢と少し位のものであらう。それに税や何かゞ掛るけれども大したものでない。或は之は米などゝ混ぜて喰ひない事がなからうと思ふ。

高粱といふものは米に比べると質が脆弱である。だから碾割ると直き砕れる。で丸高粱を精白して、其れを分析して見ると(成分は精白の仕方によつて違ふこゝに擧げる分析成分は、精白したる高粱を磨いて空中で乾燥したものである)

蛋白質	脂肪	含水炭素
八・四	〇・七	七二・七

である。

高粱を炊くに普通の米と同じやうに炊いても飯が出來る。其色は煉瓦のやうな赤褐色をなして居る。粘ば〳〵して、風味は淡泊である。冷めると拙いが、温い時には喰へる。丸高粱と米と四分六位にして炊くと、外觀は小豆飯のやうで、風味は淡泊である。碾割麥飯のやうに口あたりがゴツ〳〵しない。人の好き不好きもあらうし、又習慣もあらうが、先づ碾割飯位と迫ち驅けちには喰へる。

高粱を碾割にしたものは、粉になり易く、米と混ぜると早く糊になつて、恰度團子のやうなかたまりが出來て、よい加減の御飯を作ることが困難である。

丸高粱の吸收分は、單獨に喰ふと蛋白質が四十七八パーセント。含水炭素が九十八パーセントであつて丸麥と略ぼ似て居る。丸高粱と米と四分六に混ぜたものは吸收がずつとよい。蛋白質が七十パーセント。含水炭素が九十九パーセントであつて、碾割麥のと殆んど相似て居る。

一體混食即ち副食物を加へると吸收がよくなるものであるが、丸高粱を副食物と喰ふた時は蛋白質が六十七パーセント。脂肪が八十三パーセント。含水炭素が九十九パーセントであるが、丸高粱と米と四分六に混ぜたものを副食物と混食すると、蛋白質が七十六パーセント。脂肪が八十五パーセント。含水炭素が九十九パーセントである。碾割麥と米と四分六に混ぜたものと副食物と混食すれば其吸收は蛋白質七十七パーセン

ト。脂肪八十五パーセント。含水炭素九十九パーセントであるから、人の身體に入つて吸收される關係は麥も高粱も殆んど相似て居るといふ有樣である。我々はまだ高粱を喰ひ慣れぬから拙いと思ふが喰ひ慣るれば案外さうでなからうと思はれる。若し麥を喰ふ代りに高粱を混ぜて喰うても同じやうなものと思ふ。高粱について試驗した大體の成績をお話をすれば右のやうなものである。

前に申した通り、營養といふ問題については、西洋人はなか／＼熱心に研究して居る。近頃普魯士では勞働省を設けやうとして其前身の如きものがある。佛蘭西には已に勞働省がある。そこではいろ／＼な下層民の社會狀態を調べて研究して有益なる報告書を出して居る。カウプといふ人などは、國民の營養と體力といふ事について大變な廣汎な研究を遂げて、普魯士に於ける國民の營養狀態、生活資料、營養の變遷等を研究して、一方には貧民の疾病率、死亡率、兵の合格率等を調べて、生活費用が高くなつて營養がわるくなる結果、國民の體格が稍々不良に傾くことを擧げて其改善方法を論じて居る。かゝる點には日本の學者も爲政家も共同して研究すべきことと思ふ。私も些か此問題について研究して居るから、衞生學者の見たる議論として、他日又お話することがあるだらうと思ふ。

人造精白米の話

精白商會々長　竹内又藏

私の商會で賣り出した所の人造精白米といふのは馬齒形の玉蜀黍を碎いて精白したものであつて、外形は殆んど普通の精白米と違はず。之を炊いても矢張お米の御飯と全じて、喰べて見てもイヤな味も臭ひもちつとも無い。只冷たくなると少し堅くなつてブキ／＼するのが疵であるが、溫かい時は何等精白米の御飯と違つた所が無いのである。

私が之を發明するに至つたのには長い經歷といろ／＼の苦心があるのである。我々は先きに玉蜀黍を以て酒を造らうとかゝつたのであるが、此事を發明したのは谷島保太郎といふもので、前警視總監の安立綱之と私とが此谷島を助けて酒を造つたのである。成程酒は出來て、普通の素人から見れば誠に結構なものであつたから、芳醇酒造株式會社といふものを成立せしめ

た。之が段々成功を見るに及んで、貴顯紳士の賛成を得、畏れ多くも　天皇陛下、皇太子殿下皇太妃殿下等からも御嘉納狀を頂いたのである。處が段々研究して見ると、此酒は普通の酒よりも變り易くて古酒に持つまでに至らない。そこで百萬圓を募集する積であつた株式會社も事業を中止し、同志相集つて殆んど數萬の負債を負うて、どうかして完全な酒を造りたいと苦心研究したのである。一體玉蜀黍は蛋白質も多く、脂肪も多く、又含水炭素も多くて、それから出來た酒はなかなかよいのであるが、どうも腐敗し易いといふのは、非常の苦心研究の結果玉蜀黍の皮をむかない爲めであることを發見した。

　此玉蜀黍の皮をむいて酒を造らうとしたのが、今度の人造精白米を發明するの原因となつたもので、皮をむいて之を精白して見ると殆んど米と變らざるものを得たのである。そして之を試みに炊いて見ると、之れ亦殆んどお米の御飯と變らない。そして之を分拆して見ると

品名	水分	蛋白質	脂肪	含水素	纖維質	鑛物質
玄米	一四、五〇〇	八、六〇〇	二、〇〇〇	七三、九〇〇	一、五〇〇	〇、九〇〇
白米	一九、六九〇	八、一四〇	〇、二〇〇	七二、一五〇	〇、四八〇	〇、三六〇
大麥	一四、三〇〇	一〇、〇〇〇	二、五〇〇	六三、五〇〇	七、一〇〇	二、二〇〇
小麥	一四、四〇〇	一三、〇〇〇	一、五〇〇	六六、四〇〇	三、〇〇〇	一、七〇〇
人造精白	一四、七〇七	一〇、九七〇	五、八〇〇	六七、五六四	〇、〇二〇	〇、五二六

てあつて、蛋白質も脂肪も米に比して餘程多いのである。千代田病院長も此人造精白米の營養分多くして消化もよく食用として甚だ良好なるものなることを證明せられて居る。

　私が此人造精白米を發明したのは本年二月であるが五月廿三日に特許局に出願し、八月になつてから下谷徒士町に賣捌元を設けてやつて居るが各府縣から一手販賣を許せとか、又横濱の或商店からは全國の一手販賣を委託して呉れとか、非常な好評を博して居る。

　今や米價騰貴して細民飢に泣くの時、彼等に安價にして滋養に富み、而かも外觀も風味も白米に劣らざる此人造精白米を給することが出來るのは私の密かに大いに滿足して居る所である。今此人造精白米は一升十二錢であつて、米の價の半分である。

　私の商會ではまだ資本も乏しく、又原料も充分にないから、極く小仕掛にやつて居るので、一般の需要に

應ずることは出來ぬが、將來需要があればいくらでも供給することが出來る。といふのは馬齒形の玉蜀黍は極く栽培の簡單なもので肥料も入らず、そして何處でも出來て且つ收入のなか〳〵多いものである。夏作一反步の收入は大抵十三圓位の平均のものだが、馬齒形の玉蜀黍は一反步十八圓位取れる。即ち一坪に十本の玉蜀黍を植ゑ、一本から一合五勺取れるとすれば一坪が一升五合、一反步が四石五斗であつて、一石四圓に買つても充分間に合ふのであるから十八圓の收入があることになる。今夏作の收入表を舉げて見ると

一反步玉蜀黍收獲ニ對シ雜穀比較

種目	施肥料	收獲石數	一石ノ價格	合計
陸稻	五、五〇〇	一、二〇（石斗）	一二、五〇〇	一五、〇〇〇
粟	五、五〇〇	一、六〇	七、七〇〇	一二、三三〇
大豆	一、二五〇	一、〇〇	八、三三〇	八、三三〇
稗	五、〇〇〇	三、〇〇	二、五〇〇	七、五〇〇
薩摩芋	二、六〇〇	二、五〇メ	七、七〇〇（百メ付）	一九、二五〇
里芋	三、五〇〇	二、〇〇メ	八、〇〇〇	一六、〇〇〇
胡麻	四、五〇〇	七〇	一二、五〇〇	八、七五〇
平均	三、九七八			一二、四五〇
玉蜀黍	三、九七八	四、五〇〇	四、〇〇〇	一八、〇〇〇
差引增收				五、五四九

であつて、玉蜀黍は實に薩摩芋に次ぐ所の收入である。だから農民は喜んで玉蜀黍を栽植するに違ひないと思ふ。で今日は全國で玉蜀黍は六十萬五千六百七十七石位(昨年の統計)しか取れず其中馬齒形の玉蜀黍は十二三萬石位と思ふが、之を百萬石にも五百萬石にも或は千萬石にもすることが難くないと思ふ。そして玉蜀黍を精白にすると其七割は所謂精白米となつて他の三割はもつと細かいものになる、けれども其細かいものも團子か何かにして食ふことが出來るから、廢るのではない。

私は先きの芳醇酒造株式會社に凝りて居るから、今俄かに大廣告をすることを避け、着實に其實蹟を世間に舉げたい考でやつて居るが、之が若し一般に知られ、歡迎さるゝ事になつたならば我國の食物問題に向て大いなる寄與をなすことが出來るだらうと思ふ。

政友會の樞星、客星

黑頭巾

其一

◉八月廿六日、晴れて熱つき日ありき。此の日、侯西園寺、新内閣組織の大命を承はるべく、避暑地の伊香保を發して、正午、上野停車場に著すべし。午前十一時過、吾輩も亦た駒籠より山の手線に搭じて上野に向ふ。郊外の森や、田や、濃き緑りの香は、車窓に向つて涼を煽りつゝあり。煙草の煙は、緩やかに窓を流れて、新たらしき空に泌ふ。行く〳〵新宰相の入京の顏色を想像す。

◉停車場に到れば、早や、一等室の一偶に陣取れる、白衣の客あり。詰襟の瀟洒たるが、黑靴の編上げを穿ち、鼠色の手袋をさへ穿めたり。美髯の、物々しく手入れされたる、眼鏡の金緣の鋭く輝ける。彼は松本君平とこそ聞く。帶の儘の葉卷を吹かせつゝあり。

◉二等室には、旅客らしきが充ち、一等室には、次第〳〵に、輕裝の人來る。概ね新聞記者なるべし。其の或者は、松本を環りて話す。

◉詰襟の白きに、白髯の短かき、逞ましき男來る。佐竹作太郎也。袴羽織に扇を斜に構へて、鬚を剃らぬ儘の、儒者臭さが、微笑を呑んて來る。小池靖一也。彼は新宰相の文事秘書也。

◉巴里式の髯に、麥藁帽の輕きを戴き、サッパリとしたる脊廣の、丈高き美丈夫來る。竹越三叉也。突として一等室に入り、一坐を見て、「正午著といふは確か乎」など云ふ、微かに、面に紅を潮す、ット寄りて、鼠色の手袋の儘なる松本の手を握る。

◉新宰相の馬車は、既に、定例の出口に、待ちつゝあり。御者臺に、腰掛けたる男の、ナポレオン帽に、白皙の、鼻下鬚は、大樣に、ポケットを探ぐりて、煙草取り出す馬丁、急いでマッチを捧ぐ。バット音して、敷島の煙、漲り湧く。

◉時は、漸く近づけり、知るも知らぬも出迎らしきは群れ合いてプラットホームに集る。群集は、二三十を算すべし。いづれを見ても新聞記者らしからぬは無し

「吾も見る可く爲に」などゝ語るが聞ゆ。群衆の雜話の間に、群を遮り、話を遮りて、寫眞機の整頓の、稍ガチヤ〳〵と響く。

●刻、一刻、正午は近づく。領袖來らず、富豪來らず、新宰相を出迎の顏は、最早や新たらしきを加へず、集まれる儘の群衆は、次第〳〵に、プラットホームの向ふにと雪崩れ行く。

●蒼皇として馳せ加はる者は、皆、寫眞師ばかり也。非常の急速力を以て、或者は、三脚を据え、或者は、ピントを豫定し、準備の急成功の滿足は、悉く、其の面に溢れつゝ、陸續として、參差として、プラットホームに綿亙せる寫眞機の密集陣は、爾靈山上に排列したる機關砲の氣勢も思ひ遣られて、やがて此の前に現はるべき大人物も、爲めに睨み萎くめらるべく見ゆ。

●轟響來る。午砲鳴る。汽車は、巨人の猛勢を以て現はれ來る。新宰相來る。

其二

●機關車止まる、黑煙眞直に噴く。窓の中に、早や、歩みつゝある白き巨人の見ゆ。驛長は素早く室に入る白衣の人は、輕く帽子に、手を加へて、入り違つて闊を排して出づ。新宰相現はる。

●新宰相は、敢て寸歩も留まること無し。群衆に、忙がはしく、輕く會釋しつゝ、ステッキ片手に、颯々と行くこと飛ぶが如し。小さき驛長は、刻み足に、奔り且つ隨ふ。出迎の群衆も「機關砲」も、算を亂して一散に追ひ行く。

●新宰相は早く既に箱馬車の中に在り。御者は、長鞭を眞直に擧げて待ちつゝあり。白裝の二令嬢、後れて漸く來り、新宰相の左に坐す。新宰相は、白リンネルの脊廣に、鍔の淺き麥藁帽を戴く。氣品に富める鬚無き顏に、大なる眼の、箱馬車の中に輝く。

●馬車は、緩やかに動き始む。新宰相は、丁寧に、群衆に會釋す。車聲轔轔として去る。鞭影、高く、塵多き空に擧がる。

其三

●肥えて短かき公柱は、つねに悠揚として公衆に見ゆ。會場に立つも、プラットホームを行くも、太き腹を押出し緩々如たり。而して其の眼は、滿場の人を見る。滿場の人、彼と目を見合はせりと思はざるもの有ること無し。

◎彼は、急がず、滯らず。其顏は、殆んど正面に向ひ、右

左を顧みるは、大船を廻轉せしむる位の角度なるべし。

◉彼の眼は、何物をか探がしつゝあり。稠人廣坐の中知音を發見するに怠らざるの意は、彼の眼中に見ゆ。

◉或は、公桂を以て十六方美人と爲す。公の愛嬌は其の眼に在り。公の眼は、涼しく、明かに、情を含んで、つねに物を言ひつゝあり。唯だ其の眉の上、一帶、少しく緊縮して、一線の皺を、淺く劃し、其の考慮と、制情と、勇氣との、油斷無く働きつゝあることを象徴す。

◉猶ほ且つ、前半生の精悍と、洗練と、努力とを以て贏ち得たる、今の榮華を裏付くる「苦勞人」の價値は、併せて、此の皺一線ならずんばあらず。

◉侯西園寺と公桂との相違は、此の皺一線にも現はる。侯は此の皺を解すれども、侯の眼邊には、此の皺を生すべき苦勞の生涯を有せず。

◉侯の眼は、溪水の如く明徹也。ひとり澄みて、人事に關せず、或は、好鳥の眼にも似て、清く、愛らしく、高く、詩的美あれども「意味」を現はさず。

◉鳥の眼は、見る爲にして、見らるゝ爲にあらず。公桂の眼は、見らるゝ爲にあらざるも、人に見られて意味を生ず。

◉廣告のモデルは、眞正面は過ぎたり、『正面的』ならざる可らず。八方を見、八方に見られざる可らず。萬龍のビラも、千兩額も、此の意義に成功す。而して、此の意義に於て、古來、吾が日本に於て理想とすべきは、宮島の繪馬堂に於ける『八方睨みの鹿』の扁額を推して傑作と爲さずんばあらざる也。

◉政治家は廣告的ならざる可らず。つねに廣告せざる可らず、然らずんば、忽ち、人に忘れらる。若し、天稟に、廣告の要素を有する政治家あらば幸福也。

◉這般の意義に於て、侯西園寺は、一切、無頓著なり。而して公桂と、目を見合はせたる者は、彼を忘るゝ能はず、田舍議員、田舍の惣代は、竊かに、之を以て東京土産として心に誇る。

◉吾輩、數々、宮島に游び、つねに、『八方睨みの鹿』を讃嘆す。而して之を回想する毎に、公桂に想到せずんばあらざる也。

其　四

◉柳亭種彦は、まぼろし草紙に序していふ、「むかし郡間の衣の裾が、其の踵を覆ひし頃には、合卷の脚色も簡單にて、人も滿足せしが、今は裾短かになりて、脚色は長からざれば、讀者に顧みられぬようなりき」と。

政治の變遷を語る者、豈又、此の感を同じくせざらんや。

●今や、裾の長短は言ふも管也。洋服の帮間も出來る世の中、脚色の新たらしくて複雜なるに非ずんば、世間の喝采を博さんこと思ひも寄らず。

●公桂は、這般の世態を、極めて能く默解すと傳へらる。彼の眼、其の一擧手、一投足、つねに、複雜にして、目先きの新たらしき趣向に富める、彼の心的情態を表現せざるは無し。

●彼は、後賢を薦め、人心を一新すと稱して冠を掛けて去る。而して新宰相は、動もすれば、「門閥の秀才」を以て目せらる。「門閥の秀才」は、賢こき若旦那を意味す。怜悧なれども、複雜なる心的情態を有せず解せざる事をいふ。

●世人は、侯西園寺の、眼の澄みて、山の井の水の如きを見、直ちに、其の人の單純、平明なるべきを想像す。

●山の水は、明徹なるは、其の出處の清閑にして、町の塵に遠ければ也。其の性分は、須らく的切なる分拆を必要とす、山の水、往々にして、いろ／＼の鑛質を含蓄す。其の淸く澄める水に、複雜なる成分を有することあり。

●吾輩は新舊宰相の人物を、周く比較し、評騭するの必要を認めず。試みに、其の總裁振りを見ん。

●今に於て、政友會の總裁たらしむべきを求めば、侯西園寺を外にして、公桂の外、適材あること無けん。伯寺内伯山本則ち之に次ぐ。然れども、皆、是、論者の空想に留まる。事實に於て、總裁たり、たるべきは侯の外、有ること無く、而して侯は無二の適材たらずんばあらず。

●公桂、政友會と情意投合するや、其の代議士を招宴す。此の日、彼は、滿足と、愉快と、希望と、成功と、操縱と、威力と、いろ／＼樣々の複雜せる表情を、其の眼と態度とに現はす。

●侯西園寺は、いつも、恬然、淡然、岫を出る雲の如く、行掛りに依つて始めて動くの仕振りを示す。

●今の政治の實際上、非政黨と、政黨との、政權の取扱に於ける、尤も複雜にして賢明なる方法は、情意投合に若くものある可らずと思はる。而して、外見には、公桂は、此の最善の法を爲したる人にして、侯西園寺は爲されたる人らしく見ゆ。

●致したりと見ゆるも、致されたる人の賢こきが爲に

して、致すも、致さるゝも、其の實は此より外に、良分別無ければなるべし。而して、致されたりといはれ種々に批評されつゝ、確かと、此の大政黨を纒めて、抑へて動かさゞるところに、總裁の貫目は、爭ふ可らざるものありて存す。

其　五

●侯西園寺は、其の政治思想の於て、公伊藤と、全然、其の軌を一にす。彼は、公の繼承者也。唯だ彼は、公の情熱無く、精悍無し。然れども、其の總裁振りは、或は之に過ぐ。

●政友會は、創立以來、唯だ二人の總裁を有す。第三の總裁は何人を推すべき乎。是れ、必ずしも急ぐ可き問題には非ず、而して政友會の死活問題ならんずんばあらず。

●公伊藤は、頗る黨務にも干涉したり。當初の訓練時代、已むを得ざるものありしなるべし。

●侯西園寺は、黨務は、一切、原、松田に委任す。彼は、盲印を推すのみ、或は推さずとも差支無かるべし。彼は、すべて之を煩るさしとす。故に、公には、黨務に由つて或は苦情の種あり、侯は、則ち、つねに黨員に煩かられず。

●公は、總裁の獨裁を以て大政黨を卒ゐる事を教ふ。而して、此の理想を、眞箇に實現する者は、則ち侯ならずんばあらず。

●侯は、黨務、殊に、地方に於ける黨勢擴張の事などは全く放任し去る。此の事に關し、黨員に、多少の出來、不出來あるも、更に意に介せず。而して中央政治の一事に至つては、則ち斷々乎として他人の容喙を許さず。

●政綱の決定、政權の授受の大問題に至つては、彼は、絕對に、獨裁主義を執る。原、松田と雖も、往々にして與り知らず。

●政友會の大問題の起るや、總裁の胸中は、黨員すべて窺知し得ず。面會を求むる者は、玄關に擊退せらる、質問を試むる者は、言下に拒絕せらる。

●侯西園寺は善く談ず。而して、一切、胸中の秘機を吐かず、醉ふと雖も、本音を吐かず。唯だ、二三の頭腦精明にして、彼の歡心を得る者、酒間、僅かに模索を試むるを得るのみ。

●彼は、相手に、引き出されず、釣り込まれず。突けば、突き返へす、突きては出てず。角力道より見れば、彼は、底力の知れざる、稀有の大力士たらずんばあら

ず。
◉彼は、名門の出なるが故に、尊きにあらず。能く、此の如き人格の力を現はし得るが故に、重きを爲す。
◉彼は、消極的の性格にあらず。彼は、思の外、大膽にして、積極的の人也。問題の大なるほど、多々、益、總裁權を揮つて、人を人ともせぬところに、彼の眞價の發揮さるゝを見よ。
◉蓋し、公卿の名門には、往々にして、突飛に放膽なる英才出づ。中山忠光の如き、姉小路公知の如き、岩倉具視の如き、而して今に於ては侯西園寺あり。
◉放膽といふは、粗放にあらず、人を恐れず、憚らず、無遠慮に振舞ふの、平氣なる態度をいふ。
◉彼が明治十年に、東洋自由新聞を發行して、朝野を驚かし、同族の肝を燒きたる放膽なる態度は、則ち、今の、總裁振りならずんばあらず。
◉雀は百まで踊りを忘れず。彼は、今、踊らざるも、忘れたるにはあらず。尚ほ、且つ、今は、踊の外の、いろ〳〵の、藝を覺えたる也。
◉彼は、東洋自由新聞の社長にして、松田正久は主筆なりき。兩者の干係は、今、猶ほ昔の如し。依然として鐘と撞木と也。然れども、社長も、總裁も、吾儘なる鐘ならずんばあらず。撞けども、音を出さゞる事あり。或は自から鳴ることあり。

其　六

◉侯西園寺は、屢、逃げ腰を張つて、政友會員を焦らす事少からず。或は、彼が逃げ腰の態度に立つは則ち彼の强味なる所以を說く者あり。此の如きは、半可通の說のみ。
◉今日の場合、彼が逃げ腰の有効なる所以は、逃げ腰なるが故にあらず。彼に非ずんば、眞箇に總裁を得難ければ也。
◉彼は、名門の出なるが故に尊きに非ず。彼の器にして、名門を兼ぬるが故に、政友會に隨喜せらるゝを致す。
◉名門は官僚に集まり易し。政黨に沒頭する者にして名門の偉器彼の如きを得るは、今に於て、尤も珍とせずんばあらず。
◉彼は、本來、逃げ腰の人に非ず。彼に執心の少きよう見ゆるは、執着力の、必ずしも足らざるには非ず、彼の聰明にして、前路の見込、早く立つが故に、蠻勇を振ふに堪えざれば也。
◉吾輩は、政友會が、大政黨としての態度は、未だ大

に、世人に慊らざるものあるを思ふ、猶ほ且つ、此の大政黨の面目を發揮するの人物も亦た多からず。

●政友會の誇りは、其の總裁ならずんばあらず。總裁は、政治の理想あり。進歩主義を有し、新見に富む。氣品あり、才幹あり。學問あり。門閥あり。政友會を花嫁とすれば、彼は、過ぎたる婿君ならずんばあらず。

●彼は、妙に、團體心理を解得す。大政黨を操縱する一種の呼吸を默解す。何故とも無く、「お坊ちやん」の如くに思はれて、隱約の間に、特技を發揮す。

●彼は、元來、政友會には婿養子也。然れども、今に於ては、兩情の干係に於て、彼は情夫の位置に在り。政友會より取縋がるゝ關係に在り。逃げ腰の有効なる所以ならずとせんや。

●彼は、文學、藝術に造詣あり。魯庵の譯文を、佛語と對讀して誤譯を指摘せしといふ位の通人也。若し、徹頭徹尾、文學趣味を以て、彼を描き出さば、また面白からんと思ふ。

●京傳の「繁々千話」の一書、戀路の景物を寫し出して頗る趣味あり。彼の逃げ腰は駄々に非ず。所謂、戀路の景物ならずんばあらず。

其七

●新内閣は、喝采を以て迎へらる。其の壽命に至つてはいづれ長かるべしとは思はれず、須らく、短かく鮮やかなるところを遣つて退く可き也。

●新内閣の顏振れと、役割とは、共に、新味あり。好意を以て解釋すれば、他日重來の餘地を爲すものとも思はれざるにあらず。

●公桂の去るは、極めて巧み也。侯西園寺の起つは、其の時に非らずといふ者あり。然れども、難問無き政海日和に、内閣を受取らんといふは、六ッかしき注文なるべし。遠き、十年の後を期するの忍耐無くば、今に於て受取るは決して惡しからず、唯だ、樞星の胸中には、重來の豫備無かる可らず。

●陸海軍は暫らく措く。大問題は、財政に在り。山本達雄を勸銀に抜きて、此の局に當らしめたるは、啻に、新人物を引上げたるのみならず。政友會として、其の頭目が、此の難局に立たざるは、巧妙の措置たるを失はず。

●山本としては、藏相は、光榮餘りあり、必らずや粉骨碎身せん。恐らくは、新たらしき彼は、實業家を籠絡するを得ざれば、戰ふの氣あらん、腕を見するの志あらん。彼は、未だ箇人勢力乏しく、專ら、經綸に腐

心せん。
●異數の出世は、山本をして稍、狼狽せしむ。彼に在りては、昔し、日銀の總裁たりし事、既に、一期の面目たり。近年、沈滯して振はず、公桂に拾はれて、勸銀に據る。桂の恩、亦た大ならずとせず。一旦、藏相の内命を承け、公桂に一言せずして新内閣に入る。
●世間、或は、山本が此事を以て、公桂に怒らるゝといふ者あり。公桂はさほど小さくもあらざるべし。然れども山本に於ては、失策たるを失はず。
●新力士の、初めて國技館に登場するとき、眼光定まらず、漸く落着くに及びて實力を出すを得。山本も、一箇月、藏相の椅子に座するの後ち、才子に不似合の失策無きに至らん。
●伯林の遞信、男牧野の農商務に於けるも、却つて、世人の期待の外に出づ。此の二人者は、政友會の客星といふを妨げず。且つ其の清廉の人格は、能く其の位地に副はん。
●林は、斯内閣の長老、必ずしも新人物にあらず、然れども、世人には、何となく新たらしく引受けらる。牧野に至つては、確かに、薩州人の呼び物たるを失はず。

●男牧野は、甲東公の第二子、吾輩、未だ、彼が如何に、乃父に似たるやを識らず。唯だ、彼の拘泥せざる圓滿なる、新趣味ある、而して薩州政治家の、色彩ハ、彼に依て稍、新たらしき形式に表現せらるゝものあるを思ふ。
●吾輩は、想ふに、山本は苦鬪するならん。若し、相當の成蹟を占め得ば、他日、政友會は始めて、專門の一財政家を得ることゝならん。伯林の旗幟は既に明らか也。遞相としては、可も不可もなし。而して世人の豫期以上に成功すべきは男牧野にして、其の聲價は、前文相の時に優さるべし。

其八

●松田は、藏相たる可くして、法相たるは、漸く彼の眞面目を發揮し來るを見る。政友會、一日も彼無かる可らず。彼の顏は、自から新内閣の重きを爲す。彼は、新内閣の福星なり。何大臣たるも可也。
●彼と總裁との舊因緣は、政友會に對し、一種、附家老の觀を爲す。附家老は、往々、家中に憚らる。而して彼は全體に親しまる。
●政友會の會議に於ける彼の議長振りを見れば、彼が、群衆心理を會得せるの深きは、驚く可し。彼の議事進

行の手腕は、頗る非凡也。殊に、其の妙は、大題を小題と做して、輕く、異議の種火を揉み消すの手際に在り。

●原と松田とは、車の兩輪也。原の澄める音聲、松田の濃たる眼光は、兩者の活動力の逕庭ある事を現示す然れども、松田無くんば、原の才、用をなさず、政友會の發動するとき、此の兩輪の速力は、同じ事也。

●原は、風にして、松田は水也。兩者の力の一杯に伸ぶるとき、原は、人を壓倒す。松田は、ヒタ〳〵として人を漂はす。淺く來るときは、人をして裳を掲げしむ。深く來るときは、人をして、自から裸にならしむ。

●原は、人の物を得るに、抑へて取る、追剝の强味あり。松田は、徐ろに喜捨を受く。圓熟せる老僧也。

●松田は、學問あり、讀書家也。彼の學問は、咽喉より上には出でず、臍の下に在り。外見には見えざれども、當つて見れば、重きを爲すを知る。

●松田が、藏相たらざるは、彼に在つては智也。政友會に於ける彼の實力を以てすと雖も、藏相として何程の成績を擧ぐるを得可き。閑地位に處して、勢望を養ふに若かず。

●今の松田は、新内閣の西郷從道たらずんばあらず。

公伊藤は、つねに侯西郷を以て、内閣の一要素としたるは、啻に、彼が、薩州勢力の重鎭たるが故にはあらず。

●侯西郷は、學問無し。刃の下を經來れり。沈默の間に切味あり。松田は、學問あり。言論に、人と爲れり。溫味（ヌルミ）あり、劍氣無し。彼は、冴えざる西郷從道なり。

其九

●野田卯太郎が、勸銀に入るの豫報は、事實ならざるべし。若し、事實ならしめば、新内閣の威信に關するのみならず、彼も亦た其の本領を沒却するものならずんばあらず。

●大岡育造は、寢言（ねごと）に、一度、大臣になりたしと言ひて傳へらる。野田は、寢言癖あり、然れども、未だ獵官を語りしを聞かずといふ。

●四十一年の四月、吾輩、藤波と共に、上方に遊ぶ。一夜、燈を剔て語るに、忽ち、隣室の客、大聲して寢言を言ふ者あり。其の春の議會の、名高き問題なりしと覺ゆ。斷續して語を爲さず、其の聲、甚だ調子外れ也。

●翌早朝、吾輩、洗面室に入る。續て來る客あり。相並んで、楊子を啣へて、何事をか物語りす。姿見に映つる、客の目元、口元甚だ粗野。頭禿し、丈高く、其

の肩、吾輩の頭に及ぶ。

●此の魁梧なる男は、則ち隣室の客なりし也。後ちに問ふて、其の野田卯太郎なるを識る。吾輩は、初めて彼を見るの前、先づ彼の聲を聞きたる也。

●駄句は、彼の旦那藝なり。旦那藝は、稍、其の趣味の人たることを示す、詩人には非ず。

●彼は、駄句を以て、商標とし、交際機關とし、時には、之を以て論説にも代ふることあり。

●實は、彼、學問無く、文筆無く、駄句を以て一切に代用す。駄句は彼の一口淨瑠璃なり。一口淨瑠璃の巧みならざるところに、却つて愛嬌あり。而して此の大男に、此の小さき商標は、兼ねて對照の可笑味を添ふ。

●政黨の本部は、學校の控所の如く、風貌言動の異彩ある者、先づ注目を惹く。注目せらるゝは、頭角を抜くの第一歩也。野田の魁軀、長谷場の鐵聲の如きは、殊に出世の地歩を爲すものならずんばあらず。

●野田の大腹、既に、人目を惹く。彼、財政の人たりといふ事、隨つて、注目せられ、重寶視せられ、漸次、其の地歩を占む。

●茫大なる政友會に、財政の人殊に少し。藏相たり、財政論者たる者は、尚ほ之あらん。然れども、實際に、財政界の調和者たり、傳令使たり、桂庵たる者に至つては、又た、一箇、專門の伎倆と、人格とを要し、有りさうにして甚だ少し。這般の適役政友會にありては野田の獨擅場に屬す。

●政治上には、旗色の鮮明なるを要す。財政上には、落離少し。野田が、侯井上に、公桂に、三井に出沒して、尚ほ、儼然、政友會員を以て標榜し得る所以なり。

●彼は、或意味に於ては「御用聞」也。他の臺所より出入して、茶の間に懇談し得る。芝居には三枚目也。ヒーローが、正面座敷の椽の上に、威儀を示すのとき、其の肥えたる顔を赭く隈取りて、椽の前に、來りて、踊りの形を見せつゝ、使命を報告する當り役ならずんばあらず。

●人格の高大なる者は、此の種の適役たるを得可らず。此の役は、魚ならば、青き魚なるべし。味は、美なるも、大名座敷には出されず、されど、家庭にも、經濟上にも必要なるは青き魚也。

●彼は、政治家としては、鷄鳴狗盜の雄のみ。鷄鳴狗盜は言ふに足らず。然れども、天下の大事實の行はるゝは、其の裏面、必らず鷄鳴狗盜の力に待つもの無くんばあらず。

其十

◉新内閣の成立に際し、ひそかに、成功の微笑を漏らしつゝある者は、野田也。彼は、嚴正なる解釋を以てすれば、寧ろ政友會の客星といふを得べし。

◉野田の價値ある所以は、官僚と政友との間に、介在し、奔走し得るに在り。若し、その心を許して任用せらるゝ點より見れば、彼の屬籍は、寧ろ公桂に近からん。然れども、公桂は、恐らくは、彼を利用するのみ。

◉政友會の幹部も亦た、這般の事情を知る。故に、彼に對するは、多少の匙加減あらん。然れども、領袖より見れば、官僚に對し、財界に對し、彼を働かしむるを便利とするの實情無くんばならず。

◉原敬は、或種の因緣に依つて、元老に關係ありと雖も、彼には、自から政治の本領あり。野田が、居中、介在、幹旋を以て存在の生命とするとは、同日の談に非らず。

◉野田等の居中的、財政役者の活動よりして見れば、公桂と侯西園寺との分野は、堂々、玄關を別にして、其の裏庭は、唯だ、一の「枝折戸」に依つて交通聯接せらるゝの感無くんばあらず。

◉此の「裏庭の枝折戸」的働役者には、野田の外、長谷場あり。大岡あり。今の長谷場は、當年の薩摩隼人にあらず、圓轉滑脱、政友の、樞星にして、元老に宜しく公桂に宜し。彼は、野田の枝折戸と、既に、其の選を異にし、少くとも「潜り戸」たり。其の大臣を贏ち得たるを見て知る可し。

◉政友會の中堅に、長谷場あり、野田あり、人氣は少きも大岡もありて、裏庭の折枝戸を爲すは、政友會の大なる所以なりとは雖も、嚴正に言へば、政友會の强味にはあらず。

◉情意投合は、先づ、裏庭の「枝折戸」に由つて、其の端緒を開かる。情意投合は、隣家の子女、枝折戸より懇ろに往來して、親しみを加ふるの後ち、緣談成立して、トドロと本門を開きて、行列を練り込むものならずんばあらず、若し功を録せば、枝折戸は、第一に居らん。然れども、古來、此の種の緣談に、枝折戸の優遇されたる例あるを聞かず。野田の大臣たるを得ざる所以也。

◉野田に、賞揚すべきは、彼に、三分の俠氣ある事と彼に獵官熱の無きとの二點ならずんばあらず。

◉野田にして、青雲に志あること長谷場の如く、大岡の如くならしめば、彼は斷じて、儕輩に愛せられず。

彼が、圓滿、斡旋を樂みて、他意無きところに、彼の本領あり、人氣あり。

●野田にして、今、勸銀に入ることあらば、彼の舞臺は、是れより狹くなるに至らん。彼の本領は、此に滅却して、第二次の情意投合あらんとき、此の人氣役者をして働かしむるを得じ。彼を勸銀に採用するは、彼を殺す也。

●當年、民黨の六派大合同の時、居中、斡旋の働役者に、平岡浩太郎あり。一時、盛名、政界を壓す。平岡も野田も同國なりしと覺ゆ。斡旋連合の大家の、つねに九州に出づるは、九州人の、茫大にして、何と無く、氣宇の寬濶なるところあるに依る乎。

●平岡と野田とは、全然、其の人格、態度を同じくせず。平岡の性命は政事に在り。彼の斡旋振りは、桂庵にあらずして親分也。町人臭からず、侍らし。品位あり、光華あり。絢爛たる態度、觀衆をして、敬意を以て喝采せしめき。

●平岡は、子分を率ゐ、黄金を散じて斡旋す。野田は、大人物に、附隨し、其の巾著となりて、居中の役を全くす。然れども、其の才氣は、侮り易からず。

●忠臣藏の役割を以て擬すれば、平岡は、本藏に扮すべく、野田は、遂に伴内たるを免かれず。然れども、彼や、存外に質實あり、義俠あり、其の表情の品位無きには似ず。古來、未だ、此の如き、愛す可き伴内有らざる也。(次回完結)

人物評論（二十一）

山本藏相論



△山本新藏相

三宅雄二郎

西園寺首相が勸銀總裁山本氏を藏相にしたのは桂首相が滿鐵總裁後藤男を遞相にしたのと趣を同くすると言はるゝが、跡形に於て左樣である。少し意表に出て、夫だけ世間を賑かにした所がある。けれども桂公が後藤男を入閣させたのは、何れだけか賑かしの爲であつたに相違ないが、園侯の山本氏を入閣させたのは强ち賑かしの爲でない、已むを得ざるに出た結果が偶然賑かしと爲つたので、此先も賑しに爲るや否やは疑問である。

山本氏を入閣させたのは、如何にも民間よりの拔擢であるらしいが、本と民間より拔擢する程の考あつたのではない、是より他に出樣がなかつたのだ。桂内閣で藏相の下働きし、實際藏相の仕事をした若槻氏を藏相に引上げるも如何はしくあり、其上氏自ら桂公と進退を共にする事を將來の爲に利益ありと考へたるらしくて、是れ以外に大藏省關係の人物を引上げ樣とすれば、阪谷男に逆戻りするより外なく、而して男には少し懲りた所がある。大藏省は陸海軍省若くは外務省の如く、特別の省で、特別の伎倆を要する樣だが、軍事又は外交と違ひ、錢勘定の事は誰でも多少心得、專門非專門の差別が明でなく、財政に特別の縁故のない松田氏が藏相と爲つたり、財政に縁故無きに於て是に讓らぬ曾根子が藏相と爲つたりした。桂首相自ら藏相を兼ねたの飛入りは飛入りである。なにも今更大藏省から引上げればならぬ事はない。それで差當り人が無いならば、近來藏相は多く銀行家を相手に相談し、桂公の藏相としての擔當も此に過ぎなんだし、一層の事、銀行家を藏相とする方が便利多からうと考へ、扨てこそ山本氏が引上ぐる事となつた。

銀行家の少くないのに特に氏を拔いたのは一見識であるかに思はれるが、是は政府關係の銀行に於て比較的最も先進者であるからである。年齡からいへば高橋男の下であつても、日本銀行總裁として先進者である。年齡の若くて日銀總裁となつたのは、何程か手腕の優つて居る所あつたともすべきであるが、言はゞ權力者の下で人を蹴落しても人に蹴落されぬ丈の事はある、己れの位置を守るに用心深く、誰れが何の關係などで能く氣が附き、一寸の事で煑ても燒いても食へんと見ゆる所がある。後楯さへあれば、大抵の困難に狼狽したり、大抵の攻擊に驚いたりせず、押しも相應に利く、大將がしつかりして居れば、一方面を任かす事が出來る。今のところ、財政の面倒は如何に處置するだらうとの事であるが、若し新に財政計畫を立て、前と異なれる方針に出るとならば、隨分考へ物であり、氏の適任であるやも疑はしいが、松隈内閣、憲政黨内閣の如きを除き、財政は歷代内閣の引繼きで、何々の係は何々の狀態で如何にすべきかは略ぼ分つて居る、分つた通りにして居れば差支がない。只當局者は一度び明言した事を後に都合が惡くなつて取り消す事を、威嚴に關する如く思ふたりする、取消して如何にすべきかを知つて居ても取消し惡い事がある、後繼者は其取消しに定まつて居る事を取消す位のもので、根本的に財政を整理するなどは初から思ひ及ばぬのだ。首相が藏相を選ぶにも左る根本的の計畫を立てん事を望みはせぬ、群れる繁雜の事務を處置して行きさへすれば足れりとする。尋常の事務でも時としては込み入つて急に處置し惡いものがあり、之を早く處置するのを腕とか手腕とかいふ、山本氏は左る事務を處置するには適するであらう、面倒な事面倒を見て行くといふは氏の長所とも言ふ可きで、松田、曾彌等數氏の企て及ばぬ所であり、且つ爲すを厭しとせぬ所でもある。桂公が若槻氏をして事務に當らしめた樣に園侯は山本氏をして事務に當らしむるのである。

如何にせば財政が最も堅實に整理し得らるべきかは人々それ〴〵考が

ある。山本氏にも何等かの考あらうが、氏は之を事實にし得べくも思はれぬ、世間で注目する程の價値ある事は有るか無いてあらう。つまり銀行家が藏相と爲るといふ例の開かれた丈で、銀行家が之を歡迎するのも、從來及びも附かぬ樣に思はれて居た藏相と爲れる道が開かれるを認めた所もある。山本氏が藏相になつたので、己れも藏相と爲り得るかに思ふものが少くない、次の內閣に藏相と爲るは日銀の高橋男か、正金の三島子か、何れかなどの取沙汰もある、添田氏も伎倆に於て是に劣ると思ひはせぬ、而して曾て日銀に於て山本總裁と爭つた河上、鶴原等の諸氏、皆竊に竪子與みすべしの感がある。目賀田男、若槻氏或は朝鮮の荒井氏が藏相と爲れば兎に角、然らざれば內閣更迭毎に或る銀行家を藏相とする事になる、少くも一時取沙汰する事になる。

銀行家が藏相と爲るは他の國にもある。特に佛國に於ては財政紊亂の極、銀行家ネッケルをして難局に當らしめた。ネッケルは實に紊亂を拯ひ得るだけの計劃を立てた。從來の官僚であれば遣繰りに遣繰りし、遂に破產する外無かつたのをば、彼は根本的に整理し初めた、實に適れであつた。が財政方面で力を現はしても、政治の機微を洞察する事が出來なかつた、假令洞察しても之に當るの用意なく、遂に革命の避くべからざるに及んだ。銀行家は經濟許りでなく、財政に明かであつても、往々政治に暗い、時には財政に戸惑ひしたりする。今は銀行家を藏相としても、左程大事を負擔せしむる意でなく、若槻氏の代りにする位のものだ。從つて政治に對して如何てあつても差支ない、相應に務まるであらう。けれども財政は重大事で、特に今日は最も重大事てあつても、是のみて政治を行ふ譯に行かぬことを忘れてはならぬ。

西園寺內閣の幹部は佛國仕込ともいふべく、其れ故に銀行家が藏相にしたといふ譯でもなからうが、聊か面白い緣あるやにも察せられる。が山本氏は藏相として何程の力量を發揮すべきか、四十四歲にして日銀總裁と爲り、銀行界第一の手腕家と見られたものが、藏相の職に當り、別段に見るべき事が無く、案外下らぬ男と値踏みされては、或は銀行家を藏相とするを無用とする事に爲るかも知れぬ、折角銀行界より出て藏相と爲つたからには、人をして成る程と思はしむる樣の事があつて欲しい只何か彼んか遣り繰りして遣り切つて行くといふ丈では物足らぬ。差當り、公債を如何するかで推し量るべきてある。倫敦タイムスは新內閣に財政整理を第一とすべきを勸めた、新藏相たる人、折角勉勵あれかし。

△官六民四の經歷

早川鐵治

山本さんが我々の希望する樣に民意を實行して吳れるかは疑問だ。民間に居る間は會社の使用人で、事業もした事なければ商賣した事もない。初は三菱に、それから郵船に、それから日本銀行に居たけれども皆使用人である、後には重役になつたといつても要するに月給取である。自身で經營した事といつたら一度もない、船問屋の丁稚から叩き上げて

銀行屋の番頭と爲つた。といふ迄だ。銀行は金貸である、金貸から拾ひ上げられて今度大藏大臣に爲つたのだ。事業家から大臣を出したといふけれども金貸ばかりが事業家でない。それに金貸の政局は憂ふべきである。西洋ではジユーが金貸をして居る。今日巨萬の富を積んでバロン何とかいつて居るのは皆ジユーだ。が金ばかりを貸付けるジユーなるものは國家の爲には必要でない。必要なる事業の多數は農民に存する、即ち重要物産を取扱ふものが一番大切なので、右の外には、鑛山とか商業とか製造家がある。が山本さんは其孰れにも一の御經驗がない。それで能く民間の事情に精通し居るとは思へぬ。

日本銀行總裁をしたといふけれども一番に仕事の樂なのは日本銀行である。馬鹿でも日本銀行は出來るといふ位なものだ。論より證據彼の老朽官吏上りの松尾臣善でも爲れるぢやないか。政府の特許に爲つてる銀行だ。安全なものだ、何の心配があるものか、阿呆でも出來る。然し中々松尾サンにはボロ會社の社長は出來ぬ。その總裁たりし山本を引き出して大藏大臣にしたからとて民意を充分に徹底することが出來るものか。

民間より抜擢などいふけれども、彼の是迄の經歷は如何うかといへば官吏である。官吏に近いのである。郵船會社にしろ、勸業銀行にしろ、日本銀行にしろ、此等は官六民四といつた組織である、其處から覗いて見た分で民間の事情の分ろう筈が無い。といつて純粹な役人の經驗といふものも亦無い。殿上りの役人などいつてけなすけれども。それには弊もあれば長所もある。習はうよりも慣れろで事務だけは能く取れる、其處へ行くと飛入は隨分いけぬ。三十一年に自由、改進聯立の內閣が出來た時、大臣から局長迄の要所々々へはすつかり政黨員を配り付けたが、一向腕が無い。椅子に倚つた計りで如何とも出來ず、卑い官僚派の小僧迄に自己の意見を左右され、閣議に臨むで語る意見は皆其官僚派の小僧の作つて呉れた小僧の意見である。其意氣地無さといつたら今考へて見ても嘔吐に堪へぬ。平素は慢痴氣にいや財政整理の、行政刷新の、民權擴張のと唱へて居た大立物のざまは無かつた。當時某は不幸にして大隈總理の幕僚と爲り、實地に就いて見て居たので其意氣地なさに嘆息した。生中四ケ月計り天下を取つて居たがその爲に立憲政治に一挫折を與へたのは殘念な事である。彼の時天下を取らずに置けば立憲政治の本領をばも少し早く發揮するの時期に到達するのかも知れぬ。只其時取つたが爲に四十四年の今日迄まだ官僚政局の政治を見るのだ、詰らぬ事をした。

山本は純官吏でもない代りに又野武士でもない、即官六民四の境遇で來ただけに、事務の取り方だけは知つて居らう。或は政治屋よりも幾らか行政事務を執る事を知つて居らう。去り乍ら大藏省は單に金融、外債の事のみが商賣でない、各省の豫算に關係して重大な仕事をする所である。然るに其各省の豫算はといふと。各大臣皆自分に定見立たず、一切左右の屬僚任せて、そして其所管の省の豫算をさへ多くすれば足れりとする。勢ひ大藏省で受け切れぬ程に經費は膨脹する。それを左右に折衝し程能く切り盛りして適當の處に喰ひ止めればならぬ。此處に行政の腕

が要る。が山本にはそれが有るだらうか。恐らく行政の智識は此某程にも無いと思ふ。それで能く富樫左衞門に爲つて關所で旨く喰ひ止めが出來るか知らぬ。

併し彼れも一隻眼はある。其日本銀行に居た時でたつた。當時恰も日清戰爭後で、諸種の事業が新に勃興したのを見て、時の農商務次官金子堅太郎は、彼の普佛戰爭後の經濟界の飜譯物の意見を受賣して頻に悲觀説を唱へ、我輩はそんな事があるものかと馬鹿々々しく思つて居たが、流石は山本である。氏がそれに反對して唱へた樂觀説には全く我等も贊成した。それは事業の勃興には幾多憂ふべきものも有るには有つたらうが、併し今日に存する大きな事業は多く其時の者である。鐵道にせよ、紡績にせよ皆然りだ。兎に角日露の時よりは成績が宜かつた。即ち我々は金子の愚説に對して氏の説には甚だ贊成したものだ。此時である。初めて山本は少く話せると思ひ同僚間にも語つたのだ。友人柳谷謙太郎も某に向つて。如何だ、彼は己れが世話したのだが一寸は話せるかいと言ふから、左樣だ、話せるといつた。斯樣に強ひて交りもせぬけれども敬意だけは拂つて居た。腕の有る事は知つて居る。が彼は實業界を知らぬ。只一部を知つて居る丈だ。それに行政官にはなつた事がない。それ故今大臣に爲つたからとて俄に褒められもせぬ。世間も少し評を控へたが宜いか知らず、彼も亦少し自分で氣を附けたが宜からうと思ふ。

△山本達雄氏

男爵　澁澤榮一

山本新藏相と私とは年齢も違へば從來の境遇も異つて居たから、お若い時の事は詳くは知らぬ、併し丸でお知り申さぬといふ譯では無いけれども、私とは特別なる御親しみがあるでもなく、表立つた所で通常の交際をして來て居るばかり、事業を共にし、喜憂を同ふした事はないから只才能ある立派なお人には相違ないけれど、其手腕の如何程迄であるかは知りませぬ、が事物の早分りのする、又結局の所に直に目の通る、頗る勉強家で人を知るの明も亦勝れて居る樣に思ひます。流石に今日に於て彼の位置に御立ちに爲る程の一種の人才と稱して宜からうと思ひます。

が氏の是迄の事業の經營方法に就いて見ますに、大して目立つた事はない、山本氏あつて初めて出來たとか、彼の大節に臨んで毅然として遣り了せたとか見るべき事はまだ無い樣に思はれます。何事の障碍もなくスラ〳〵と發達して來て居られる。或は有つたでもありませうが私は知りませぬ。詰り順序好く進んで餘り困難の位置には立たれなかつたと申して宜からうと思ひます。古語に艱難人を玉にすといふてある故に人を玉成するには相當なる艱難を經てでなければならぬ樣にも思はれますけれど、是も考へものであります。人が世に立つて何時迄も困苦ばかりでするのは、其人に知慧がなく、能力がなく隨て勉強心も少くして只下らぬ

事にのみ苦勞するのである、早く其困苦を切り拔けるか又は其方に廻らずに行くか、廻るにしても其困苦を困苦に至らしめずに濟ます丈の知慧と勉强力が無いのである。それ丈の知慧と勉强力のある人でさへあれば、困難はあつてもそれを未然に避けるか巧に切拔けるかして安樂郷を迎へることが出來る。兎角に安樂に就いて困難を避けるは善くない事の樣に、東洋學理では人を評するけれども私には少しく說がある。成程卑怯未練に困難の位地を遁れて安樂境に移らむとするは宜しくないが早く機を見て之を未然に防ぐとか、もしくは勤勉これに打ち克て樂地に至らしむるのは最上の事と思ふのである。

それならば人は絕對に危を避け得らるゝかといふに、左樣ばかりはいかぬ事がある。是は實業界には不適當なる一例なれども湊川で打死せられた楠公の如きは其成敗の如何よりも、只此事に我臣たるの本分を盡すのみならず、將來多數の人の模範たらむと思ふ上からして此覺悟が出來た事と思ふ。楠公は彼の場合に萬一を僥倖したとは思はれぬ樣であります。尊氏が九州から大擧して來るからは其勢は尋常であるまい、今其銳を迎へるのは策の得たるものではない。宜しく前の例に倣ひ天皇は義貞を召し具して叡山に臨幸あらせられ、正成も河内に退いて敵を京都に入れ、機を見て四方より攻擊しませうと申上げた位だから、湊川の一戰は勝算を持つて居らぬのは明瞭である然るに坊門淸忠杯といふ搢紳家が正成の議を沮み、何でも善いから、敵を皇城の外に拂へと無暗な事を言つたから、遂に默して爭はず、臣節を湊川に竭したのであります。此等は知慧もあり能力もあつて、十分に其機を見ながら、猶且つ艱難の渦中に投じたのであります。それ故人は或る場合には只樂地のみを拾つて行くのみが宜いとはいはれませぬ。

けれども世間では一向に、或る幸運なる人を見ると、彼は困難を避け錯節に出逢はぬといつて非難し、却て困苦を嘗め難局と戰つた人をのみ珍重する、若し此點からいふならば、山本新藏相は是迄餘り艱難に出逢つたとは見受けられませぬが、蓋し事物を見るの明察と機先を制するの能力と困難を未然に轉じ樂境たらしむるの手腕があるのでせう。それなら困難に遭遇する人は、皆智慧も勉强も足らぬかといふに左樣もいかぬ。商賣上の例としては不都合の例なれども前に述べた湊川の楠公の如き事がある故に政治上に關しても、知りつゝ難所を選んで進むべき場合も澤山あろうと思ふ。

山本新藏相は兎に角智慧と能力と勉强とで、是迄至極順序好く發達せられましたが、更に一轉して一國の財政整理の地位に立たれましたのは其過去の智慧と勉强との結果であつて氏に取つて榮譽とすべく他よりも最も稱賛もすべきでありますが、併し今度は是迄の樣に程好く行くか如何かは問題である。隨分困難もある事だらうと深く御同情します。どうか或る場合には湊川に踏み止まる處迄やつて欲しい、楠正成になつて欲しい。事の成就許りが決して名譽でない。敗れるも亦成功だと思つて貰ひたい。氏の働で日本の財政が完全に整理され安穩の狀態となりて國民に安心を與ふれば實に結構なる事である。極言すれば國家の爲に忠實に

して、能く經濟界の實際より立案せられ、萬一にも軍事界に壓迫されて更に困難なる財政の有樣に立至らしめたといはれる事の無い樣にして欲しい。

私は氏の日本銀行總裁、勸業銀行總裁の時を通じて十數年來懇親にして、居ますから、其御手腕と其志操と其才能とを承知して居ます。實に勝れた人と思ひます。が今日は一部局の經濟ではなくして一國の財政といふ責任の大きい地位に立たれまして。折角吾々の將來大に期待して居りたる經濟界の人物が出られたのであるから偏に、此藏相に因つてこそ從來の經濟界の紛糾が正確に矯正されるのであらうと思つて居るのである、どふぞ其期待に副ふ樣にして欲しい。但し隨分困難でありませう。只巳むを得ざる場合に當りては官職に戀々せず、大臣の椅子を弊履の如く、抛ち去られことを希望するのであります。

△山本新藏相の人物

靜觀居主人

山本といふ人は私は丸で知らない。顏は知つて居る。又同席した事はある。があの人を評する程の資格はない。然し噂はいくらか聽いて居る。大分剛情な人らしい。或は少し其度が過ぎて、人に怨を報ゆるといふ樣な事まで到る人ぢやないかと思ふ。さう思はるゝやうな噂を聞いた事がある。其れはまアいゝ事ぢやない。それから少し威張るんぢやないですか。自分の持つてる權力を極端まで揮はふとする傾がありはしないか。若しそんな事があつたら、皆いけないだらうと私は信じて居る。想像であるからよく分らんが、西園寺總理大臣は、大藏はあの人でなければならぬと信じてやつたのではなくて、あの人と西園寺の間には人が一人挾つてるとしか思はれない。或は西園寺さんはあの人をよく知らないで、所謂不見轉買ひをやつたのかも知れないと思ふ。けれどもこんな想像は西園寺さんに對して甚だ失禮かも知れない。若し失禮であつたらお詫をする外ない。

大藏大臣に就職以來あの人はまだ何にもしない。只一寸目立つて見えたのは、あの人は次官を選定するのに一番後れて居る。あつちにもこつちにも持つて廻つて居る。之れは餘り手際よくなかつたといはなくてはならぬ。從て其形跡から推して見れば大藏省は旨く纏まるにしても、特殊銀行はいくらもある。又政府の下に働く銀行もいくらもある。そんなものに對して旨く行くか。次官を極めるに困難したお手際から見れば一寸疑問だ。そこいら邊が無事に行けば私は大した困難があらうとは思はない。

財政上についての希望はいろんな方面から澤山にある、が實地を離れて希望すれば空望になる。空望を構はずやれば、いくらも注文があるがそれは無駄な話だ。又稍々實地に施さるべき希望がないでもない。然しそれは山本其人がやるといふ決心をつけてやるよりも寧ろ其同僚―仝僚よりも西園寺首相其人がやると決心をするので、山本の力によるもの

ではない。元來前内閣では首相が兼任した大藏大臣であるから、其弊がついて居る。總理大臣が財政を研究して決斷してやればやれぬ事がなからうと思ふ。けれども普通世間に有り古れた希望は到底も容れられる餘地はあるまいと思ふ。非常な改善、改革を行はうと觸れ込んでも、押し詰めて見れば何にも出來られぬ事が多い。餘り注文せぬ方が賢くはあるまいかと思ふ。

△新藏相の抱負如何

中村彌六

山本氏が藏相に親任されて以來、新聞記事の一部分は氏に關する事柄で埋め居る有樣である、が先づ氏の人物とか手腕とか適否とか見る前に、何が故に藏相ばかりが斯う迄世間に目指されるかを考へればならぬ。

山本氏は從來實業に從事し、特に日本銀行總裁を迄した人であれば、謂はゞ適材が適處に行つた譯で何の不思議はない。不思議とすべきは寧ろ從來教育も餘り澤山受けず、又した事もない長谷場氏が文相と爲り、實業の事といへば恐らく農工商の何れにも經驗もなく智識も有るまいと思ふ牧野氏の農商相と爲つた事である。此二つに就ては人に據つて官職を與へたので、官職に據つて人を求めたのではない。が藏相の椅子だけは左樣ではなく確に官職に據つて人を求めたといへる。すれば世間の視聽は前兩相に向くべきであるに、その方は閑として聲無くして、獨り怪む、山本氏のみが嘖々として新聞評の矢表に立つて居る。それは何の譯かといへば、僕には少しく一葉墜ちて天下の秋を知るの感が有る。即ち此藏相に對してのみ斯くも新聞記事の賑はうのは、一面に於ては如何に人民が戰後の負擔の重くなり、經濟界も振はぬといふ事實を覺り得たかの確證である、即ち適材を適所に得た。吾人の苦痛を直接に知つた此人が今は藏相となつたからには、必ずや是に對して適當の政を施し病苦を治療して呉れるであらうとの望を屬するに過ぎぬと思はれる。是が一つ、尙ほ一つは凡て今日迄遺憾乍ら天下の人民と政を共にするといふ考が、歷代の内閣に缺乏して居たのが、今西園寺侯の内閣に依つて始めて一面に現はれる事と爲つた譯である。歷代の内閣才を求め能を擧るに廣き天下に於てせず狹き官僚に於てせる事は幕政時代門地に限られたると異ならぬ。即ち國務大臣なるものには、凡て官歷を經、漸上りに段々上つて來た者でなくてはされなかつたのに今山本氏は官界には些の履歷なく、出所にしてからが赤門出でも無し、生地にした所で藩閥にも屬せず、ほんの一介在野の布衣が、内閣でも最も大切な藏相と爲つた。此一部分だけは世人の常に期待して得られなかつた所であるのに、今度初めて得られたからといふにも因らう。

今迄の内閣は何を以て、天下と共に天下の政を執る誠意が無かつたといふか。先づ例を近き前内閣に引いても分る。相當に用事の有る遞相が拓殖局副總裁、鐵道院總裁、滿鐵の顧問等をも兼任した、人間如何に力ありとも萬能ではない。限りが有る。而かも人の無い譯でない、若し天下と共に事を爲すの誠意と宏懷があるならば人は幾らも有る。見よ拓殖

局總裁には總理大臣、副總裁には國務大臣が居たが、今日は一介の元田肇氏が遣つて居る。元田氏にも遣らせれば遣れる者なら前内閣は明に才能を求めず漫に官職を私したと謂つべきである。斯る例は民間にも尚ほある。例へば日本銀行副總裁にして正金銀行總裁を兼れる高橋是清氏の如きがある。天下人無しと言ふ譯ではなく實は餘りあるのである。是れ公職を私するのである。此の如きは日常世人の見るも聞くも厭ふ程に慷慨して居る事である。然るに戰後の今日最も重きを爲す藏相の椅子に囚らずも從來の弊を破り實業界から山本氏を拔いたのだから、世人は恰も宿雨の後に忽ち雲を破つて太陽が現はれた樣にも思ふのである。是が藏相に對して有らゆる期待を以て迎へる譯と思ふ。兎に角好い現象である。人民と共に政治をするといふ點に、爲政者も少しは氣附いたらしい。今山本氏の擧げられたのを端緒として今後は如何なる內閣に於ても、無暗な人選には人民が承知せなくならうと思ふ。麵包一切れの價も知らぬ樣な者が藏相の椅子に倚るならば人民は決して默視しまいと思ふ。此の一事は確かに憲政の一進步である。

さらば山本氏は果して此一般國民の期待を受けてそれに背かぬ樣に遣れるか如何かといふに、是は氏に取つて難問であらうと思ふ。氏は僕の知れる限りでは綿術である。深謀の人である、輕擧する人ではない。正直に物事を考へる忠誠の人である。其長所を言へば創業と言はんよりも守成であらうと思ふ。が今日の財政を經營するに於ては大なる創業の英斷を以て守成の實を擧げねばならぬのだ。それ故守成、創業兩ながら兼ねた頭と同時にそれに伴ふ權力とを以てせねばならぬ。閣僚が特に氏を民間より拔いた處には一見識あるが、果して十分に其權力をも假し得るか如何か、其權力をさへ假すならば世人の希望に副へ得樣と信ずる。

元來財政は一國の經濟事情から編み出されねば爲らぬ筈なのに、今日迄の弊害として、財政が一國の經濟界を左右して居る。鍵は建つた土藏に應じて作られねばならぬのに、あべこべに鍵を拾つてそれに應ずべき土藏を作らうとして居る。是が抑も我國の諸經濟界、即ち產業も發達せず、國富も進まず、財政のみ膨脹し行く基を爲して居ると思ふ。英國の如きは中央銀行の重役はパーリアメント、メンバーとは爲れぬ事となつて居る。といふのは即ち一國の經濟の最大機關たるものは、飽く迄も政治より獨立せなくてならぬ、然らずんば一國の基礎を誤るといふ原則から出て居る事だ、然るに日本では是と全く反對で銀行總裁と爲れば直に上院議員に推選するといふ風である。日本銀行總裁には大藏大臣の指使に甘んずる者でなくては擧げぬ。

山本氏は曾て日銀總裁で居り、日露戰爭の前に突如として罷められた事がある。それは何故かといふに、時の藏相曾禰氏は日本銀行を以て大藏省の機關と爲やうとしたのに對し、山本氏は日本銀行は國家經濟の機關にして單に一政府の機關に非ずとの意見から藏相の自由にならなかつた。其爲に黜られたに外ならぬ。氏にして當時其主張を棄て、穩かにして松尾臣善の位地を守つて來るならば矢張り今頃は立派に男爵位に爲つて居たのであらう。が此處である。世人の考とは違うか知らぬが予の氏

に望む處は此處である。只財政をどう鹽梅するなどいふ區々たる事ではなく、もつと大所に根本的の處に手腕を用ひられむ事を望むのである。即ち從來は日本銀行は政府の機關とされて居るのを、氏によつて十分獨立せしめ眞乎一國經濟の最大機關たらしむると同時に、日本の財政を國家の經濟によつて立たしめ、財政によつて再び國家の經濟を紊亂せしめぬ樣にしたい。是さへ第一に成功するなら、財政の事などはデテールに爲る事故、漸次自然に緒に就く事と信ずる。即ち通貨膨脹の如きも、物價騰貴の如きも、大藏大臣が日本銀行をして多大の通貨を徒に海外に蓄積し、そして海外の正貨を日銀の帳面上に書き上げ、どん〱兌換券を出すが如きに因るので、昔日銀を財政機關として敢て國家經濟の機關たる所以を失はしめたに在るのだ。世人が山本氏に望を屬し双手を擧げて歡迎すべきは此處に在る。夫の數字を並べて豫算を編むと言ふが如き細事は實を言へば一局長に委して宜い。直して欲しい處は其根本である。が恐らくは世人の望は餘りに大であろう。山本氏には種々なる盤根錯節がある。小姑もあれば大姑もある。隱居もある。それ故迚も思ふ樣には行くまいが、茲に僕の一言すべきは若し果して自己の抱負を實行する事が出來ぬならば其場合決して大臣の椅子に戀々たる事なく、潔く去つて、更に其理由事實を天下に隱す所なく公表して貰ひたい、是が抑も氏の國家に盡して忠實なる所である。飽く迄出所進退を明白にするといふ事が僕の氏に對する最後の望である。

△矛盾せる注文を浴せかけらるゝ藏相

匿　名　氏

山本藏相は甚だ世間から歡迎せられて居る。それと共に注文もなか〱多い。處が其注文を見ると、記者論客といふやうな側から正々堂々たる議論も出て居る。同時に實業家からも注文が出て居る。さて記者論客の注文と實業家の注文と一致するや否や。記者論客は曰く在外正貨は通貨膨脹の原因になるから、それを無くして了へ。又曰く減税を行へ。それを行ふには減債基金を減らして減税の資に充てよ。又曰く、行政整理を行へ。議論は立派である。之が果して實業家の新藏相に望むのと一致するや否や。蓋し實業家の望むのも減税であらうが、要するに財界の激變を避けてさうして税も減らせといふのである。要するに實業家は最も財界の變動を嫌ふのである。處が今記者論客の說を容れて在外正貨を無くすれば通貨が收縮して物價が下落する。同時に商工業が非常の不景氣を蒙る。又減債基金を減らして、そして税を輕減する。其の輕減される額も大した事もなからう。然るに減債基金を減らした爲め公債は下落しなくてはならぬ。在外正貨を無くするのも公債下落の基となる。さうなれば銀行なども大いに困難しはしないか。即ち物價下落は不景氣の原因となり、公債下落も財界に一時打撃を與ふるを免れない。實業家がそ

れ迄の危險を侵してまでも財政が正當の途に歸へればよいといふであらうか。目下の狀態からいへばそれが頗る疑はしい。さうすれば記者論客側の希望と實業家側の希望とは違ふ事となる。山本氏は正々堂々たる記者論客の希望を容れて一時財界の不景氣を醸しても搆はずやるだらうか。さうすれば、今日氏を歡迎して居る實業家は失望する。さればといつて財界に變動が起らぬやうにすれば記者論客の望む事が出來ない。とすれば記者論客が失望する。此兩方面の注文が相矛盾して居るので、兩方の滿足を買はうとすれば兩方の不滿足を來たすことになる。山本氏はどうする積か。我々は世論に惑はず、只自分の信ずる所を斷行して貰ひたい。それにはなか〱の勇氣を要する。一時の人氣を博せんとすれば却て失敗するだらうと思ふ。

あの人は所謂才子ぢやない。又別に剛情な人でもない。兎に角落ちついて且つ圓滿な方で、輕卒な事はやらぬ。又一方に偏してやるといふ事もなく、先づ中庸を得たる人と思ふ。

△山本藏相の家

田川大吉郎

山本藏相の人物、閱歷、性行については世間之を熟知して居る人が頗る多い。私はそれに附け加ふべき何物をも承知してゐない。夫れ故にそれらの方面を措いて、少し異様のお答であるが、山本藏相の家について一言して見よう。

山本藏相の今の住居は麴町區上二番町にある。多分三十七番地と三十八番地とを併したものと思ふ。其三十七番地は私の同鄕の先進岩崎小次郎氏の有であつた。それを明治二十四五年頃、岩崎氏より山本氏に讓り渡された。其價は多分七千何百圓であつたと記憶する。其坪數は五百坪を超えて居た。此家に私は少からぬ緣故がある。明治十一年頃私は東京に住つてゐた。其時長崎へ歸るに方り父が吳々も私の將來を其岩崎氏に賴んだ。岩崎氏は私の頭を撫てて、「大きくなつたら必ず出て來い」と私に語り、父に向つては、「好し、此子の將來を引受た」と話して勵まして吳れた。其家は今の山本氏の家である。勿論其時の家は今日の家の儘でない。よくは知らぬけれども、岩崎氏は其當時の家を明治十六七年頃に今のなりに改造したものでせう。今のなりといつても山本氏が買ひ受けた以後更らに改造せられたのである。

私は明治二十年頃再び東京に出て其岩崎氏の家に世話になつた。當時山本氏は日本銀行に居られた。岩崎氏と山本氏は其以前から熟知の間と見えて、折々互に來往して居られた。其當時山本氏は麴町一番町五十二番地に住つて居られたと思ふ。其處に私は幾度か提灯を下げて岩崎氏にお伴して行つた事がある。其家には今渡邊融氏が住つて居られる。渡邊氏は山本氏と昵懇の間である。其渡邊氏と私も稍々親しい間である。從つて今も屢々其家に出入する。今日の渡邊氏の家も當時の山本氏の家とは違つて居る。けれども行 度に當時を憶ひ起すことが多い。又其渡邊

氏の口を通して山本氏の噂を聞くことが絶えない。旁々山本氏の住居に對して何かの因緣があるやうに思ふ。

岩崎氏が山本氏に其家を賣り渡された時分、私は非常に安過ぎたといふた事がある。岩崎氏も無論もつと高く賣りたい望であつた。然し岩崎氏は笑つて「これ位の地面が何だ。此地面を安く買つて天下の人物を買ひ得たのだからいゝてはないか」といつて居られた。其時已に山本氏の名聲は日本銀行を壓し、日本銀行は事實に於て山本氏の日本銀行の如く思はれてゐた時代てある。岩崎氏は斯くの如く山本氏を重じて居られた。

三十八番地は多方鹿兒島の人有島武氏の有てあつたと思ふ。私が岩崎氏の爲に世話になつて居つた時代には、有島氏が現に其處に住つて居られた。其有馬氏の家をも山本氏が買ひ受けられて、遂に二宅地を合併して今の一宅地とせられ、同時に其邸を擴張されたのだ。山本氏の今の邸の洋館の部分の方は主として有島氏の宅地に屬する。而して其日本風の邸宅の方も多少の手入をされたけれども、殆んど岩崎氏の當時の有樣其儘てある。私は多く今の山本氏を訪はない、けれども幾度か其玄關を入る毎に當時の有樣を憶ふ。そこは主人の出入、客の來往毎に私が頓ついて送迎をした所である。そこには私が拭掃除をした手澤が尙存して居る。其戶袋も私が幾度か開閉した。其便所も私が始終掃除をした。而かも其等を几帳面に勤めた事も初めの一年半年であつて、少し信用を得、東京の事情に慣れた以後は。私自ら紀律を崩して、自墮落に流れて、其等の事を他の下女や門番に打任せて、我知らず怠り怖けた事がある。私の生涯で自分の擔當する義務を怠つたのは確かに此時代てあつたと思ふ。夫れ故に其等の事蹟についても憶ひ出す事が多い。悔恨に堪へなく感ずること少くない。そこで、あの近邊を通り、あの門に出入する毎に、世話になつた恩を思ひ、其恩に報ゆる義務を怠つた罪蹟を思ひ、始終深い感想に陷る。山本氏とは深く知らないが、山本氏の家は私に箇樣な感じを與へる。

藏相としての山本氏を考ふるに、多分其性格通り、用心深く、謹直に勵精せらるゝてあらう。初めての不慣れの場合であるとはいひながら、此謹直の心を以て精勵事を見らるれば大過はなからうと信ずる。

現在の財政に對しては私は多くの人とは見る處を異にして居る。多くの人は財政力が枯渇して之を縮少するの外他策なしといふけれども私はさうも思うてゐない。一言を以て今日の財政を評すれば遣り繰りが下手だといひたい。まだ學校臭いお孃さんが俄かに新たに家を持つて其收入の活用に慣れない所から、甲には多くを與へ、乙には少く準備して其甲乙の間に於ける使用に平均を得ない。て或る所には非常の不足を感ずるが或所には贅澤過ぎて居る。世慣れた老婦人の目から見れば、如何にも繰り廻し方が下手だと評されねばならぬと同樣に、今日の財政の遣り繰りも甚だ下手であると思ふ。若し巧みに運用すれば、今日の財政丈けを以て今日以上の働きをなし得る餘地があると私は信じて居る。そこになると

山本氏は私などよりも遙かに黒人である。其遣り繰りには慣れて居る。銀行家出身の人として一錢も無駄に遣はない。決して一日も寢かして置かない。甲乙の間を巧みに流用して其收入の數字以上に働かする手腕工夫を持つて居らるゝに相違ない。故に其方面に其長所を發揮せられんことを待つて居る。此方面にさへ眼を附けて謹直に緻密に、巧みに利用せらるゝなら、藏相としての聲價を諸度上げらるゝに相違ないと信じて居る。更らに進んで今日の財政計畫に多大の變革を加へ、根本的に今日の財政整理の道を講ずることは恐らくは氏の任であるまい。私は其れを山本氏に望まない。それはどうしても後の賢者に待つより外はない。山本氏に對して望む所のものは、今日の財用を殖さず減らさず、其運用を巧みにして、一時の安を計り、他日の擴張縮少に對する基礎を固くすることである。但し此意味に於て山本氏が勤めらるれば、勤められる程政友會の所謂積極政策には背馳して來る。それ丈け政友會の内部から不滿の聲を起して來るかも知れない恐れがある。故に山本氏の位置は必ずしも政友會の味方でない。國民派の敵でもない。又所謂桂派の敵でもない。山本氏は不思議なる因緣に迎へられて不思議なる位置を取つて前路風とも雨とも分らない人だ。

私の見たる山本氏の性格からいへば、政友會の内閣に入らずして國民派の内閣に入つたならば（國民派が此數年の前後に内閣を組織する機會ありと假想して）最も適當であつたらう。謹直にして締りある考案計畫が、國民派が此際主張する消極政策の趣向に恰度契合してあつたであらう。

世間桂公と山本氏の關係について疑を抱くものがあるけれども、私はそれに同意し得ない。私は桂公と山本氏の間に深緣のあることを知つて居る。此關係は山本氏が政友會に入る入らないのやうな一時の出來事で以て斷絕すべきものでない。山本氏の心事を解剖すれば西園寺派と斷つの日があつても、桂派と斷つてはならぬと思うて居るだらう。だから世評は兎もあれ、又表面は兎もあれ、山本氏の新たに藏相になるについては桂には異議はない。寧ろ中心に於ては山本氏を通して桂公の經綸（若しありとすれば）を注入し得ると信じて居るであらう。山本氏の藏相としての第一の難局は寧ろ此等の錯綜したる關係にある。桂公と善く。其思想に於て消極的な國民派に傾いて、其位置は積極的思潮の政友會内閣に迎へられて、三叉に立つて居る。此錯綜した關係の間に如何に善處するかが問題である。私は山本氏に向て、只謹直忠實を望むの外はない。

和歌

尾上柴舟選

細井魚袋

○

うらがなし新手枕の夢さめて父母にかくれていさかひをする

父母の定めの妻と相添うてゆかむかわれも氣に入りてきぬ

さとに行きし妻よ早くかへりこよ今宵わりなく汝の戀しき

我が涙にごりて悲し妻見ねばいやさらにごる心地さへする

いらいらと汝の戀しくなりてきぬ妻よ手うえのコスモスが咲く

夜おそくかへりひそかに蚊帳に入り妻の寢顔を見るは物うし（以上おもひてのまゝ）

ありありと曇りし我れの心をばうつすが悲し水にむかへば（以下旅にて）

草の葉の青く光れるひるすぎをきたなき町の櫻井をすぐ

水の上に葭の穗並の影おとす夕暮ときを洲にあそぶ蟹

旅人の心ほのかに痛みきぬ日に日に草の實はうれてきぬ

青空のもとを額(ぬか)たれ野をゆけばおもふことまた涙となりぬ

押垣青花

○

指に泌みしかすけき草の香をかぎて死を思ひみるゆふぐれの風

四月ゆふべ花なき樹に倚りひとときくる町のどよみに流せる涙

白き花むらがり咲けりおとろへし夏のこゝろのさびしき事かな

このごろの不滿抑へてゐるくれのかたへにひかる小田卷の花

夏くれば夏のこゝろをさびしがる身のおとろへのかなしかりけり

午後につゞくうすきくもりよ夏草の花あり白く光る悲しみ

思ひいてゝ涙落つべく哀しかり夏もやうやくふけし夕ぐれ

○　　　安井竹美

つとすねてりんどうをつむ汝が指の白きにいたむ男心よ

すべもなき人戀ひしさをなげくひるきつねぼたんの黄のわりなさや

砂の中にてりつけられしなてしこの泳ぎつかれし眸にしむまひる

うす闇ゆ二寸ばかりのくらさをば白くぼかせる夕顏の花

こゝろもち水の面のくらさをばうごかしてちる萍の花

たよりなくものを思へば涙ぐむ癖などつきて夏もふけきぬ

夏ふけて逢はれざる日のうちつゞくかなしきひるの白芥子の花

○　　　逸見雨山

悶えより離れてつひの解決の死をおもふ時心しづけき

いとゞしく死といふ事を嚴かに考へて見る此の日頃かな

君つひに友となりけり相知りし其日戀ふべきさだめなりけむ

悲みをしひて味はふわが癖のいつしか君に染みしあはれさ

よるべなき思いつしか君といふ小さき一つにあつまりしかな

○　　　千住湘江

ほろ／＼と笛の音まろび靜なる夜の空氣を漂はせゆく

はら／＼と眞白き頰にかゝりたる泪のあとの冷たさをめづ

怖るるは世の口ならずたゞ君が心の前に佇める時

かにかくにものうきものと知りながら忘れむほどになれぬあはれさ

はつ秋のたそがれ色に包まれてわが歌をよむわれのよろしき

○　　　西村孤舟

雨細しひと葉動かぬ梧桐のなかに小鳥はちゝとすくみぬ

風も雨も波もたけりぬうそぶきぬ香良洲の浦の松ぬかむとて

白雨のやがて來たらむ故さとの一葉うごかぬ午後のさびしさ

旅の子もたま／＼家にかへり來ぬかひならされし鳥のごとくに

ひたすらに弱きが故と何事もたゞおほらかに見たまへるみ母

旅の子が安しといふも故里を少し思はぬそれだけのこと

○　井田葉歌

俯向きてかたらてあるくはらからの二人がうへを夜鳥のなく

草の實のはじけてはとぶ眞菰野に泪をさそふ風のぬくもり

うしろ指しげなる中に目つぶりて生くとしもなく生をつゞくる

秋立てどかなしやぬくき風めぐる夕の部屋にうたゝ寢をする

何がなし人戀しさにたゆき軀を夕暮の野の明るきに置く

○　林白愁歌

嫁ぎ行く從妹の家の夜の花がふるへて白く咲く頃ならん

愁ひつゝ歩めばかるく袖を吹く八月靑き山峽の風

艶きし聲音(こはね)とセルの單衣とが淋しき心そゝる黃昏

石投げて遊べば海は早暮れぬ家に歸りて泣けよと暮れぬ

○　塚田眞

たゞ白き月夜の原のなかに見ゆ悲しく赤きまちのともしび

あはれみつあはれみつしてこの命いたはりて來ぬ死なむといふを

われとわがいだくひとつの命をば切にこゝろののろふ悲しや

小鳥らよそのあはれなる命もてこの夏の日をいかに生くるや

○　外山廉三

卓上の姫ひまはりがはかなげにほと吐息するものうき夕べ

うすにがきビールの味がにじみ入る飽滿の胃の心地よきかな

椎の花あくどく匂ふ夕くれはいら〱しさをやるすべのなき

ひし〱と身にせまり來る孤獨をばめでゝ灯もともさでありぬ

○　今井哀歌

松林出づれば蜩なきどよむさびしく我も歌唄ひいづ

蘆ふかく茂れる中に身をうづめ靜かにものを思ふひとゝき

白雲のうごかぬ空を夏草のしげみに坐して見入る安けさ

夜となれば玉蜀黍の葉摺れにも都の空のなつかしまれつ

○　宮内柳葉

初秋の冷たき夜氣に觸れてまた新しき悲しみをえつ

ちりために投げすてられし髮の毛の一つかねより秋は擴がる

茫々と延びたる髮を思ふさまつかみて引けばすこしなぐさむ

○　茂木悟郎

さんざめく祭の花車の人ごみにまぎれて吾れを忘れんとする

かんてらの一つ二つが消え殘るさかり場あとに夏の虫なく

みづからをあまり貴く見たるため我れもより得ず人もより來ず

○　木暮刀水

踏石に七八ッばかり朝がほの鉢ならびたる朝月夜かな

獅子づかひ汝はよく知らむ近づきて怖れおぼゆる事の樂み

しら濱の潮も黒むたそがれの船にもたれて我が泣きしかな

○　鈴木風影

荒れ果てし心やうやく冷やかに整ひ來り秋風の吹く

何時か我れ畑の眞中に來てありぬ目前には芥子のいたくかをれり

すや〱と稚兒の眠れるほろ蚊帳に月夜の風のき

てはたはるゝ

花見れば黒きを摸み月みれば闇きを欲りす我れの哀れさ

○　武田秋華

月の光冷え〳〵迫る海にきて亡びしものに涙さらなる

うつむきて歩む姿が畔に立たばよろよろ生くる身が畔に立たば

○　村上義信

雨ぞふる若き心のほこらひの消え行くと思ふうとましき音

ぢり〳〵と鴉片を吸へば官能のすゑゆくと思ふ心寂しさ

○　望月快哉

秋晴れし靜かの街に輕らかに女の下駄の鳴る音を聞く

こゝろもち旅につかれてコスモスの花白く咲く家に歸りぬ

○　福山杜鵑花

よろこびのすこしうすれし八月のリヲ咲く窓の月明りかな

放蕩のはてのわれとは見えざらむつゝましやかに歌を詠むゆゑ

○　井筒千律

秋立ちてつく〳〵法師なく日とはなりぬいさゝか思はれて來ぬ

こゝろよく晴れたる朝の大木の楠の露よりわが秋は來ぬ

○　齋藤花舟

ふと目覺め起くれば胸に流れ入る若葉の色の青くあかるし

茫然と佇みあれば窓外をしづかに流る甘きあさ風

○　高瀬朝雄

獨身とかためし心解け初めて此の頃何か淋しくなりぬ

疲れたる我が身を運ぶ一臺の電車嬉しき夕ま暮かな

○　池山青穂

さびしさはかなしき君を思ふときおもだかの花の水にちるとき

眼をあけて靜かに海の遠鳴りをきく夜さびしき

わがねざめかな

○　荒木白花

友らみな旅に出てたる夏にえし戀なるが故淋しかるらむ

いとやすき戀にてありし涙なく街ゆく人のごとく別るゝ

○　大岡緑雨

干瓢の花ほの白く咲く畑におけらのたぐひなけるさびしさ

そよかぜにたんぽぽの穗が白くとぶ午後(ひるすぎ)の野の疲れし日ざし

○　松沼狂花

蔓草の花は開きぬ若き日を父にあづくるうら悲しさよ

りんどうの花のさみしく匂ふらむ母校の庭を見に歸りたや

○　堀十二絃

思ふとなくかなしきことをつぎつぎにならべてひとりさしぐむ男

並びゆく友の浴衣にふりそゝぐ葉月始めの青き月かげ

○　荒木英一

山ぎはの卵黄色にぼかさるゝたそがれの空に物思ひあり

おもひ惓み疲れし晩夏の日の白くかゞやく空見てありぬ

○　岩林秋光

我が胸の奥に秘めたるあるものを知れりとやうに鳥のなく

柿の花ほろり〳〵と散りまろぶ君を思へばうれしき夕

○　山本玉洸

大濱のいやに廣きをよそにしてよきほどに延ぶ晝顔の蔓

なつかしみはてはにくしみはた嫉むとりとめもなきわが心かな

○　雲の城

朝の海うすらつめたき砂の丘に沖見てあれば人の戀しき

○　山本春久

八月の蒼海に似る空みれば潮の香のみひたに戀しき

應募和歌は
東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

露

高田蝶衣選

水越さぬ日の露けさや巖草　余子
かす禰宜は露寒がるや歌もなう　同
朝露や蛇うち落す舟の苫　同
歸り來て露けさ解きぬ腰刀　同
露けしや鴛出し時の落し櫛　同
露の原官許得て互市に地を劃す　波月
雅談の灯溪聲に露時雨して　同
露の秋俗緣の喪に下山して　同
詣で來し麓二塔の露曇　同
露の秋怨府となりし島司去る　同
時知らず咲く花も露の秋めきて　花馭史
疊み帆の夜露濕りや凪を漕ぐ　同
朝露や戸走りに日和占ひも　同
立ち枯れの木に茸の香も露夜毎　同

落陽に汐凪いて露の挽場匂ふ　三石
產馬訪ひて籬に置く灯や露深し　同
露の笹に風呂火映ゆ頃蟲なだれ啼く　同
樹捲き菰に生ふ茸や朝露匂ふ　同
露踏みぬ囮の約を疾く起きて　白青
夜々を露褪せず、笈摺の藍　同
露灑す物種も庭石の上　同
露濡れし衣も供鐘の下に寢て　同
暁の地鳴り露野を走りけり　摘星辰
白露庵裡史論じ更くる夜毎なり　同
霧脚觸るれば大台ヶ原露となり　同
露は秋は聖者の愁深うして　同
朝月に大露や一雨過ぎしとも　狠子
租にかふる蛇獲て飼へり露の宿　同
漁期ならぬ大漁の魚籃や今朝の露　同
甘味增す木の實や露の大降りに　松葉
歸錫迎へに曳く馬も露の大樹晴　同
留錫に佛像も置けり露の宿　同
朝露や山房に焚く藥風呂　翠郭
望嶽に閭景露けし煙立つ　同
露ほがら晩涼に愁斷絕ゆ思　同

曉發を送り來し情や露に濡れつ　但　翠
朝露や馬見て馬の飛嘉り　同
賣れなぐれの花も夜露によみがへり　同
開龕の人出なり露の原に避く　百　幽
土豪死解の跡ありくと露しとゞ　同
先達の影追ふも露の草高し　同
官客を憚るに露を納屋に臥す　杜鵑花
魂喚びに與らず靜坐露降る夜　同
露降るや徐ろに言質を待つに　同
蓼藿も滋味と茅茨の露をめづ　木　犀
潤葉に聞く針葉を落つる露　同
終發に消す驛の灯や露踏んて　同
露の葉越しに主命首肯きつ井を汲ぬり　都　月
星座觀測の籠り居を露に訪はれけり　同
井に吊りしもの落ちし音や爐邊の露　同
奇な木葉拾ひ來て干す露の凪　朱　星
白露や爐を焚けば竹林の風　同
廢鐘の詩銘を珍ら露に讀む　同
飲めぬ酒にもやる旅愁あり露の暮　愛　香
露の秋一門の歌集稿成りぬ　同
野に住めば微恙もあらて露の秋　同

露時雨塔近かの陸橋に來て　萬雨樓
露氣含む風淋し類燒を報ずる日　同
篠立つも魚榾のしるべ草の露　茄豆路
貰上手の乞食憎まる露の秋　同
露明けて空黄なり雑子名殘る原　滿天星
安居其後芙蓉寺露明き訪ふ　同
草染の布干すや露晴れの宿　志　山
高牧の草照る星や露明り　同
街の木に全き露や曉の寂び　紫　浪
(酒肆)走り出の土手の草凪露深し　同
砂丘かくれ瓜畑なりし露の小屋　雪　骨
法の爲めの露の御身と御記讀まる　同
露の間を一番打ちぬ靈山寺　閉寺爐
灯して臼場あぐりや夜の露　同
歸依にあらて剃り住めり今朝露の宿　炙　花
癒えし心鶴見んと園を露朗ら　同
無提灯をわびつ入る露も深き家　美　田
鬪態の朝をうなるや露疲れ　同
露の草撓む見ゆ稿も意の如し　國　郎
難局を避籠る小灯に露深き家　同
露降るや夜干白木綿軒並に　蒼　蛇

夜踊りに連れを得し安堵露降れり　同
夜祭の旗のにじみや露しとゞ　秋紅
寂しさを好む主や露の宿　同
道心の懈怠滴露を驚けり　行々子
樹下碑あり訪ひ寄るに露のしとゞ降る　同
御微行を拜みしといふ露の草刈女　柳子
出船時の竹法螺や嶋の露ほがら　同
森の露を思ふ殘月の軒仰ぐ　風水火
露に明けし垣に蜘蛛とる何の餌か　吼天生
露寒う移り來て村情も聞く　里雪
それ矢探る尻からげ僕や草の露　六絲
放浪の非に師恩知る草の露　丁字
一念に剖む師の像露の宿　神風
露置けば穗さびに光る芒かな　鼻臀
露の秋上府の夫に思馳す　紫明
明日を別の里泊り露踏むも快　孤風子
野の宮の扉ゆるみや露腐れ　愚案
耕地整理に耳學問や露朗ら　吐櫻樓

課題　黍　十月十日〆切
　　　除夜　十一月十日〆切
規定　▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛　▽一人三十句以下▽用紙は半紙

評論

首相暗殺の露國

一

九月十四日、露國首相ペテル、アルカッエビチ、ストリヰピン伯、キイフ市の劇場に於て刺客に狙擊せられ、十九日午後十時十二分遂に長逝す。之を耳にするもの悵然痛悼の想をなさゞるは無し。

刺客の名をボグロフと呼ぶ。猶太人にして虛無黨員也。就縛の際語つて曰く、予は元と寧ろ皇帝殺害を欲せりき、唯だ迫害が同胞たる在露猶太民族に及ばんことを恐れて、其志を變ぜるのみと、彼にして志を變ぜざりしならんには、露帝の玉の緒を絶ちたら

む。蓋し露帝は亞歴山二世紀念碑除幕式擧行の爲め、キエフ市に行幸あり、ス伯遭難の當日、伯及大藏大臣ココフツォフ氏等と共に同じく劇場に在りたるを以て也。

知らず刺客ボグロフは何が故に此擧に出でたる乎。先づ彼が猶太人なる一事は、多少の消息を漏らさずとせず。試みに見よ、從來猶太人を虐遇したる露國政府は、最近續々猶太人排斥を斷行するにあらずや。就中今回の兇變を生じたるキエフ市の如きは、其迫害の中心地にして、昨月四、五月猶太人一千名市外放逐の命令を發したる所にあらずや。已に斯くの如し。ボグロフの起ちたる、亦た全く無因縁と言ふ可からず。

然かも重因は寧ろ彼が虛無黨たるに在らん。而して其虛無黨員たる以上、彼は唯同黨員會議の決議を實行せしものならんも亦知る可からず。蓋し虛無黨たる、最初一片理想家の團結に過ぎざりしも、漸次危險なる實際主義に變じ、一八六六年カラコゾフの皇帝弑害失敗以來、露國々家の蠧蝕たりき。ハルコフ知事クラポトキン、政治警務長官メセンツォフ將軍、ツレポフ將軍等の殺害を手始めとして、一八八一年亞歴山二世の弑害を見るに至り、爾後暗殺計畫頻々たりき。ストリヰピン伯の如き、早く已に虛無黨の目指す所となり、一九〇六年其別莊に於て爆裂彈事件發生し、伯自身幸ひに難を免れたるも、其二子及來客を負傷せしめたるは、世人の猶記憶する所ならん。

然り、彼や猶太人たるに加ふるに虛無黨員たり。誰か今回の擧を怪むものぞや。況んやス伯五年三月の政治は高壓的傾向多く、從つて民人の怨嗟を免れざりしに於てをや。

二

ストリヰピン伯とは如何なる人ぞ。

伯は一八六三年陸軍々人の家に生る、資性剛毅沈勇、果斷を以て名あり、聖彼得堡大學を出で、二十一歳の時、內務省に入り、次で農商務省に移る、一九〇二年グロドノォ縣の縣知事となり、翌年サラトフ縣知事に轉ず。在職中隣縣に暴動あるや、中央政府の命を待たずして之を鎭壓し、內相ツルノウォ氏に知られて內務次官となる。次て內相に進み、一九〇六年七月ゴレミイキン內閣沒落の際、自ら起つて內閣を組織す。是則ち伯の略歷也。

次ぎに伯の政治は如何。其遣り口は如何。吾人は其執政期を觀察して、下記の三點を認識せざるを得ず、

曰く伯は急進、保守兩派の間に起ちて、露國の今日に適合する温和的進歩政策を執りたると其一、其政策は進歩主義なりしも、其遣り口は露國流の專制手段多かりしと其二、五年餘の執政期を前後に分ちて比較すれば、最後に近くに從ひ、專制的態度益〻甚しく、其政治も漸進步主義に傾くよりも寧ろより多く保守主義に傾き來れる感あると其三。

伯はヅルノウォ、ッレボプ、ゴレミイキン等の頑固黨に反對して漸進主義を主張したりき。或程度迄憲政の味方、改革の味方なりき。第一國民議會が政府に反抗するや、頑固黨、宮廷派は憲法中止を叫びたりしが、斷乎之を排し、議會解散に止めしめたるは伯なりき。又一千一百萬の古代宗教信徒に信教自由と政治的權利とを附與したるは伯なりき。中部及南部露西亞に於て農地改革を斷行し、土地私有の制を確立し、中流小農の增加を謀りたるは伯なりき。久しく中止せられたる地方裁判所を復興し、司法の獨立を期したるも伯なりき。若しそれ伯が一九一〇年海軍參謀部問題を皇帝の大權に屬すと主張せる頑固派の主張を排し、斷乎之を議會の討議に附したるに至ては、是豈宛然自由主義者の行動にあらずや。斯くの如きもの、何ぞ普通の頑固政治家を以て目す可けん哉。

然らば則ち伯は何故に衆怨を買ひたりし乎、專制政治家の謗を買ひたりし乎。是一は伯が露國々家の統一を期するが爲め、芬蘭の自治權を制限し、新に波蘭を分割し、露人以外の民族を露人間に併合せんと企てたるに依るも、亦一は伯の果斷なる資質と强固なる意志とが、往々之をして獨斷的行動を執り、他人を無視するに至らしめしに基因せずんばあらず。加ふるに伯や最近宮廷派と相近接するに及んで、幾分（吾人は唯幾分と言ふ）保守的思想を增加し來れりき。其穩和主義者たる十月黨に慊らずして、自ら之より保守趣味多き國民黨を組織せしめ、御用黨の中心となしたるが如き、本年三月波蘭縣會案が上院に於て否決せらるゝや、停會の命を議會に下し、「停會若くは休會中には議會の承諾を待たず法令を發布し得可し」てふ憲法の規定を惡用し、縣會法を實施し以て是迄漸次擴張し來りつゝありたる議會の權限を俄かに狹小に解釋し始めたるが如き、誰か其明證となさゞるものぞや。

要するに伯の兇手に殪れたる所以は、其政策と言はんよりは、其遣り口にありき。其政策の内容よりは、之を實行するの形式に在りき。然かも最近漸次に頑固

主義者に近くの態度ありしも、亦全く拒む可きにあらざる也。

三

ス伯已に逝きぬ。知らず今後に於ける露國の內治外交は如何。

是洵に至難の問題也。況んやココフッォフ氏臨時首相に任命せられたりと雖も、眞成の後繼者に至ては未定の裡に在る今日に於てをや。

然かも吾人の豫想を吐露せしめば、ヅルノヴォ、ウヰッテ、ッレボフ、等の頑固派、守舊黨は、今後一層露國の政界に跳梁す可きを疑はず。蓋し彼等は宮廷に勢力を有す、是其彼等に利なるの一也。一九〇三、四年日露戰爭の結果、政府の威信落ち、同時に民主運動の氣運を激成したりしも、今や其反動として保守論漸く盛んなり、是其利なるの二也。露國々民議會の行動は民間の信用を博するの力無かりき。是其利なるの三也。是時に當つて激粋の進步派にはあらざれども、比較的に漸進主義、立憲政治に同情あり、常に純頑固派と抗爭したるス伯逝く。彼等が機に乘じて跳梁する、何ぞ自然の勢にあらざらん哉。

而して其結果は如何。國內の產業或は發達せん。國力或は伸びん、獨り議會政治と人民の自由とは必らずや發展伸張を見ること難かる可き也。

次ぎに外交は如何。由來ス伯は內治を得意として餘り多く外交に與らず。英佛露アンタント、日露協商、是皆な前外相イスウォルスキー氏の畫策たり、獨露協約は現外相サソノフ氏の事業たり。從つて伯無きも、露國の外交は何等の損失あらざる可し。然りと雖も上記頑固派、宮廷派は、ウヰッテ氏を除けば、曾つて露國を東亞に盲進せしめたる膨脹論者也、猪武者也。況んや一九〇三、四年戰役の瘡痍に惱み、爲めに雌服しつゝありたる露國も、今や漸く財力回復し、復活の機に接せる折柄なるに於てをや。勿論議會政治已に成り、政治上の秩序立ちたる今日、昔日の如き盲動を見ずとするも、誰か新に勢力を得たる頑固派が外政方面にも活動す可きを疑はん哉。

若しそれ其結果、日露關係に如何なる影響ある可きか、是吾人が豫想するを敢てせず、又爾かするを欲せざる所也。遮莫、露國の對外活動が面目を一新す可きものある以上我日本も世界と共に、ス伯薨去後の露國に對して、宜しく愼重なる注意を拂ふ可し。是眞に思を亞細亞の平和に致すもの丶行動たる可き也。

波斯廢帝軍大敗

波斯廢帝ムハメット、アリーの軍敗れ、復位計畫蹉跌す。九月中旬廢帝身を以て露領に逃る。攝政ナスル、エル、ムルク以下憲政派の夢、恐らくは之より安かる可し。

然りと雖も波斯の前途は依然多難なるを免れず。何ぞや、テヘラン政府の威力は南方に及はず、而して南方の紛擾はやがて英國の干渉を誘致する所以なれば也。况んや北方の露――(陰然廢帝の味方たりし)――も、虎視耽々の態に在るに於てをや

四川の暴動

四川成都の民、鐵道國有及外國借欵に反對して亂を成す。非理之より大なるは無し。

何ぞや四川鐵道布設進行せざりしは、抑も誰の罪ぞ是、口徒らに愛國を稱道しながら、鐵道資金を出し吝みしたる四川資本家の責任にあらざる乎、借欵を促し、鐵道國有を促せるは、其實、四川人民なり、彼等今にして豈之を咎むるの權利あらんや。然かも斯くの如き惡例、亦何ぞ獨り四川人民のみに存すと曰はん。

葡萄牙政府承認

葡萄牙政府は漸くにして列强の承認を得たり。即ち昨年十月共和政治確立後、直ちに之を承認したりしは、伯剌西(ブラジル)國のみなりしが、本年五月末總選擧の結果、新議會が一名を除くの外、悉く共和黨議員に成り、六月十日議會開會し、共和政確立、王家放逐の布告をなすや、米國之を承認し、八月二十三日大統領選定成るや、佛國は翌日之を承認したり。而して英獨墺伊以下歐洲諸國は九月十三日我日本と共に、公式に葡國新政府承認の通知を發せりき。

吾人は之を慶賀せざらんと欲するも能はず。他なし是同國共和黨が過去一年の措置宜しきを得て、民心を離反せしめざりし證據なれば也。然かも翻つて想へは同國の難事業は寧ろ今後に在らん。何ぞや同國々債は昨年末の調査に依れば十二億四千萬圓に達す。之を五百餘萬の人口に分擔せしめば、一人二百圓を超ゆ、是速かに整理せざる可からざる所なれども、同國の財政

を見れば歳出常に歳入に超過す、從つて本問題の解決容易にあらざる可し。次に政教改革は同國の急務也、是迄羅馬敎會が行へる教育が葡國人民を愚盲にし、近世の文物に縁遠からしめしは、何人も知悉せる所也。又同國は農業を以て國を建て、國民の生活一に之に依賴せるに係らず、目下耕作面積は實に國土の六割に滿たず、約四割は荒蕪の地たりと言ふにあらずや。數へ來れば葡國共和黨の事業は、決して容易にあらざる可き也

米國の東鄕熱

米國の東鄕大將歡迎は空前なりき。蓋し迎へらるゝの人亦空前の海將たりしに依る乎。就中眞情流露、轉た吾人の胸懷を搖かし來るものはオグデンの一農民が、大將に「トーゴー」なる駿馬を贈れるの一事とす。官憲の歡待、時に或は儀禮に出づるとあらん。然かも眇たる村民の赤誠より出づる崇敬の聲に至ては決して然りと言ふを得ず。

而して此聲はやがて日米兩國民が相互尊信の念深きを示す所以也。同時に又多少日米衝突の機會を緩和する功ある可きを疑はず。



金棒秘記

饒舌子

◉「凡ての戰爭は彼我兵力の誤算から起る。必勝は期せないまでも必敗が分つて戰爭する國はない。」と太田大佐の言。

◉「米國の水兵は日本と違つて、志願兵組織であるが、其志願兵がなか〳〵集つて來ない。電信柱などに貼紙廣告をして、水兵になれば世界を漫遊して見物が出來るから志望のものはどし〳〵願ひ出ろといふやうな事を書いてある。こんな風にして集め得た水兵の働き振りも大抵想像せられやう」と某海軍將校の談。

◉「西園寺とか桂とか或は松田などは弘化か嘉永生れであるが、原とか後藤とか大浦とか平田とかいふ現代の働きものや現內閣の山本、石本、齋藤、長谷場、牧野は皆安政か文久生れだ。明治も四十四年になつたが、仕事をしてゐる人物の上からいへば正さに安政文久時代だ」と××博士がいつてゐた。

◎「早く治外法權を撤して、眞正に文明國の仲間入りをせなければならぬ。それには帳面面丈けでも文明國の要素を揃へて置かればならぬといふので、當時の政府では三權分立を行つて、司法權の獨立を宣告した。が實は日本の人民がまだ其處まで進んで居らぬので、法文などもどうでも適用の出來るやうに抜道を作つて置いた。そして政治上都合のわるい事があれば國事犯とか何とかいふ名をつけて縛られるやうにしてあつたから、何か重大な事件があれば箇樣に裁判いたして差支あるまじく候やと政府に伺ひに出たものだ。すると政府からは差支無之候と符箋が下つて來るといふ風であつた。當時の裁判官は法文に照してといふ事の代りに事實に照してといふてそれが一の流行語となつて居つたが、それは當時に於ては止むを得ざる事情もあつた。が今日に至つても何其弊風が取れぬのは遺憾だ」と某博士がいつて居る相だ。

◎澁澤男爵は本誌前號の「大久保利通論」を讀んで、「なか／＼よく調べて面白く出來てゐる。然し薩長が慶喜公を捨てるようになつたのは、公の無能の爲めだと見るのはどうか。諸國の志士は幕府の老中などを當面の敵として居つたので慶喜公は寧ろ彼等が之を擔いで豪族政治を行はうと思つてゐたのだ。其自分等が擔がうと思つた慶喜公が、とう／＼自分等の敵とする老中に擔がれるやうになつたから、遂に幕府を打倒さうとしたので、ナニモ初めから討幕を思ひ立つたのではない。私共も公の將軍に立たれる事の不利な事を間接に申し上げたのであつたが、公がつひに情に絆されて、老中共に擔がれたのは、或は不明といへば不明かも知れぬが、薩長の人が、慶喜公を無能と見て捨てたのぢやあるまいと思ふ」と評して居られたさうだ。

◎又同男爵の話に「慶喜公は水戸から出られた丈けに流石に水戸學の感化を受けて居られた。當時の幕軍がもつとやればやれぬ事はない。或は官軍を破る位の事も出來た。然し慶喜公は地下で祖先に見へたら、德川の祖先は何といふか知らぬが此慶喜はどんな事があつても尊氏になる事は嫌だと固く言ひ張られた」

◎「十二支で人の合性を定めるといふことは昔からあつた事だが、一寸聞くと俗説迷信のやうにも思はれるが、必ずしも根據のない事ではないやうだ。何故といふと太陽面の黑點を研究すると、其黑點は每年變化して十一年十一ケ月と何日かを周期として又元に還る。そして其黑點といふのは太陽のエナージーを表示するものであるが、我々の性格や何かゞ外界の影響、殊に太陽の影響を受くることは顯著である。すれば此黑點の影響も受けぬ筈はない。して此黑點が所謂十二支と附合するものだとすれば、子歳の人はどうとか午歳の人はかうとかいふのも俗説ぢやない」と一戸博士が話したさうだ。

◎「飛んで火に入る夏の虫などゝいうて、羽虫はよく燈火に向つて飛び込んで、つひに燒け死んで了ふが、あれは燈火を太陽と間違ひて飛び込んで來るのである。一體羽虫の類は朝、太陽に向つて羽搏きするのであるが、これが非常に虫の生長を助くるものらしい」と丘博士が話された事があつたが、黑住教で朝早く東天に向つて「タウカミイミタメ」と繰り返して深呼吸をなすのと思ひ合はせれば二者の間に關聯があるらしい。

新刊批評

▲二宮尊徳の新研究

田中宮一著
廣文堂書店發行

著者は世間からはプラグマテイストと言はれて居る、が著者自身は、それで我慢の出來ぬこともなからうけれど、尙ほ多少の遺憾を感ずるとして別にファンクショナリストと言はんと欲して居る。プラグマテイズムは譯して實用主義といふべきてあらうが、これては横の空間的の意味は現はれるとしても、尙縱の時間的の意味迄が徹底的に現はれぬ心地がするといふのであらう。ファンクショナリズムは直譯すれば函數主義、氏は之を譯して作用主義といつて居られる、成る程斯う言つた方が一層ダイナミツクの意義となる。今此著に於て、著者が二宮尊徳に與へた批評も、全く此感じに外ならぬ。著者の意を尊徳の研究に傾け筆を尊徳の批評に着けたのは、尊徳が在來の傳習を脫して個人に絕對の權威を認め、人の口や紙の上の敎權を蔑して直に天地の經文に正面した處、其處にプラグマテイストの思想の曙光を認め得た興味の爲てあらうが、併しファンクショナリズムと看板の文字の書換をした著者には、尙ほ一關打破し得て一關を存するの憾の殘る處がある、是が即ち此一篇の大議論を構成した精神と睨む。此書には在來坊間の諸書を一掃して淸颺に捲かるゝ枯葉の觀あらしむる程に新味がある、そして其新味は即ち此何人も前に試みなかつた此着眼點に存する。即ち氏が此篇の終に於て、「唯私が此論文に於て尊徳の主張として披露した所のものが、從來世間に流傳されて居るものよりも、其範圍に於て廣汎となり、其精神に於て高遠となり、彼の長所は社會改良學者としての實行に在るよりも寧ろ哲學者としての理論に在ると見える樣になつたのは固より私の努力の結果であつて、私が二宮尊徳の研究に興味を感じたのも全く此點にあり、而して尊徳に關する著書の世に行はるゝもの既に多いに拘らず、私が此論文を公にするに至つた動機も全く此點にあるのである」といふは明に之を自白し居るもの、そして更に「併し他人は彼の事業の外殼と結果とを重視し、自分はそれの根抵と志向とを力說する爲にかゝる相違を來したのであつて」云々といふは能く自己を欺かざるものてある。前内閣の施政方針からして尊徳宗は一層世間に强ひられたが、有識者は往々にしてそれが民衆を消極的勤儉主義の弊に陷る者として憂ひた、それは著者の所謂「彼の事業の外殼と結果」とを徒らに傳へた點に在るので、之を現代に施して有用ならしめんには、即ち此著の如き「其根抵と志向とを力說した」者に待たなければならぬ。此に於て消極的な靜的の尊徳敎に積極的な動的な意味が附け加へ理解されて、之を廿世紀の現代にも施して誤らざるものとなると思ふ。即ち尊徳夜話と此著とを併せて是非讀むべきものと思ふ。著者は尊徳を以て社會改良者ではなく寧ろ哲學者だといふ樣に見て居るが、此點に於て私は左樣は思はぬ、尊徳は矢張り實行家てある、哲學者たるには自己の精神内容に統一を與へ系統化して之を以て言說にも現はすべく勉めねばなるまいが、著者の指摘し居る如く明に幾多不徹底な敍述を敢てして居る。要するに尊徳は一直觀的悟道者に過ぎまい、之を哲人と見るのは只我に心あり他人之を忖度する流で、著者自身が哲學者で其眼に寫して見るからに過ぎぬ。此處が一の留意點でなかろうか。尊徳は飽く迄横に自己立脚の空間に即して生きて居り、其當時の世用を爲すだけの隨機說法、隨緣說法を爲したに過ぎぬ、從つて嚴正なる論理的辯證の陷むことを望んで豫防的に系統化し統一を與へる工夫を凝しては居まい、彼は哲人に向つて說いては居ず、從つて論理と日つても極めて他

度のものを持つて居る人間にのみ向つて說いて居る。と私は思つて居る從つて尊德の天理と人道との別や、推讓や、貯蓄や、無利息貸附法や、農業本位說やも、之を時間的に千古に亘りて値ある黃金律とは見る可からぬも、而かも其當時に於ては或は然か語るの程度が卑近にして時人に切なるもの、或は其時を救ふに是以上の策あらざる者となるべしと思はれる。例へば農本主義の如き、開國の今日、世界が市場なるの今日に於ては有無相通の範圍の極めて擴大され居ればこそ、工商も亦農と本位を爭ふべき者があるのだけれど、猫額大の小天地に縮つた當時の狀態からすれば、生活保障の最大要件たる農産物の生産が本位に推されるは寧ろ當然である、其他の慾望の滿足は何といつても二位的三位的若くは四位的のものでなければならぬ、朝に道を聞けば夕に死すとも可なりの精神主義ならばしもあれ。諸慾望を否定せざる物質主義の見地よりは無論當時に於て之を是認せなければなるまい。尊德にして精神界の光明たらんと欲するの徒であつたならば、其樣な一時的立言の外に更に千古に貫く不磨の哲人的立言をしたであらう。が彼の勉めた處は其處でない。是が著者の希望と枘鑿相容れぬ處だが、併し是は著者の注文が無理と思ふファンクショナリストなら飽く迄歷史的眼光で其時代を考へる要があるが、氏がそれを現代的眼光で見て居るのは遺憾だ。此點に於て失禮ながら尊德を評するとしては當らぬ節の殘ると思ふ。がそれはそれとして置いて氏の此著に於て尊德を假りて述べて居る自家の哲學のインタープリテーションは、飽く迄尊德敎と共に傳へなくてはならぬと思ふ、否之を離して獨り尊德敎をのみ世に傳へてはならぬと思ふ。既に單獨に尊德敎を服用し其中毒に罹つて居る人には之をアンテイドートとして更に服用すべきだと思ふ。以て消極的勤儉貯蓄中風症から救はれ樣と信ずる。(定價九十錢)

▲愼思錄　貝原益軒遺著　東亞堂書房發行

問思辨を學問の要道といふが、益軒は專ら思に耽つた人で、折節に書留めた隨感錄乍ら盡く汲んで盡きざる思想の源泉が窺はれる。此著は足立栗園の校訂を經、和譯を添へてある。(正價六拾錢)

▲夢想兵衞胡蝶物語　二松堂・健捷堂出版

馬琴の夢から生れた夢想兵衞、夢が誠か誠が夢か、其詮議はお去らばそして、兎に角音に名高き翼の生へた空想の産物、面白いものだ。(定價金五拾五錢)

▲袖珍元祿快擧錄　福本日南著　啓成社發行

日南氏の元祿快擧錄は其文章の流暢にして、其說話の巧妙なる。其物語と史實とを程よく調和したる。正さに赤穗義士傳の上乘なるものなることは嘗きに本誌に紹介したる所にして、爾後嘖々の好評を江湖に縱まにし、版を重ぬること數回なるは固より其處なり。今卷末に更らに追加を附して之を袖珍本として出版し、以て携帶に便ならしめたるはよき思附きなり。(定價一圓廿錢)

▲口傳秘鈔楠公遺訓　毛利紹龍編著　六合館發行

政道訓の奧書十九條といふもの卷末に附してあるが、全篇は遠州に傳つた古史を譯して楠公の誠忠を讃美して國民をして之に倣はしめんとて出したるものらしい。本の名が餘りふさわしくないやうに思ふ。(定價四十五錢)

▲生物概論　安東、安藤兩氏共著　寶文館發行

動植兩界の生物を一括して、其生活現象並びに其形態を論述したもので、通俗を主としてはあるが、何人にも面白く讀ませる丈けの筆力はない。之を丘博士の著述やシドニー、ギユーリックなどの同種の著述に比しては遙かに劣ると思ふ。（定價一圓五十錢）

▲惡戯　高島米峯著　丙午出版社發行

何處までも氣が利いて、何處までも輕妙で、どの文章もすら〳〵と一氣に讀ませる手腕はエライものだ。深いといふよりも鋭く、奇拔らしく見えて穩健なのは流石に世慣れた苦勞人の著作と頷かせる。誰が讀んでも面白いものだ。（定價八拾錢）

▲食養衛生通俗百歳長壽法　鈴木豐太郎著　二松堂發行

衣は日本服が世界一、住も日本式が日本一、食も菜食の方が人間によいといふ事を說いたもので、衣住の事は極めて簡略に書いてあるが、食の方は稍々化學的に委しく說いてある。そして此れを守れば百歳も生き得るといふのである。故石塚左玄翁の說を化學的に述べたやうなものだ。（定價二十錢）

▲心と病　竹内楠三著　二松堂發行

病の原因としての心の方面から、知情意と生理との關係を說き、病の治療力としての心の方面から、觀念感情意志の療法を說いてある。（金五十錢）

▲社會學小史　樋口秀雄著　二松堂發行

古代、中世、近世の三章に分けて、社會學的研究の概史を述べ、オーギユスト・コムトの實證哲學の概要から學派、及び生物的心理的考察、根本現象の研究、これに現代の社會學研究を一瞥してある。著者の專攻であるから、信賴するに足るべき充分の內容を持つてゐる事は疑ひもない（金八十五錢）

▲新桂川（後編）　伊原青々園著　富報社發行

美しい浮世繪のやうな例の新講話の面白味は、普く人の知るところだ。（金五十錢）

▲續文章軌範　友田宜剛評解　至誠堂發行

新譯漢文叢書の第七編である。評解者は確かにその人を得てゐる。譯文原文に丁寧な註解がある。（金一圓）

▲和英作文辭典　上野、野村、水島三文學士共著　文成社發行

コンモンエキスプレッションの知識を加へる爲めに、イデオムの用語を、自然、人生、社會の三編に分ち、更に實例の一編を添いてある。作文辭典として學生を益すること多い。（金六十五錢）

▲ネルソンとナポレオン　石原、本間共著　啓成社發行

兩雄が革命戰爭の骨子となつて全歐洲を振蕩したる戰役を敍述し、戰術の大綱とその政略に影響する所以を說明しやうとしたものである。研究としても讀物としても面白いもので、美しい表裝に鮮かな寫眞版や說

明圖がある。(金一圓二十錢)

▲徒然草評釋　　內海月杖著　明治書院發行

温い簡素な原文と、親切な言文一致體の評釋とが鮮明に快く並べてある。評釋の方面にも別段教科書以上の價値はないが、徒然草をよむならこれ等が先、樂なそして心持のいゝ出來であらう。(金七十錢)

▲劇五篇　　黑田玄一著　上田屋發行

「呪はれたる生存」「報酬」「朝」「哀願」「死の報知」五篇を集めてある。「樂無斷與行」と注意のしてある丈けに、何よりも先、舞臺に向くものらしい。戲曲に於けるアートはたしかなものだ。またかういふ人が一人增えたのは、惡い事ではない。たゞ餘り買ひ被らない方がいゝ。(金一圓)

▲俳山水　　泉鏡花併　聚精堂發行

蒐めてある俳句は、宗祇以下明治に到るまで、凡て全國の名所古蹟を吟詠したものだ。選輯の特色は句々の上には勿論、殊にそのはしがきに現はれてゐる。(金九十錢)

▲釋尊之生涯及其教理　　赤沼智善譯　無我山社發行

英國マンチエスター大學教掛リス・デキズ氏の著述である。明快な譯だ。註釋も程のいゝ親切な見せてゐる。附錄に初期佛教がある。照應して正に完全な理解を與へ得べき良書である。再讀の價値ある事は言ふを俟たない。(金一圓七十錢)

▲舊藩と新人物　　黑頭巾氏著　敬文館書店發行

平田男、秋元子の題字に續いて石黑況齋男の書柬がある。その次に澤柳東北大學總長、湯原東京音樂學校長及び足立北鷗三氏の序文がある。評語としては湯原氏の「地理、歷史を生み歷史、人物を產す。この故に人物を評するものに先づ地理を考へ次ぎに歷史を察し、遂に人物に及ぶを要す、(中略)史的現象の根本說明としては確に一種超凡の見解たるを失はず(中略)健堂がこの著其の人物を論ずるや能くこの樞機を看破し深く根抵より起見す」といふが最も能く本書の骨髓を摑んで忠實に特質を紹介するものと思ふ。澤柳氏の具體的に人物を鑿ぐるに力を用ゐる」も詞幽にして意遠き者である、此丈の評語を抄出すれば後は言ふも言はぬも宜い程に思ふ吾人は動もすれば天上天下唯我獨尊押しも踏まれもせぬと意張るが。それは只主觀の權力を絕對に言ふて見る場合であつて、更に此主觀に働き掛ける客觀世界の權威を計つて見たら如何であらう。我等は實に言ふばかりも無い憐れな貧小なものである。我等を包む氣圍氣の中には如何ばかりの要素が働いて居るであらうか。音に顯微鏡の無い世界に知れなかつた黴菌類が、其實幾多の病氣を傳染し廻るといふ事實の廿世紀の今日て知れて居るといふ位の事ではなく、諸天體の蒸す氣、諸地層の釀す氣、其中には幾多の瓦斯、幾多の色素、幾多の光線、幾多の溫度濕度といふ者があり、從つて幾多のアクチビテーが紛然雜然糾然としてコンガラかつて居る。それに加へて幾多の人格から孕まれた幾多の氣が風に揉まるる烟の樣に附いて廻つて居る。我等は普段不用意に居ればこそ知らすに居るけれど、能く考へて見れば我等の一聲一笑一喜一憂一肥一瘠一天一壽も皆其風化を受けて居るので、若し神と人との間に立つ別にエンジエルといふ樣な生物が眞乎に存在するとしたならば、我等を以て其所謂氣圍氣のバロメーターともし得るか知れぬ。が此恐ろしい外壓力を荷つて尙ほ我等の小主觀に動きの取れるのは、恰も幾千萬噸の水

の重量を負ひつゝ動き廻る海底の魚の樣な者と思ふ。之を考へれば平凡なる我等の如き虫一匹でも容易に評を下して眞を得る事は難いであらうが、併し此處に着眼せぬ以上は徹底した批評を得る事は到底望まれぬ。黑頭巾氏は兎にも角にも此點に眼を注いだ人物評壇の第一人者である。其處に新味がある。蕈採りの名人は先づ山に入つて其地勢の向背乾濕植物の種類を究むるよりも差當り颯として五感に迫る一團の地氣に感知するといふ事だが、黑頭巾氏は確に此人間界中に其蕈採り天才的敏感を有するもので、先づ此敏感に得る所あつて後、これを自己に反省して解剖し行き、諸多の要素に説明を本づけて行く者であると想ふ。されば其説明の中に時には湯原氏の評の如く、時に細目に於て失當するも」と言はれる事なきを保せぬ。が次に「每に大綱に於ては持正す」といふ詞を下されて居るのは全く氏が直觀的に根本に於て得居る物があるからだと信ずる。收むる處仙臺より東北一圓、加能越、房總、兩毛、信佐、兩肥、壹岐對馬等で、更に卷中の場面にパノラマ式背景を作るべく、豐富に寫眞版木版等が收めてある。何人も讀んで興趣多かるべく。又人物を培養する育英といふ農夫の仕事をするものには、どの畠にどの植物が育つかを知る必要上讀んで利益多かるべき者と思ふ。が蕈採りの名人となれば此獲物は自ら背負籠に盛り切れぬ場合あるべく。其場合松茸や鼠茸で滿載し盡して松茸や小松草を入るゝ餘地を少くする樣な事があつてはいけまい。卽ち取捨の權衡が大切だ、此點に於て何ほ多少黑頭巾氏の蕈採りたる資格にケチが附くまいか。と不遜乍ら疑ふ節もある。併し何といつても天才的敏感がある。年の功で採り慣れたら何でも斯でも慾張つて籠に入れ込んで重荷にするといふ弊は無くなるであらう。文章の精彩あり艶麗、典雅、清楚、豪宕行くとして可ならざる無きは世に已に定評があるから言はぬ。總クロース洋裝美本だ。更に續集續々集が早く欲しい。

（定價金貳圓五十錢）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學士 野上豐一郎先生
文學士 野村傳四郎先生
文學士 水島耕一郎先生
共編

和英作文辭典

價六拾五錢 袖珍形六百頁天付金美本 送料八錢

三版

本書は未だ曾て類例無き科學的の分類法に依り和漢兩文を對照したることて文字の用法は勿論文章の構成等に通曉する事が出來るから正則の英文を作らんと欲する者の缺くべからざる絶好の新辭典なり

大野洒竹先生
沼波瓊音先生
校訂

芭蕉句選年考

菊版上製美本正價一圓五十錢 送料十二錢

再版

本書は石河積翠園の心血を注ぎたる大著芭蕉發句集の最詳細たるものなり

米國トロー氏原著 文學士水島耕一郎先生譯

森林生活

四六版六百頁 上製頗美本 正價一圓廿錢 送料十二錢

忽七版

本書は、無用苦痛多き現代生活に對する絶好の解毒劑なり

天覽臺覽、岡谷繁實翁著 全拾冊

袖珍 名將言行錄

各冊一部六拾錢 送料六錢

面目一新 無限の需用を蒙りたる本書は爰に改版美裝して出づ、定に書齋の美觀を添ゆ萬世不朽の名著、偉人研究の最良書

千勝義重先生校訂

和譯蒙求

三六版美本函入 價九十錢 送料八錢

岡谷繁實翁著

續名將言行錄

菊版上製美本 價二圓 送料十二錢

大隈伯、三宅博士序 岡谷翁著

日本全史

菊版上製全十五冊 見本一冊一圓五十錢 進呈 送料十二錢

文學士 内海弘藏先生著

增補 文章十講

四六版美本 正價一圓二十錢 送料十二錢

七版

本書は著者多年心血の結晶物なり
本書は著者が新案の講義法に依れり
本書は最も組織的に文章を解釋せり

東京本郷區森川町
文成社
振替一九四六七番

(中村の一)

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士法學博士 男爵 加藤弘之先生新著

學説乞丐袋

本書收容要目

◎表反對の問遊びづくし
◎生存の需要
◎宇内一國成否の一大問題
◎利己的功利の道德
◎一元的倫理
◎倫理と宗教を讀む
◎否が立憲的族父統治の政權
◎算盤的倫理

◎所謂黄人禍
◎倫理上の一大疑點
◎眞善美を論じて倫理學上の迷見
◎無我變即有我愛
◎進化學的人生觀
◎教育も亦廉價に買はざるべからず
◎人格修養論
◎基督教は何故に處女の如き乎

◎自然界ノ矛盾と進化論の疑問を讀む
◎日本國民の精神上の二大問題
◎基督教に關する倫理教育と基督教
◎吾邦の倫理及び社會的進化
◎精神的學問の新風潮を知れ
◎赤穗義士に就て
◎道德上の三淘汰、其他數篇

洋裝菊判上製壹冊
正價金壹圓八拾錢
送料金拾貳錢

久我侯爵、東久世伯爵、土方伯爵、三上、芳賀、田中博士、木村鷹太郎君、山路愛山君、大町桂月君序

賜天覽

清水橘村編著

家庭訓話 今日の歴史

花の卷 月の卷 雪の卷 三冊

各冊菊判總布製美本 挿入圖畫百餘、五百有餘頁

定價金壹圓五拾錢 〒十錢

三卷揃への御注文に限り金四圓 送料小包貳拾八錢

今回著者が編纂の旨意は、過去數千間の歴史上の人物、出來事をば一年三百六十五日に割合て其日々の日記體にして一は先人の遺訓と言行により精神修養の資となし、他はこの歴史談を家庭團欒の席若くは學校教育の材料に供して諸人の話題に上ぼし、以て華を去り、實に就くの美風を涵養する資料にした者に奇抜にして破天荒の書なり…………

東京時事新報批評

農學博士法學博士 新渡戸稻造先生著

空前の歡迎 第十七版

歸雁の蘆

●學生之を讀まば唯一の修養書!
●紳士淑女之を繙かば社交場裡の花!
製本優美上製價金壹圓送料八錢

發行所 東京神田北神保町 振替東京八壹五番 弘道館

信用なき賣藥及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付の二)

(新刊)

圓道祐之先生編幷書

一等クロース美装　頁數四百餘頁　定價金八拾五錢　郵税金拾錢

實用草書字典

學生諸君一般の淑女紳士が草書に通ぜざる事今日より甚しきはなし

附録　○字畫索引　○音訓索引　○草書要領　○假名變體

世人が渴望せる最も輕便にして最も完全なる草書字典出たり、字數三千八百餘、毎字に數種の行草體を揭ぐ、字畫索引音訓索引とを附したれば隨時檢索の便ありて、書翰用として最も妙、別に草書要領の項目を設け解剖的組織的に草書を研究せしむ、蓋し此種の書中極度の進步を示せる者也。

東京市神田區錦町　有朋堂書店　電話本局一一三六　振替口座東京七一四八

法學博士　子爵　田尻稻次郎先生編

幽學全書

第三版

布裝釘
全一冊
約六百頁
一圓五十錢
郵稅十二錢

隠れたる大偉人＝二宮尊德以上の大人物

田尻博士曰く

『千葉縣下下總國香取郡中和村長部字八石に性理協會なる者あり是れ幽學遺教の所也曾て會員高木千次郎氏予に告ぐるに幽學の事を以てす予之を聞き好奇の念に絶えず氏に請ふに幽學の事蹟を記して其大要を示されん事を以てせり氏快諾則ち之を筆記して予に示さる予之を見て幽學の人格俊秀にして其業の偉大なるに驚き序して以て之を知友に示せしに見る者皆感歎せざるはなし爾後高木氏に就き尚ほ深く幽學の事業を聞き其遺書を見るに其教の幽遠にして其人格の高俊なる昔日の聖賢に耻ぢざる者ありて欽慕の情愈々厚さを加へ普ねく其遺書又事蹟を蒐集し以て幽學全書を編纂し世に公にせんとするの冀望を起し』云々と其の結果として成れるもの即ち本書也以て世道人心を振作するに足るべく現下の國情に於て最も剴切の大出版たるを疑はず政治家官公吏實業家敎育家學者學生諸君は必ず一本を座右に備へざるべからず＝製本既成即時送本す

東京神田表神保町
電話本局特四三七
振替東京一三五番

同文館

（中付の一）

日本の庭

永井荷風

蔦のからんだ柴折門は虫の喰つた其の扉を閉してゐる。

誰れも開けたことがないやうに見えるが、決してさうではない。

唯だ、公徳心のない民衆が花を傷け枝を折り、柔い苔の上に紙屑や巻煙草の吹殻を投げ捨てゝ行くことを防ぐが爲めにのみ閉されてゐるのだ。

番人はいつも居眠りをしてゐるから、構はず扉を押して這入るがいゝ。然し柴折門は非常に小さく低いのだから、シルクハットなぞを冠つた奴は殊更注意して、折れるやうに背を曲げねばならぬ。

歩く爲めの庭てはない。四阿屋の中に小さくなつて、坐りながら見るための庭だ。それだから庭は甚だ狭い。

然し山もある、池もある、森もある、叢もある。
蔽ひ冠さつた樹木の陰は、いつても黄昏のやうに薄暗い。其れ等の樹木は塀の外の物音を遮ると同時に、庭に咲く花の香も鳥の聲をも外へは漏さぬ。夜が早く來る。
風通しがわるい。それだから地面が絶えず濕つて、氣味惡いほど苔や木菌が生長する。到る處に蜘蛛が網を張つてゐる。蛇もゐる。毛虫もゐる。藪蚊も烈しい。其の代り蟋蟀は小春の晝過までも夏の歌を歌ふ。
池の水は沈靜したまゝ腐敗してゐる。水虫の泳いで遊ぶ隙間もない程に繁茂し過ぎた藻草は、間もなく水量の凡てを飲み盡してしまひはせぬかと思はれる位だ。龜も魚も何にもゐないらしい。蛙が鳴くばかり。
池の近くに石の古井戸がある。石には蔦が一面にからんでゐて、中をのぞくと、眞暗な底から腐つた落葉の匂ひがする。
小さな破れた祠が築山の後方の茂つた暗い木陰にある。その前に耳や吻のかけた石の狐が立つてゐる。鳥の糞が夥しく地面に落ちてゐる。
これは古い日本の庭である。
自分は人知れず此處へ來て、春と夏と秋と冬と、樹木と花と鳥と虫とを見る。古井戸の底に埋れてゐる秘密の影をうかゞひ、吻のかけた石の狐が呟く傳說に耳を傾ける。

然し別に珍しいことはない。吾々が既に幾度か聞き飽きたのと同じ話である。日本の庭の面に移り行く季節は、見古した同じ花と、聞き古した同じ鳥と同じ虫の音を繰返させるに過ぎない。けれども、自分の現在はこの同じもの、古いものに滿足してゐなければならぬ場合である。自分は見慣れた暗い夜のみをこゝに迎えて、異つた新しい曉をのぞむまい。

日本の庭に來るたび〳〵、自分の書きつけた亂雜な花鳥日記は次のやうなものとなつた。

梅

梅の蕾が大きくなつた。成程日當りのいゝ南向きの枝先きから一輪二輪と開き始めて行く。自分は梅の花を見ると、東洋の古典文學に關する自分の智識を試驗されるやうな心持にしかなれない。梅の花はどれ程美しく、どれ程いゝ匂ひがしても、われなる個性的感動は根底の深い過去の權威の下に忽ち萎縮してしまふ。漢詩と和歌と俳句とは全く餘すところなく此の花の匂ひを吸ひ盡してしまつたのだ。だから自分にはもう匂ひも風情も何にもない。梅花。お前は他人に身を任かしてしまつた戀人だ。老人の金持に身を任してしまつた舞姫である。

鶯

塵埃を脱した斯る廢園の奥、または淋しい片里の田舍家に、此の鳥の啼く聲を聞く時、それは何とな

く人里を戀ふるやうな甘い幽愁を帶びて響く。深窓の處女が誘惑の多い街の賑さを、遣瀬なげに空想する心持にも譬へやうか。けれども車の響きのはげしい町中に、思ひがけなくも其の聲を聞くと、堪えられぬばかり、遠い山間の幽谷へ歸りたいと云ふノスタルヂィを奏(かな)てゝゐるとしか思はれぬ。賑な處では鶯の聲はあまりに軟く滑か過ぎるためかも知れぬ。同時に淋しい處では、其の聲は殆ど人工的としか思はれぬ程美し過ぎるからでもあらう。

蘭

石の間から蝶のやうな形をした小さな花が咲いてゐる。然しこの花には色がない。黒ずんだ葉は薄(すゝき)のやうに縱横に勢よく延び亂れてゐる。自分はまだ此の植物の葉と花の形を淡々たる墨畫にして味ふほどの消極的精神修養をつんで居ない。無論これに對して擬人法を用ひ四君子の一として崇拜する觀念も起らない。暫く傳說を離れてこの植物を見れば、これは宜しく漢字よりも羅典語の名稱を付して、植物學者の採集箱にても摘み入れられべき形のやうに思はれる。

桃

古き伊太利亞の貴族の戀を思はせる、天鵞絨の光澤を誇つた薔薇の花の紅(くれなゐ)でもない。また近世的詩人が青春の血の滴りかとも思はれる水晶のやうな柘榴(ざくろ)の實(み)の紅(くれなゐ)でもなく、恐しき墮落の女性の、重苦しき

惱みの色のダリヤの紅でもない。桃の花の紅は、唐縮緬の昔からある極つた模樣の染色に、唯だうつくしく、戀知らぬ日本のムスメのあど氣なさを歌つてゐるのだ。

櫻

天地山川のあらゆる自然美を以て、單に狹隘なる國家主義の說明のみに使役しやうとした過去の藝術を問ふ勿れ。ビール製造場の煉瓦塀に添うて、民衆の歡樂と警察の制權とが戰爭をしてゐる淺間しい向島の光景を思ひ出す勿れ。横濱の商店の硝子戸に飾つてある名所繪葉書の情けない彩色を忘れよ。而して、現代に於ける凡ての敎育的感化と社會的先入の判斷とを離れて、純良無垢なる鄕土の詩人として、鄕土の山野を飾るこの特種の花に對せよ。然らば吾人は必ず、いつか一度は、わが民族的藝術の偉大なる最初の閃きに接する機會を得るであらう。吾人は先づ天眞爛漫たる新しい感激を以て、新しい花を眺めねばならぬ。

木蘭

佛陀の敎には、新しい基督敎プロテスタンチズムや、また日本固有の宗敎のやうに云ひなされた神道なぞには、決して見出されぬ懷しい淋しい藝術美のある事を忘れてはならぬ。

藤

今年十八歳になる才色双絶の或る華族の姫君が、若し自分の戀人であつたらば、と假定せよ。然らば自分は田舍源氏の殿樣のやうな扮裝をなし、わが戀人には高島田に振袖を着せ、そして二人身を寄せ合つて、春の日光に紫の房を垂らしたこの藤棚の下に佇まう。そして限りなき榮華の誇りを後世に傳へさすべく、浮世繪師の名人を聘して、われ等二人の繪姿を描かしめやう。

山吹

さう無暗に黃人種々々々と云つて、安く見て貰ひたくないものだ。君の國だつて、西班牙の南まで行けば、橙色の黃色がもてるぢやないか。菜の花と山吹と菊の花と蒲公英との國民的色彩を、雲一ツなく澄み渡つた日本晴れの靑空の光に見てくれ給へ。

牡丹

フラワー・ダンスだとか何とか物珍しさうに、紐育か何處かの寄席で見て來た新開地の踊なんか云々したまふな。牡丹に唐獅子、竹に虎。凡て絢爛眼を奪ふが如き藝術は、盡く江戸にある。

百合

お前は死んでから初めて誠の價値を知られた不幸なる詩人の詩のやうだ。お前は梅や櫻や松と同じやうに、いづれ劣らず古くから此の島國の土上に生へてゐたのであらう。然し梅や櫻や松に對する如く、時代はお前の姿と匂ひとに氣付かなかつた。お前の姿は功利的東洋道德の象徵に使ふには不適當であつたからであらう。凡ての方面に渡つて特色ある固有の文明を造り出した江戶時代は、其の國土が生ずる有らゆる植物の形象を捉え來つて、玆にも又固有なる裝飾を完成さした中に、お前の姿ばかりには矢張り多くの注意を拂つてゐないらしいのは、如何にも不審である。麻の葉のやうな極めて質素な植物からも、町娘が着る衣裳の模樣が造り出されてゐるのに、お前の姿ばかりは、僅に美人の「立つた姿」に譬へられた事があるばかり、嘗て如何なる家族の紋所にも採用された事がないやうである。けれども意外な新しい時代が魔術のやうに現れて來た。お前に對する勝利と讃美の時代は、今やお前の目の前に開けつゝある。

紫陽花

梟と猫と蝙蝠と蜘蛛を好んだ「惡の華」の詩人が、全くこの花を閑却してゐたのは、風土の相違によるものであらう。

Maiute fleur épanche à regret
Son parfum doux comme un secrot

Dans les solitudes profondes.

と云ふ句を讀んだ時、自分は直ちに、入梅の薄暗く濕つた日、古寺の古庭の深い樹木のかげに、蒼白く俯向いて默つて咲きかける紫陽花を連想した。アブサントの酒の色。蛇の鱗の輝き。川端の月夜に見た辻君の化粧の顔……

蝙蝠

强き力ある藝術を得んとせば、先づ恐しき傳習の壓迫を排除するの勇氣を養はなければならぬ。此に於てかわれは悲しく江戸を憎しむ。悲しきダンテの舟に乘りて、よしやインフェルノオの恐しさを窺はずとも、猶ほゴチックの寺院の古びたる土塀を夢みて、沈欝幽暗の想ひに耽らんとする時、かの氣障なる江戸、かの恬淡たる江戸は突如として横合ひより現れ出て、中世紀の信仰を顧んとするわれに向ひて、蝙蝠安の頬邊と團十郎の替紋を見よと云ひ、そして、蝙蝠が出て來た川の夕涼み……と歌ふ。われは甚しく江戸を憎しむ。

螢

眞赤な花と眞赤な鳥とが、眞青な入海の眞白な砂の上に、匂ひつ歌ひつしてゐる遠い未知の國、遠い彼方の島の夢。月はなくても其れより明い夜の空に星は一面に降るやうてある。驚くばかり茂繁せる大

樹の陰、身中痺れる程に匂ひ渡る麝香草の褥の上に横はつて、蘆の葉のそよぎと共に、夜の海の靜なる呼吸を聽く時、部落を拔け出し若き蕃女が、わが爲めに舞ひ歌ふその足踏みの調子につれて、纏へる綾羅は有色人種の滑かなる皮膚より滑りて落ち、頸にかけたる寶玉の一粒二粒は響もなく草の上に滴りて露にかゞやく……怪しきこの夢の名殘りなる古池の螢の光。

百日紅

うつくしい墓参の町娘が、若い寺の僧を見染める物語の發端……

合歡花

…そして若い僧が娘からの艶書をよんで涙を落す二幕目の舞臺面。

朝顏

ある女がまだ肩揚に赤い半襟をかけてゐる時分の思出を私に話した。柳橋から濱町のお師匠さんへ、毎朝お稽古に行く時、青物市場の突當りにある矢の倉の露地を拔ける。片側はずつと忍返しをつけた板塀に、露地の人達が朝顏をからましてゐる。毎朝必ず誘ひ合つて、一所にお稽古に行くお友達と、今朝は赤いのが幾個咲いてゐるだらう。紫のが幾個咲いてゐるだらうかと、きまつて露地へ這入る前に賭を

する。負けたものは、お稽古の歸りに藥研堀のお汁粉屋で氷汁粉をおごるのです。

蟬

ピエール・ロティが始めて日本に來た時の印象。「……延長した奇態なこの入江の端れに、まだ見る事の出來ないナガサキがあるに違ひない。沖合の風はぱつたり止んで、いつか四邊は寂としてゐた。空氣は非常に暑くなると共に、花の薫りに滿されて驚くべき蟬の合奏が、この入海の岸から岸へと互に呼應してゐる。其の數知れぬ物音は山々に響き渡つてゐるので、絶え間なく水晶の玉を振動したやうに陸地一面が鳴り出してゐるのかとも思はれた。」

蓮

淸元の出語にナガレへ坐る太夫の細い聲。三の糸のカンの調子から次第に一の糸の呂に落して、三度繰返して歌ふなまいだ――の節付けが、根岸や入谷や箕輪あたり、昔をしのばせる曲輪近くの古寺の池に咲くこの花の匂ひを、最もよく連想せしめる。

秋の七草

夏の幻影、僞りの惑はしなる十月の日の光を浴びて、古びた庭の池のほとりに、咲き亂れた秋の七草。

その目覺しい花の色は、夏の花の如くに濃く鮮に輝いてゐても、何處となく云ひ知れぬ惱みと疲れは、云ひ知れぬ姿の淋しさから湧く。凋落の前の最後の光彩。お前はかの Athène の盛りを過ぎた希臘藝術の最後の誇り、Pleiades の集合にあらずは、病める吾等の十九世紀を騷がしたるロマンチズムの Cénacle にも例へたい。

木犀花

支那小說中の最も濃艶なる一節を思ふ。

赤蜻蜓

どこから來た。こんなに揃つて何しに來た。死滅の冬が來る前の、麗しい十月の日光の中に、お前は花の散るやうに、星の飛ぶやうに、世界の喜び悲しみに緣のない、遠い遠い島國の、この世からなる涅槃の庭の靑空に、思出ての幽かなる紅の色をば閃かす。どこから來た。こんなに揃つて何しに來た——と思ふ間もなく何處へか去つた。みんな揃つて何處へか去つた。

椿

日本の庭の雪景色。寒帶の雪は熱帶的なる綠の葉と赤き花の上に積り、そして溫帶的なる軟風の心地

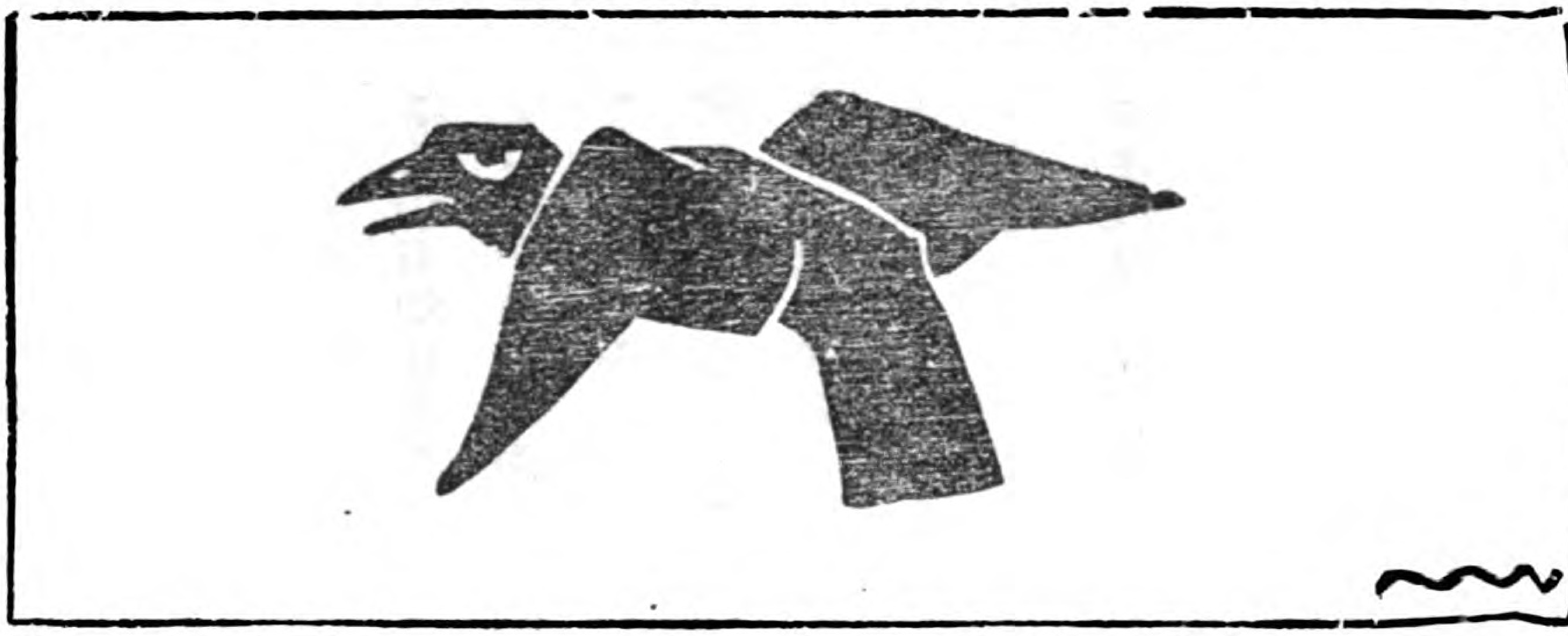
よさ。平和なる日本の古庭に雪の降る晝過ぎほど、自然が人工的の美を恣にする時はあるまい。地球上の異なる風土の有らゆる美觀は、總括して狹い垣根の中に陳列せられる。

水仙

靜な冬の庭の日當り、淋しい石の間に咲く水仙の花。其の涼しい匂と、淸い花瓣の色と、軟かな莖と葉の色を見ると、自分は唯だ何となしに、戀もせず妻も娶らず世外に超越した年寄つた學者が、幼い時に隣の娘と遊んだ思出の話をば、穩かな燈火の下に聞くやうな心持がする。

自分は此れから先き、まだ澤山に、春夏秋冬の花と鳥と虫とを見て感じた事を書いて行くかも知れぬ。書かぬかも知れぬ。

とにかく、あまり長く四阿屋に坐つてゐたので足が痛くてならぬ。汚くて厭だが、柴折戸をくゞつて、すこし外の世界を歩いて見やう……。



死

小川未明

一

たゞ黒いものが倒れてゐる、これが人間の死であつた。眞白な雪の上に、其の體は凍え固まつて、頭から被つてゐた黒い合羽(かつぱ)から、半分顔を出してゐる。青白い血の氣の失せた顔は、はてしもない冬の空を見つめてゐるやうに仰向いてゐた。眼は、僅かに開いてゐたけれど、灰色であつて、北の雲切れのした冴えた空の色を映さなかつた。

死骸の傍に立つて、彼の助教師もこれを見た一人である。

死んだ老婆は、若い時に御殿女中をつとめたといはれた。其頃、私はまだ

子供てあつたから……たゞ母や、隣の女の人が老婆についていつたことを其儘、信じてゐたのである。

母や、隣の女の人は、老婆をだらしないといつた。ぺな／＼着物を被て、なほあの年になつても伊達氣がある。ぺな／＼着物はどれも破れてゐるけれど針を持つて縫ふことをしないほどの無性ものである。それにしやうだれてあるから、傍によると、垢染みてゐるので臭い。そればかりでない、あのお婆さんの脊中は腐れてゐるから其の臭ひもするのである。――といつた。私には、ぺな／＼着物といふことは絹の着物であるといふことが分つた。而して、此の老婆を、毎日のやうに日暮方雪道の上て見るのが怖しいうちに、一種の説明の出來ない面白みがあつた。――昔は、御殿女中であつたといふことは、異樣なものを見るやうな氣持を與へたばかりでない、其のぺな／＼着物がどんなに破れてゐて、而して、脊中の腐れてゐる臭ひが、どう此の老婆の傍へ寄つたらするだらうかといふことも知りたいやうな氣がしたのである。

老婆の家は、田原といつて、此村て一軒遠く離れて、野原の奥の方にあつた。家にゐる時、此の老婆が何をしてゐるか知つてゐるものはない。子もなければ孫もなくて、たゞ獨り家の中に生きてゐるので別に仕事といふものもしてゐない。また、村の人とも行き來することもなかつた。村の人もわざ／＼此の一軒かけ離れた老婆の家へ行つて樣子を見るものもなかつたので、眞白な雪の原の中に、此の一つ家が一軒黒く遠くに見えてゐるばかりである。いつてあつたか、ある夏の頃、誰かゞ此の家の前を通ることがあつた時に忍び寄つて窓の障子の破れた穴から覗いて見ると、内はどんよりと光線が死んでゐるや

うに暗くて、壁が鼠色にふくれてゐて、老婆がつくねんと坐つてゐる他に、道具と名のつくやうなものは何もなかつたといつてゐた。

「ため金があるのかも知れない」……

と、母や、隣の女の人はいつてゐたこともあつた。

あの家には、昔からさう金のあらう筈がない。どうしても、あのお婆さんの食べてゐることは分らない……ぺな〳〵着物は、若い時に着たのを、いま、また着てゐるとは思はれるけれど……と或時は、考へて母のいつたこともあつた。

どんな寒い日でも、身を切るやうな風の吹く晩方でも……とぼ〳〵と歩いて老婆は、町の湯屋に行つた。行く時には杖をついてきつと小さな土燒の酒德利を持つてゐた。

私は雪道の上に立つて、あちらの、木立や、森が、遠くに白い野原の中に黑くなつて見えてゐるより、何も目に止らない方から、とぼ〳〵と杖をつきながら、腰をまげて雪靴を穿いて小さな體を持ち運んで來る……老婆の姿を見た。日によつて、この黑い老婆の姿を見ると、急に、怖しい、暗い、說明の出來ない感じに襲はれて、逃げて來ることもあつたけれど、また、日によつては大膽になつて、雪の中に二歩三歩踏み込んで老婆を通したこともある。其の時、私はしみ〴〵と老婆の顏を見た。顏の色は、生白くて、眼の中は、茶色である。眼は皺の澤山寄つた顏の中に落ち込んでゐて、銀色の髮が頭から破つた合羽の下より出てゐて、寒い風にちら〳〵と尖が動いてゐる。……ぺな〳〵着物といふのは、これかと

心で思つてよく老婆の被てゐる薄い着物を見ると破れて下つてゐる處もある。また處々に大きな穴があいてゐて、綿らしいものが見えてゐたり、織物の色合も分らぬほどに垢染みてゐるので、母や、隣の女の人などがぺな〱着物だといつて騷ぐ程のこともないやうな、眤と老婆を見てゐるうちに哀れな感じがして胸が塞つたこともある。

寒い風は、たえず廣い野の上を吹いてゐた。私の鼻には、老婆の脊中の腐れた臭ひがよく分らなかつた。却つて鼻の尖が寒氣のために痛かつたばかりだ。此時、私はかう思つた。……大抵の人なら、かうやつて、わざ〱雪の中に踏み込んで避けてやつてゐたら、「有がたう……」とか何とかいつて通るであらうのに、此の老婆は、何とも一言もいはずに、あたり前だといふ風で通り過ぎる……これが、世間の人々から惡くいはれるのであらうと、子供心ながらに憎いやうな思ひがせられた。

私の友達は、老婆が誰も人通りのない時を見て雪道の上に立止つて、懷の中から、赤黑いやうな酒德利を取り出して仰向に身を反らして德利の口から酒を飮んでゐるのを見たと話した。

「そして、君は、其時どうしてゐたい」

と、私は聞いたのである。

友は眼を圓くして、「私が、眤と見てゐるのを知らんで、お婆さんは、酒を飮んでしまつてから、此方に氣を付けて私の顏を睨んだよ」といつた。

私は、なほも其の時のことがいろ／＼聞きたかつたので、
「何か、お婆さんはいつたかえ?」と友に問ふと、友は頭を振つて、
「何も言はなかつた……」
といつた。
其時から私は、またいつか老婆が雪道の上に立止つて酒を飲むのが見たいと思つて……老婆の姿を見るたびに、私は、道の上に小さく蹲踞つて隠れて、頭だけ出していまか／＼と、老婆が道の上に立止つて、懐から、酒徳利を取り出して飲みはぢめるのを待つてゐた。……友のいつたのに、老婆は誰も道の上にゐないと安心して酒を飲むんだと……私は、また此處にかうやつて隠れてゐながら、怖しい眼をして老婆が友を睨んだ有様などを想像してゐた。

二

湯屋の表戸は半分板で上の方だけが色硝子で張られてゐた。けれど、色は曇つて、青、紅、紫の硝子をはめた四角な目の中には埃が溜つてゐた。外から明りのよく入らない湯屋の中は、いつ見ても薄暗かつたのである。番臺に火鉢を抱いて坐つてゐる爺はよく居眠りをしてゐた。戸外の雁木の下を通つて、濱の方へと歸つて行く町へ魚を擔いて來た女や、重い荷を負つてゐる男供の姿が、ちら／＼と色硝子を透して見られる。雪は、霏々と、往來の上に降つてゐる。寒い風が、雪を雁木下に吹き込んで、また破れた障子の穴から、壁板の隙間から、湯屋の中に入り込んだ。ときれ／＼に、風の絶え間にうたつて行

く歌の聲などが聞えた。

私は、子供の時分に、母に連れられて此の湯屋に行つたものである。而して、彼の老婆が、もう先に來て湯に入つてゐると入らなかつたものだ。老婆の脊中が腐れてゐるといふことが私には、觸れてもすることがあつたならと考へられて、堪らなく厭な感がして、また湯が臭くなつてよごれてゐると思つたからである。或時、……もうお婆さんは上つたのだから、……折角、こんなに寒い風の吹く日に來たのに、湯に入つて暖まりもせんで歸つたら風をひくからと……無理に母に帶を解かれて入れられた。ちやうど、老婆は湯から上つて着物を被やうとしてゐたので、私には、脊中の腐れた臭氣が油斷をすると鼻に飛び込んで來るやうな氣がして堪らなかつた。

私は、やつと湯に入つたけれど、暗い人の顏もよく分らない湯壺の中に老婆の殘して去つた臭氣が浮いてゐるやうな不快な氣持がして、人の動くたびに湯が顏に觸れるのを恐れた。けれど、暗い裡から眼を外の方に向けて眤と着物を被て歸る仕度をしてゐる老婆を見てゐると、いくたびも色硝子に、ちら／＼と戸外を通る女や男の影が差して、寒い北風がゴトゴトゴトゴトと戸に當つては、隙間を洩れて此の町はづれの淋しい湯屋の內まで寒い、荒れた感じを與へた。私は、湯に入つてゐる母が、今夜は大きな吹雪がするだらうといふのを聞きながらいろ／＼なことを考へてゐた。

なほ、見てゐると、老婆は、着物を被てしまつて、合羽を頭から被らうとして其れを下に置いた。而して、戸棚の中に着物と一つにして隱して置いた小さな徳利を取り出して、口をつけて仰向になつてぐ

うと一口飲んだ。私は、あれが酒徳利であらうと思つて見てゐた。そのうちに、老婆は合羽を頭から被つて、雪靴を穿いて、ガタ〳〵と色硝子のはまつてゐる表戸を細目に開けて出た。北風(きたかぜ)が吹き込んで、湯屋に張つてある、いろ〳〵な紙片をひら〳〵とさせた。此時、雪がちら〳〵と筋向ひの荒物屋の店頭に降つてゐるのが見えた。また、ガタ〳〵と音がして、老婆の弱い力で色硝子のはまつてゐる表戸は閉つた。老婆の黒い姿は、雪と、風のうちに、音なく消えてしまつた。……

或日、隣の女の人が來て、次のやうなことをいつて顏を赤くして母に話してゐた。

——よく、町へ行く時に途で田原のお婆に遇つて樣子を見ると、この寒空に足袋も穿かずに、指の頭が赤くなつてゐる、其れを氣の毒に思つたから、別に、聲をかけたこともないのだが……古い足袋だけれど、繼いだのを二足新聞紙に包んで、いつかまた町へ出た時途でお婆さんに遇つたらやらうと思つてゐた。幸、今日出遇つたから、よく自分の心持をいつてお婆さんに渡すと「それは御親切に有がたうございます」といつて受取つた。妾も、何となくいゝことをしたやうな氣持で嬉しくて町へ行つて歸りに其の道を通ると、先刻二人が話した場處のあたりに二足の足袋は、新聞紙に包んだまゝ雪の上に捨てゝあつた。……これを見て妾は、顏から火が出るやうにかつとした。いくら、昔は家柄であつても、御殿女中までつとめたからとて、今では、あんな樣子をしてゐるのでないか。あまり氣ぐらいの高いにも程があると思つて腹が立つた。妾はこれを乞食にやれば喜ぶものをと思つたから、また、捨ててある足袋を拾つて持つて來た。

母は、隣の女の人の怒るのを尤もだといつて話を聞いてゐたが、私は、この話を聞いてゐるうちに、この老婆が、雪道の上でわざ〳〵避けてやつても禮もいはずに通る時のことなどが考へ出されて、他のみぢめな老婆に對する時のやうに哀れな心持が起らないかはりに、何となく自分よりも、もつと強い、偉いものに對して抱かれるやうな反抗心が起つたのである。

ちやうど雪は止んでゐる。廣い野原はしんとして呼吸を休めてゐる。遠方にある、木立や、森が黒くなつて見える。

河がこのひつそりとした野原を流れてゐる。其の水は、悲しげに口籠つて歌をうたひながら、北へと、灰色の波音の寂いてゐる沖の方へと流れて行つた。不穩な、またいつか降つて來るか知れない雪空は、雲が重り合つて、上の黒雲は眠としてゐるのに下の白い雲は烟の飛ぶやうに足速に野原の上を駈けて行つた。河を隔てた左手には、遙かに町の家根が固つて見えてゐる。其の彼方に、國境の山々が南から北へと連つてゐる。南の方の高い、大きな山の巓は雲に隱れてゐて見えなかつたが、北に走るにつれて、雲斷の空は、處々懷しい青い色が破れて、雲の間から覗いてゐるやうに見えた。

冬の夕陽は、何處の邊に落ちるとも分らなかつたが、黄色な雲が山の上に横線に引かれて、日の沈みかゝつてゐることを知らせてゐた。

町も、村も、森も、河も、すべてのものを沈默が包んでゐる。此日、老婆は、一軒離れた家から、と

ほく〳〵といつものやうに、彼方に見える町へ行かうと歩いて來た。而して、急にこの雪道の上で苦しみ出して仰向いたまゝ倒れてしまつた。長い、生涯も、いろ〳〵と村の人に言はれた過去も、死と共に永遠に消されてしまつたのである。

死が不意に、老婆を捕へた。老婆は、其の間際まで知らなかつた。老婆は、かうして道の上で病んで苦しむ、これが直ちに死になるとは思はなかつた。苦しみのために悶掻いたに相違ない。片手は、雪の中に突き込んで、片手は、掌に雪を摑んでゐた。其時、此の淋しい、寒い、廣い野原の中で、遠く、森や、山を見渡すことの出來る雪道の上で、たゞ獨り苦しんで悶掻いて死に對して最後の、はかない爭ひをしてゐる老婆を、誰れ一人として見たものはなかつた。

黄色く、奈落に沈む日が西の空を染めて、しんとした、寂寥の、靜んだ氣が物の上を押へ付けるやうに、森も、白い雪の平野も、悲しみの大氣の底に沈んだやうに見られた。黒い屍が、眞白な雪の上に凍えてゐるのを見付けた、餌に餓えた烏は、枯木の上に止つて、この人間の悲しき死に對して、喜びの知らせを叫めいた。しんとした冷かな空氣と、異常を待つやうな寂寥の領してゐる、日暮方の雪の野原に其の聲は擴がつて、遠方の森から、其の聲を聞きつけて、やはり、日暮を知らせる時に聞くやうな悲しげな聲で啼きながら烏が飛んで來た。河を隔てた彼方の町の方からも、黒い姿は點のやうに空を染めて此處に集つて來た。雪の上に、また圃に立つてゐる枯木の上に、死骸の近くに、烏は下りて、互に、喧しげに啼き立てたのである。始め、彼等は此の死骸を疑ふやうに見えた。恰かも害を自分等に加へんた

めの人間の策略でないかと思つてゐるやうな風が見えた。而して、其處に集つた烏は、雪の上に止つて互に嘴を開けて突き合ひを始める。或者は、剝製のやうに頭を傾げて眠としてゐる。其の中に、數羽の烏は、死骸の上を近く、ぐる／＼と輪を畫いて廻つて、たび／＼下りて死骸の上に止らうと試みてゐるものもあつた。

かうして、また、其の上に止つて大膽に嘴で眼球を突き出さないうちに、村人が見付けたのである。

この知らせが、村の家々にひろまつた時に、我も、我もと懷手をしながら、見に出かけてとぼ／＼と踏み落ちる雪道の上をたどつて、淋しい、廣野の方へと歩いて行つた。

烏は、驚いて空に舞ひ上つた。ぐる／＼と啼きながら輪を畫いて飛び始めた。雪道の上に黑く凍えて死んでゐる老婆を取り卷いて、寒い風に吹かれながら、村の人々は、わい／＼といつてゐたが、誰の心にも此の老婆の死は、淋しく、孤獨の人の末路といふものが感ぜられた。

毎日、湯にいつたものだ……けふも、町へ湯に入りに行く道に死んだのだらう……酒の好きなお婆さんだつた。やはり、懷に酒德利を隱してゐるだらう……などゝ傍に立つてゐた女や男がいつた。

見てゐる人は、寒さに鼻を赤くしてゐた。けれども、死んだ老婆のために一滴の涙を落したものもなかつた。——中に、額に皺を寄せて、默つて立つて見てゐた助教師の姿が目に殘つてゐる。

老婆の死骸が、取り片付けられる時に、懷から、赤黑い酒德利が出たといふ……日が、うす暗くなるまで檢視の役人が來なかつたので、私は、遂に其れを見ずに家に歸つてしまつた。

三

助教師は、其頃五十に近かつた。彼は、町に生れて、村に來てから役場につとめたり、或時は鐵道の方に出たり、また或る會社の書記に雇はれたりしたことがあつたが、其時は、村の學校の助教師をしてゐた。家には、彼の妻と老婆と三人の兒供があつた。彼は、無口で極く好人物であつたけれど、はたらきがなかつたゝめ彼の妻と老婆とは、やはり家にゐて内職をして暮らしを助けなければならなかつた。

私は、助教師の身のうへについて、母や隣の女の人の話を聞いていろ〳〵と知つてゐる。今でこそ助教師の妻は、あゝいふやうに身形もかまはずにゐるし、年もとり、たへず心配のあるために、また、あの年になつても姑からいぢめられて、身の休まる閑もないので、いつかあんなに淋しい影が顏に現はれて、やつれ、痩せて、色は青白くなつて、さまで美しいとも思はれなくなつたが、まだ娘時代には、町で、誰も一人として知らぬものがなかつた程の美しい女であつた。――かういふことを聞いたけれど、私の見た頃には、助教師の妻は、もう年も四十を越へてゐたてあらう。眉を落して、おも長の色の白い顏は、たゞ、淋しいといふ感じより與へなかつたが、此の女の人は兒供に對しても柔しく、物のいひぶりも靜かで、近所の母親達のやうに、自分の兒供を手ひどく叱るやうなことを見なかつた。

かういふ、美しい淋しい、弱い、おとなしい女の人の顏は、さう强い印象を與へるものでない。けれど、今になつて其のうすく記憶に殘つてゐる此の人の顏を思ひ出すと、どこか、彼の歌麿の書いた女の顏に似てゐるところがあるやうに思はれる。けれど、またそれ程のチャームがあつたやうにも思はれな

い。……或は、貧のために、心配のために、いつしか若き日の血潮は枯れて、たゞ、其の冷かな面影のみが殘つてゐたのであらう……。

この女の人が、若かつた頃には、また助教師も、町の女や娘連の噂に上る程の美しい男であつたといふことだ。而していつか此の二人は、相思ふ間柄となつてしまつた。それから遂にいろ／＼な難關をも戀の力で漕ぎ拔けて二人は結婚したのである。

醉うてゐた二人の喜びは、眞に夢のやうに、束の間に過ぎなかつた。

助教師の家は、大きな瀨戸物商であつたけれど、父の死後、だん／＼と衰微して、遂に町の此家を賣らなければならなくなつた。家を賣り拂つて此村に移つて來た。もはや、此村に來てから幾十年となつた。助教師はいろ／＼の辛酸を味つた。共に、妻は苦しい生活をして、いつしか華かな、艶麗な姿は、貧と、悲しみ、苦しみのためにやつれて、衰へて、たゞ殘つたものは、淋しい、凄い、青白い色と幾多の、世を呪ひ、我が身を悔ゆる皺跡である。而して、其れからは笑はぬ、陰氣な、鬱いだ、病ひ勝の女となつてしまつた。

其頃から、姑の責苦は、日々に殘酷を加へて來たのである。助教師の老母は、常にかういつて息子の嫁を叱つた。

――いくら顏が美しくても、家の役に立たぬやうな女は仕方がない。……老母は、何を嫁がしても、其れを皮肉に見て、底意地の惡い輕蔑の笑ひと、冷かに批評する怪しく光る瞳とを閃めかさないことはな

かつた。これがために、無口の助教師は、益々憂へて無口となつた。彼は、常に生活と家庭のことを考へ惱んで茫然として、一日外を歩いて暮らしてしまふこともある……。

私は、助教師に無理に賴んで、屢々後からついて、釣に、遠くの河へ出掛けたのは……彼は、人を連て行くことを好まなかつた。何となれば、獨り、自分の見出した好い釣場を人に知らせたくなかつたからだ。

其の時分、町の、彼の當家は、印刷所になつてゐた。角家で、此家の横を曲ると裏通りの町に出られる。私は、よく其の印刷所の前を通つた。表に面した方は細かな格子戶がはまつてゐて、雁木下に立つて中を覗くと、どや〳〵と澤山男がゐる。顏に、黑いインキや、赤いインキの付いた若者が、彼方に行つたり、此方に來たりしてゐて、幾つも大きな機械が据えられてあつた。こゝでは會社の報告書や、小さな週間新聞位のものは印刷してゐたので、二階で、小僧が活字を拾つてゐる聲がした。此の單調な節は曇つた空の下に疲れた努力の連績といふ感じを抱かせた。かうして、見てゐる間に機械で刷つてゐる音がガタンと鳴る。また彼方で機械がくるりと廻るのが見える。そのたびに白い紙が出て來る。白く見えても字が刷られてゐる。大きな鐵板の掌が高く上つて、ぴつたりと紙を挾んだかと思ふと、機械がくるりと廻つて、またガタン！と鳴る。……………

かういふ悲しくも、また喜ばしくもない印刷所の光景を見てゐるうちにも、私は、助教師の身の上のことが考へ出された。

水雪がしよぼ〳〵と降つて、外に出してあるこうじの鉢の赤い實にかゝつて解けてゐる頃である。尚ほ、私は考へながら、雁木の下をとぼ〳〵と歩いて行くと、踏切を汽車が、けたゝましく響きを立て通り過ぎた。——黒い色が流れる——赤い筋が見える——何も、直接に自分の生活と關係のない世の中の事件までが、音となり、色となつて頭を刺戟して、刻々、地上の變遷を語つてゐるやうに思はれて、悲しかつた。

「ちつとは、ひきますかえ」……と髭の延びた、常に心配顔をした、やゝ水腫れのしてゐるやうな氣味のある助教師は、私の茫然として水の面を見詰めてゐる傍に立つて言つた。いつしか、午後も大分過ぎたけれど、まだ思つた程に魚は釣れなかつた。

「いえ……駄目です、ちつともひきません」と私は、振向いて笑ひながら答へた。

私は、ちやうど中學の三年生の時であつた。かうして下を向いて水を見詰めてゐながら、考へてゐたのは、考へなければならぬ筈になつてゐる幾何の説明や、代數の解き方ではなかつた。常に私の瞑想に上つたのは、……線は、A點とB點との連結した距離をいふとか、點とは形あつて大さなきものなり……とか、平行線は無限に於て相合す……といふやうな無限とはいかなるものなるかといふことであつた。

私は、此時も無心で流れてゐる水に對つて考へてゐた。眼が、缺けた椀だの、朽ちた板片などの、流れが渦を卷いてゐる柳の木の下に滯つてゐるのに止つた時、人の末路といふことから、ふと死といふこ

とを考へてゐた。また、助敎師の顏を見ると刹那に、助敎師の家でも、早く姑が死んだら、嫁さんが樂をするだらうにと……村の人がいつてゐることが思ひ出された。

『私は、今死といふことを考へてゐました。』と自分はいつた。

助敎師は、柳の木の枝につかまつて、此方を覗いてゐたが、驚いたといふ風で、大きな聲を出して、

『え？死ですつて……』と聞きかへした。

私は、自殺のことぢやないと心で笑つて、

『さうです。かうして水の流れてゐるのを見てゐると、死といふ問題が頭に浮んだのです。』……自分は、しんみりとした淋しい氣持でいつた。

今迄、無心で、すべて現實界の苦痛を忘れてゐた助敎師の顏は、忽ち暗くなつて、何物か心を惱ます不安な影に擾き亂されてゐるのを見受けられた。

『死！』といつて、彼れは、默つてしまつた。私は、いつしか釣のことを忘れてゐた。而して不用意に言つたことが、かくまで助敎師に不快な氣持と、疑惑とを呼び出したかといふことを心に悔んだ。これを知つて、私は、水を見詰めて默つてゐるわけにはゆかなくなつた。

『田原のお婆さんが雪の上で死んだ時に、烏が澤山來て啼いてゐたのを覺えてゐられますか？今、彼方で鴉が啼いてゐましたので、あの時のことを思ひ出してゐました。』……と私は、彼の思想を他に向けやうとした。

助教師は、暗い顔をして、やはり水の上を覗き込んでゐた。其の眼は、決して釣糸を見てゐる眼ではなかつた。また水の流れを見てゐる眼ではなかつた。大きな、どんよりとした不安な形の漂つた眼は、眞に死を思ひ、また死を怖れる懐疑の眸であつた。

水の上が暗くなつた。黒い杙にせかれて水は、輕く笑つてゐる。其の笑ひは、永遠に底の深い闇を讃美してゐるやうにも聞える。二人は無言て糸を巻いて、すでに、白い靄が野中のこんもりとした森に、かゝつてゐるのを眺めながら歸つて來た。

――家には意地惡い姑が、病身な妻をいぢめてゐるであらうといふことを考へた時に、助教師の心は、死を思ひ、また死を怖れたてあらう……私は、どういふものか悲しい、弱い、受動的の心持になつた。前に立つて歩いて行く、助教師の、漠然とした姿が薄闇の中に頼りなげに浮き出てゐる。其の形を見ながら、此人の心のうちの苦痛を考へて、私は、人々によつて喜、憂の異ならなければならぬ宿命の怖しさを思ひ、たとへ此人に同情するとも、此人は遂に孤獨てあるといふことを考へた。

生、死、共に運命に支配せられて、同じく此の世界に生を享けながら、なぜ吾等は互に孤獨てなければならぬだらう……と、私は、星の光りを見て考へた。

四

幾年か、ふるさとのたよりを聞かなかつた頃、私の、乳母が上京した。

電車に乘ると、眼暈のすること、湯屋にも、獨りて行け得ないことなどが私を困まらした。やはり、

彼の森の多い、暗い、故郷にゐて、自由に暮らしてゐる方が此の年をとつた乳母には幸福であるやうに感ぜられた。私は、乳母が東京にあきた時分……『國へ歸りたい』と言ひ出した時に無理に止めもせず、停車場まで見送つて行つたのである。

乳母が、此方にゐる間にいろ〳〵故郷の話を聞くことも出來た。

助教師は、村の小學校に長らくつとめてゐたが、だん〳〵氣が疎くなつて生徒等からも馬鹿にせられるやうになつたので、ついに其の職を退いてしまつた。其後、世話する人あつて停車場の驛夫となつた。何分にも年を取つてゐたので、或る闇夜のことポイントを卷き損ねて機械に刎ね飛ばされた。烈しく胸を打たれて一時氣絶したが、醫者が來て手當をして家に送り歸された。其れがために鐵道の方は止めてしまつた。殊に、哀れなのは、助教師の妻である。もう五十にもならうとして、尚ほ、姑にいぢめられてゐる。乳母がいふのに、あのお婆さんは、死ぬことを忘れたのだと……姑は、八十になつてゐて、まだ夜業もすれば、晝間も、一生懸命に內職をしてゐた。頭髮は、銀のやうに眞白になつて、顏には、深い幾筋かの皺が寄つてゐたけれど、齒も落ちなければ、耳も鈍く、視力も衰へなかつた。それに、助教師の妻は、もう此頃では、はげしいヒステリーにかゝつてゐた。ひどく氣が沈んで、顏の色は、ますく青白くなつて、頭髮も、大分白くなつてしまつた。然るに、身に自由は與へられず、夜も碌々眠ることが出來ない。

姑は、毎夜、十二時過ぎまで居眠りをせずに仕事に勢を出してゐた。其の頃まで妻は、やはり夜業をせなければならなかつた。四隣が寢靜つて、夜が更けてから漸く床についた。妻は床の中で手足の痺れを摩つた。體が少し樂になると疲れが出た。前後を知らず、いつしかうと〳〵として眠つたかと思ふと、不意に枕許で呼び起されたのである。……眼を開くとはやランプの火影は點つてゐて、姑は、知らぬ間に起きて仕事をしてゐた。

「あのお婆さんは、死ぬことを忘れたのだ。夜も二時間より眠らない。眼が醒めると直に起きて仕事をする……そして、あの、年をとつた嫁を呼んで眼の醒めない時は、烟管で叩き起すのだ……。」と乳母は、田舍言葉で、飾りもなく語つた。

私は、助敎師と、彼の妻と、この二人の頭の上に宿つた不思議な運命について考へさせられた。

今も、彼は、河へ行つて釣をする時に、水を見詰めながら、何を思つてゐるであらう……？

五

今年も、はや秋となつたのである。

黃色ばんだ、櫻の木の葉がはら〳〵と足許に散る。私は、遠く、高地に上つて眺めた。秋の空は澄んで、白い雲影が霞んでゐた。眼の下には、停車場があつて黑い烟が上つてゐる。滊車が出たり、來たりして、たへず、滊笛の音は、高く晴れた秋の空に小さく響いて聞えた。幾筋も、敷かれてゐるレールは、地球の受けた深傷のやうに、神經に黑い愁しみを刻んだ。

急に、私は、故郷に歸つて見たくなつた。

都の、街頭には、黄色な秋の夕日が落ちてゐる。而して、いろ〳〵な看板を黄色く彩つた。何處から來たとも知らない乞食が、白い西洋造りの建物の前に立つて、笛を吹いてゐる。其の周圍に通行の人が黒く集つて、其の乞食を見やうとしてゐる。人間の肉體をめぐつてゐる動脈のやうな黒い電線は、同じやうに都會の空に張られてゐて、唯一の交通の機關となつてゐる。其の上に青い毛布のやうに空が垂れてゐた。赤い小さな旗が、彼方の物工場の、高い三階の窓際に飜つてゐる。いろんな色彩を施した男女がぞろ〳〵と歩いてゐる。

電車は、此の都會にのみ用事を持つた人、また遊び歩いてゐる人、落付くところを探ねてゐる人などを乘せてぎし〳〵と車が鳴りながら走つてゐる。

こんな、景色をいつになく淋しい思ひて眺めながら、私は獨り、都を離れて北方の故郷に向つて旅立つた。

私の母も、年をとつた。母は、私の顏を見て、なぜ彼方から度々手紙をよこしてくれぬか、此頃は頼りになるものもなく、しみ〳〵心淋しく暮らしてゐるといつて涙ぐんだ。

獨り家の外に出て、私は、裏手に聳えてゐる山を仰いだ。松林の繁つてゐる山は、青い青い空に頭が接してゐる。秋の、青い空の色は、此の山の彼方は、北海であるといふことを知らせてゐる……無限に

遠いといふ感じがした。

眞に青い色、それは、日本海に近い、北國の秋の空の色であらう‥‥私は、孤獨の思ひて、永遠に淋しい空の色を見て考へた。

誰でも年をとつて、いつかは死んでしまふのだ。百年と此世に生きるものはなからう‥‥兩親に對して、まだ不眞面目であつた我が心に自から驚いた。

母は、いろ〳〵と故鄕の變遷を物語つたうちに、此頃、乳母は、息子と嫁の二人から常に「くたばり損ないめ」といはれていぢめられてゐるといふことを聞いた。

私が、彼の助敎師の家はどうなりましたかと問ふと、

「オヽ、それについては氣の毒な話がある‥‥」と母は言ひ出して、助敎師の妻は、今年の春死んだ。其れから三月目にとう〳〵、あの姑も、また此世を去つてしまつた。

「どうか三日でもいゝから姑樣より後て死にたい」と、靑白い顏の、衰へた嫁はいつてゐたさうな‥‥しかるに、死ぬまで姑にいぢめられて、姑よりは、三月前に、ついに春の日に、樂な思ひもせずに此世を去つた‥‥

「死ぬのを忘れた」といはれてゐた、其の姑も‥‥七月の頃三日ばかり病むと死んだ。なぜ、姑と嫁と後先にならなかつたと世間の人はいつてゐる。けれど姑は、病氣になる其の前日までいつものやうに夜業までして内職をしてゐたのである。

から、一時に、妻と母親に別れて‥‥其れからといふもの、平常からぼんやりしてゐた助教師は、全く、氣が變になつてしまつた。‥‥毎日、簞笥の置いてある其上に佛檀のある四疊半の室に閉ぢ籠つて、佛檀の前に坐つて、手を合せて拜んでゐる。而して、蠟燭を幾本も、幾本も、ぼつぼつと燃やしたてゝ口のうちで『あゝ、おらく(死んだ妻)は可哀さうだ。おらくは可哀さうだ。』といつていくたびも手を合はして拜んでゐる。佛檀の中には新しい位牌が二つ並んでゐて、その前には赤く塗つた香の壺と、土燒の香爐と、小さな磬とが置いてある。彼は、この磬を叩いて、香をつまんでは焚いてゐたが、いつしか香も盡きてしまつて、しまひには蠟燭ばかり幾本も、幾本も燃してゐる。其處にあつた蠟燭が、盡きると、町へ默つて出て買つて來る‥‥

此頃では、あまり、其の樣子が變つたので、上の娘が心配して傍につきゝりである。其の娘のゐることも分らぬ樣子で、やはり何やら言つて涙を出すかと思ふとまた笑つたりしてゐる。其の間に、『おらくは可哀さうだ。』『あゝ、おらくは可哀さうだ。』といつて蠟燭をぼつぼと燃しては、並べてゐる。白い蠟燭、紅い蠟燭、それが、一つ一つ赤い烏帽子を被つたやうに佛檀の前に並んで、その燈火の光りは、暗い四疊半をかつかと紅く色どつてゐる。常に煤けた勝手と此室と境の障子も、赤くなつて、時々、娘が、室から焔が燃え移つたのではないかとびつくりすることもある‥‥

と、かう母が語つて聞かせた。

私は、この話を聞いてゐるうちに、いつか田原の老婆が、雪の上で死んだ時、死骸が凍えて固くなつてゐたのを、何處からか烏が知つて、澤山飛んで來て、はては空に、黒くなつてぐる／＼と輪を書きな

から舞ひ始めた。この下に立つて、人々にまぢつて、死骸を見つめてゐた助教師が、今は、かういふ風に、氣が變になつて、佛檀の前に坐つて、夜も、晝も蠟燭を點しつゞけてゐるといふのを、怖しい、また不思議なことに考へたのである。

『死！』

思へば、誰の頭の上にも宿つてゐる、暗い、怖しい問題であつた。

夜半、ふと悲しいこうろぎの鳴き聲に眼が醒された。私は、床の中で耳を澄して哀れな、こうろぎのなき聲を聞いたのである。高窓の障子を、青く月の光りが照らしてゐる。もう、秋も老けてゐた。夜の空氣は、しんとして寒かつた。

『いつも、かうやつて家にゐてくれるのだといゝが……』と母がいふと、

『せめて、自分等が達者のうちだけてものう……思ふやうにいかぬわい。』……と父が寢てゐながら母に答へてゐた。

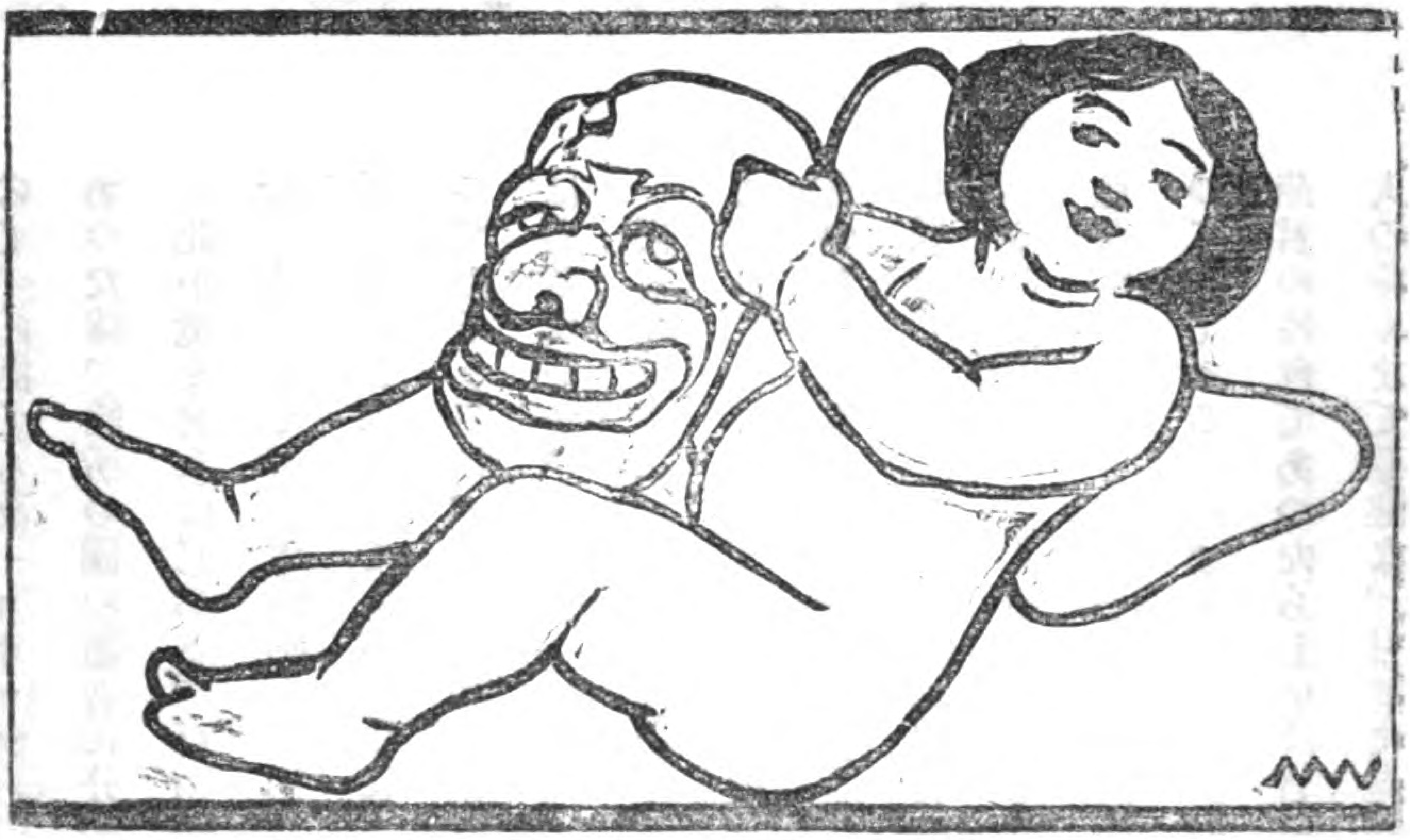
其の間に、こうろぎのなき聲がした。やゝ、しばらくたつてから……

『年をとつて、もう、何の樂しみもなし……』と、いつて母がすゝり泣きしてゐるのを、私は、聞いたのである。

老父母は、私が眼を醒してゐるとは思はなかつたらう。尙ほも、こうろぎの聲が悲しく聞える……擡くては、鈍い、暗い、北海の波の黶きもする……

『死！』といふ考へが、また私の頭に浮んだ。

（完）



百物語

鷗外

何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びた年の當日であつたかと思ふ。餘程年も立つてゐるので、記憶が稍おぼろげになつてはゐるが又却てそれが爲めに、或る廉々がアクサンチユエエせられて、翳んだ、濁つた、しかも強い色に彩られて、古びた想像のしまつてある、僕の腦髓の物置の隅に轉がつてゐる。

勿論生れて始ての事であつたが、これから後も先づそんな事は無ささうだから、生涯に只一度の出來事に出くはしたのだと云つて好からう。それは僕が百物語の催しに行つた事である。

小説に説明をしてはならないのださうだが、自惚は誰にもあるも

のて、此話でも萬一ヨオロッパのどの國かの語に翻譯せられて、世界の文學の仲間入をするやうな事があつた時、餘所の國の讀者に分からないだらうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり說明を以て此小說を書きはじめる。百物語とは多勢の人が集まつて、蠟燭を百本立てて置いて、一人が一つ宛怪物の話をして、一本宛蠟燭を消して行くのださうだ。さうすると百本目の蠟燭が消された時、眞の怪物が出ると云ふことである。事によつたら例のファキイルと云ふ奴がアルラア・アルラアを唱へて、頭を掉つてゐるうちに、觀面に神を見るやうに、神經に刺戟を加へて行つて、一時幻視幻聽を起すに至るのではあるまいか。

僕を此催しに誘ひ出したのは、寫眞を道樂にしてゐる蔀君と云ふ人であつた。いつも身綺麗にしてゐて、衣類や持物に、その時々の流行を趁うてゐる。或時僕が脚本の試みをしてゐるのを見てこんな事を言つた。「どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違つてゐます。ちよい〳〵芝居を御覽になつたら好いでせう。」これは親切に言つてくれたのであるが、こつちが却つてその勝手を破壞しようと思つてゐるのだとは、全く氣が附いてゐなかつたらしい。僕の試みは試みて終つてしまつて、何等の成功をも見なかつたが、後繼者は段々勝手の違つた物を出し〳〵して、芝居の面目が今では大ぶ改まりさうになつて來てゐる。詰まり捩れた、時代を超絕したやうな考は持つてもゐず、解せようともしなかつたのが、蔀君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつた交が絕えてから、もう久しくなつてゐるが、僕はあの人の飽くまで穩健な、目前に提供せられる受用を、程好く享受してゐると云ふ風の生活を、今でも羨ま

しく思つてゐる。蒔君は下町の若旦那の中で、最も聰明な一人であつたと云つて好からう。

この蒔君が僕の内へ來たのは、川開きの前日の午過ぎであつた。あすの川開きに、兩國を跡に見て、川上へ上つて、寺島で百物語の催しをしようと云ふのだが、行つて見ぬかと云ふ。主人は誰だ。案内もないに、行つても好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋さんが催すのです。大ぶ大勢の積りだし、不參の人もありさうだから、飛入をしても構はないのですが、それでは德義上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云ふかも知れない。併し二三日前に逢つた時、あなたにはわたくしから話をして見て、來られるやうなら、お連申すかも知れないと、勝兵衞さんにことわつてあります。わたくしが一しよに行くと好いが、外へ廻つて行かなくてはならないから、一足先きへ御免を蒙ります」との事であつた。

時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度外に用事もないので、まあ、どんな事をするか行つて見ようと云ふ位の好奇心を出して、約束の三時半頃に、柳橋の船宿へ行つて見た。天氣はまだ少し蒸暑いが、餘り強くない南風が吹いてゐて、凌ぎ好かつた。船宿は今は取り拂はれた河岸で、丁度龜淸の向側になつてゐた。多分增田屋であつたかと思ふ。

かう云ふ日に目貫の位置にある船宿一軒を借切りにしたものと見えて、しかもその家は近所の雜沓よりも雜沓してゐる。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けてゐる。僕は人の案内する儘に二階へ升つて、一間を見渡したが、どれもどれも知らぬ顏の男ばかりの中に、鬚の白い依田學海さんが、紺絣の銘撰の着流しに、薄羽織を引つ掛けて据わつてゐた。依田さんの前には、大層身綺麗にしてゐる、

少し太つた青年が恭しげに据わつて、話をしてゐる。僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たつた所に割り込んだ。簾越しに川風が吹き込んで、人の込み合つてゐる割に暑くはなかつた。

僕は暫く依田さんと青年との對話を聞いてゐるうちに、その青年が壯士俳優だと云ふことを知つた。俳優は依田さんの意を迎へて、「なんでもこれからの俳優は書見(しよけん)をいたさなくてはなりません」などと云つてゐる。そしてさう云つてゐる態度と、讀書と云ふものとが、此上もない不調和に思はれるので、僕はおせつかいながら、傍で聞いてゐて微笑せざることを得なかつた。同時に僕には書見と云ふ詞が、極めて滑稽な記憶を呼び醒した。それは昔どこやらで舊俳優のした世話物を見た中に、色若衆のやうな役をしてゐる役者が、「どれ、書見をいたさうか」と云つて、見臺を引き寄せた事であつた。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出ることになつてゐた。その若衆のしら〳〵しい、どうしても本の讀めさうにない態度が、書見と云ふ和製の漢語にひどく好く適合してゐたが、此滑稽を舞臺の外で、今繰り返して見せられたやうに、僕は思つたのである。

そのうち僕はかう云ふ事に氣が附いた。しら〳〵しいのは依田さんに對する壯士俳優の話ばかりではない。此二階に集まつた大勢の人は、一體に詞少なで、それがたま〳〵何か言ふと、皆しら〳〵しい。同一の人が同一の場所へ請待した客でありながら、乘合馬車や渡船の中で落ち合つた人と同じで、一人々々の間になんの共通點もない。こゝかしこで互に何か言ふのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻つた時計を振ると、セコンドがちよつと動き出して、すぐに又止まるやうに、こんな會話は長くは

持たない。忽ち元の沈默に返つてしまふのである。

僕は依田さんに何か言はうかと思つたが、どうも矢張しらぐしい事しきや思ひ附かないので、言ひ出さずにしまつた。そしてそこ等の人の顏を眺めてゐた。どの客もてんでに勝手な事を考へてゐるらしい。百物語と云ふものに呼ばれては來たものの、その百物語は過ぎ去つた世の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くなつて、只空き名が殘つてゐるに過ぎない。客觀的には元から幽靈は幽靈であつたのだが、昔それに無い內容を噓き入れて、有りさうにした主觀までが、今は消え失せてしまつてゐる。怪談だの百物語だのと云ふものの全體が、イブセンの所謂幽靈になつてしまつてゐる。それだから人を引き附ける力がない。客がてんでに勝手な事を考へるのを妨げる力がない。

人も我もぼんやりしてゐる處へ、世話人らしい男が來て、舟へ案內した。此船宿の棧橋ばかりに屋根船が五六艘着いてゐる。それへ階上階下から人が出て乘り込む。中には友禪の赤い袖がちら附いて、「一しよに乘りたいわよ、こつちへお出よ」と友を誘ふお酌の甲走つた聲がする。併し客は大抵男ばかりで、女は餘り交つてゐないらしい。皆乘り込んでしまふまで、僕は主人の飾磨屋がどこにゐるか知らずにしまつた。又蔀君にも逢はなかつた。

船宿の二階は、戶は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客の人いきれがしてゐたが、舟を漕ぎ出すと、すぐ極好い心持に涼しくなつた。まだ花火を見る舟は出ないので、川面は存外込み合つてゐない。僕の乘つた舟を漕いでゐる四十恰好の船頭は、手垢によごれた根附の牙彫のやうな顏に、極めて眞

面目な表情を見せて、器械的に手足を動かして櫓を操つてゐる。飾磨屋の事だから、定めて祝儀もはずむのだらうに、嬉しさうには見えない。「勝手な馬鹿をするが好い。己は舟さへ漕いでゐれば濟むのだ」とでも云ひたさうである。

僕は薄縁の上に胡坐を掻いて、麥藁帽子を脱いで、ハンケチを出して額の汗を拭きながら、舟の中の人の顔を見渡した。船宿を出て舟に乘るまでに、外の座敷の客が交つたと見えて、さつき見なかつた顔が大ぶある。依田さんは別の舟に乘つたと見えて、とう〱知つた顔が一人もなくなつた。そしてその知らない、幾つかの顔が、矢張二階で見た時のやうに、ぼんやりして、てんでに勝手な事を考へてゐるらしい。

舟には酒肴が出してあつたが、一々どの舟へも、主人側のものを配ると云ふやうな、細かい計畫はしてなかつたのか、世話を燒いて杯を侑めるものもない。かう云ふ時の習として、最初は一同遠慮をして酒肴に手を出さずに、只睨み合つてゐた。そのうち結城紬の單物に、縞絽の羽織を着た、五十恰好の赤ら顔の男が、「どうです、皆さん、切角出してあるものですから」と云つて、杯を手に取ると、方々から手が出て、杯を取る、割箸を取る。盛んに飲食が始まつた。併し話は矢張時候の挨拶位のものである。「どうです。かう天氣續きでは、米が出來ますでせうなあ。」「さやうさ。又米が安過ぎて不景氣と云ふやうな事になるでせう。」「そいつあ協ひませんぜ。鶴龜々々。」こんな對話である。

僕のゐる所からは、すぐ前を漕いで行く舟の艫の方が見える。そこにはお酌が二人乘つてゐる。傍に

頭を五分刈にして、織地の儘の繭紬の陰紋附に袴を穿いて、羽織を着ないでゐる、能役者のやうな男がゐて、何やら言つてお酌を揶揄ふらしく、きやつきやと云はせてゐる。

舟は西河岸の方に倚つて上つて行くので、厩橋手前までは、お藏の水門の外を通る度に、さして來る潮に淀む水の面に、藁やら、鉋屑やら、傘の骨やら、お丸のこはれたのやらが浮いてゐて、その間に何事にも頓着せぬと云ふ風をして、鷗が波に揺られてゐた。諏訪町河岸のあたりから、舟が少し中流に出た。吾妻橋の上には、人が大ぶ立ち止まつて川を見卸してゐたが、その中に書生がゐて、丁度僕の乘つてゐる舟の通る時、大聲に「馬鹿」とどなつた。

舟の着いたのは、木母寺邊であつたかと思ふ。生憎風がぱつたり歇んでゐて、岸に生えてゐる葦の葉が少しも動かない。向河岸の方を見ると、水蒸氣に飽いた、灰色の空氣が、橋場の人家の輪郭をぼかしてゐた。土手下から水際まで、狹い一本道の附いてゐる處へ、かはる／＼舟を寄せて、先づ履物を陸へ揚げた。どの舟もどの舟も、載せられる丈大勢の人を載せて來たので、お酌の小さい雪蹈などは見附かつても、客の多數の穿いて來た、世間並の駒下駄は、鑑定が容易に附かない。眞面目な人が跣足で下りて、あれかこれかと捜してゐるうちに、無頓着な人は好い加減なのを穿いて行く。中には横着で新しさうなのを選つて穿く人もある。僕はしかたがないからなるべく跡まで待つてゐて、殘つた下駄を穿いたところが、歯の斜に蹈み耗らされた、隨分歩きにくい下駄であつた。後に聞けば、飾磨屋が履物の間違つた話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈つたが、僕なんぞには不躾だと云ふ遠慮から、此贈物をし

なかつたさうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がゐて案内をしたのだらう。一艘の舟が附くと、その一艘の人が、下駄を捜したりなんかして、まだ行つてしまはないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そして狹い道を土手へ上がつて、土手の内の田圃を、寺島村の誰やらの別莊をさして行く客の群は、切れたり續いたりはするが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失ふやうなことはない。僕も齒の歪んだ下駄を引き摩りながら、田の畔や生垣の間の道を歩いて、とう〳〵目的地に到着した。

こゝまで來る道で、幾らも見たやうな、小さい屋敷である。高い生垣を繞らして、冠木門が立ててある。それを這入ると、向うに煤けたやうな古家の玄關が見えてゐるが、そこまで行く間が、左右を外圍よりずつと低いかなめ垣で爲切つた道になつてゐて、長方形の花崗石が飛び〳〵に敷いてある。僕に背中を見せて歩いてゐた、偶然の先導者はもう無事に玄關近くまで行つてゐる頃、門と玄關との中程で、左側のかなめ垣がとぎれてゐる間から、お酌が二人手を引き合つて、「こはかつたわねえ」と、首を縮めて呼き合ひながら出て來た。僕は「何があるのだい」と云つたが、二人は同時に僕の顏を不遠慮に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとても云ひたさうな、極く愛想のない表情をして、玄關の方へ行つてしまつた。僕はふいと馬鹿げた事を考へた。昔の名君は一顰一笑を惜んださうだが、こいつ等はもう只で笑はない丈の修行をしてゐるなと思つたのである。そんな事を考へながら、格別今女の子のこはがつた物の正體を確めたいと云ふ熱心もなく、垣のとぎれた所から、ちよつと横に這入つて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不斷は植木鉢や箒でも入れてありさうな、小さい物置があつた。もう物陰は少し薄暗くなつてゐて、物置の奧がはつきり見えないのを、覗き込むやうにして見ると、髮を長く垂れた、等身大の幽靈の首に白い着物を着せたのが、萱か何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄席に出る怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつてゐた、出來合の幽靈である。百物語のアツン・グウはこんな物かと、稍馬鹿にせられたやうな氣がして、僕は引き返した。

玄關に上がる時に見ると、上がつてすぐ突き當る三疊には、男が二人立つて何か忙がしさうに囁き合つてゐた。「どうしやがつたのだなあ。」「それだからおいらが蠟燭は舟で來る人なんぞに持せて來ては行けないと云つたのだ。差當り燭臺に立ててあるのしきやないのだから」と云ふやうな事を言つてゐる。樂屋の方の世話も燒いてゐる人達であらう。二人は僕の立つてゐるのには構はずに、奧に這入つてしまふ。入り替つて、一人の男が覗いて見て、默つて又引つ込んでしまふ。

僕はどうしようかと思つて、暫く立ち竦んでゐたが、右の方の唐紙が明いてゐる、その先きに人聲がするので、その方へ行つて見た。そこは十四疊ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠があつたり、泉水があつたりする庭を見睛してゐる。此座敷にもう二十人以上の客が詰め掛けてゐる。矢張船宿や舟の中と同じ樣に、餘り話ははずんでゐない。どの顏を見ても、物を期待してゐるとか、好奇心を持つてゐるとか云ふやうな、緊張した表情をしてゐるものはない。

丁度僕が這入つた時、入口に近い所にゐる、髯の長い、紗の道行觸を着た中爺いさんが、「ひどい蚊てすなあ」と云ふと、隣の若い男が、「なに藪蚊てすから、明りを附ける頃にはゐなくなつてしまひます」と云ふその聲が耳馴れてゐるので、顔を見れば、菘君てあつた。菘君も同時に僕を見附けた。

「やあ。お出なさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのてしたね。一寸御紹介をしませう。」から云つて菘君は先きに立つて、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手て人を分けるやうにして、入口と反對の側の、格子窓のある方へ行く。僕は默つて跡に附いて行つた。

菘君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と樣子の變つた男がゐる。しかも隨分込み合つてゐる座敷なのに、その人の周圍は空席になつてゐるので、僕は入口に立つてゐた時、もうそれが目に附いたのてあつた。年は三十位てでもあらうか。色の蒼い、長い顔て、髮は刈つてから大ぶ日が立つてゐるらしい。地味な縞の、鈍い、薄靑い色の勝つた何やらの單物に袴を着けて、少し前屈みになつて据わつてゐる。徹夜をした人の目のやうに、輕い充血の痕の見えてゐる目は、餘り周圍の物を見ようともせずに、大抵直前の方向を凝視してゐる。此男の傍には、少し背後へ下がつて、一人の女が附き添つてゐる。これも支度が極地味な好みて、その頃流行つた紋織お召の單物も、帶も、帶止も、只管目立たないやうにと心掛けてゐるらしく、薄い鼠が根調をなしてゐて、二十になるかならぬ女の裝飾としては、殆ど異樣に思はれる程てある。中肉中背て、可哀らしい圓顔をしてゐる。銀杏返しに結つて、體中て外にない赤い色をしてゐる六分珠の金釵を挿した、たつぷりある髮の、鬢のおくれ毛が、俯向いてゐる片頰に掛か

つてゐる。好い女ではあるが、どこと云つて鋭い、際立つた線もなく、凄いやうな處もない。僕は一寸見た時から、此男の傍に此女のゐるのを、只何となく病人に看護婦が附いてゐるやうに感じたのである。
蔀君が僕を此男の前に連れて行つて、僕の名を言ふと、此男は僕を一寸見て、默つて丁寧に辭儀をした丈であつた。蔀君はそこらにゐた誰やらと話をし出したので、僕はひとり緣側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かつた、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云ふ人の事を考へた。
今紀文だと評判せられて、あらゆる豪遊をすることが、新聞の三面に出るやうになつてからもう大ぶ久しくなる。けふの百物語の催しなんぞてからが、いかにも思ひ切つて奇拔な、時代の風尙にも、社會の狀態にも頓着しない、大膽な所作だと云はなくてはなるまい。
原來百物語に人を呼んで、どんな事をするだらうかと云ふ、僕の好奇心には、さう云ふ事をする男は、どんな男だらうかと云ふ好奇心も多少手傳つてゐたのである。僕は慥かに空想で飾磨屋と云ふ男を畫き出してゐたには違ひないが、そんならどんな風をしてゐる男だと想像してゐたかと云ふと、僕もそれをはつきりとは言ふことが出來ない。併し不遠慮に言へば、百物語の催主が氣違染みた人物であつたなら、どつちかと云へば、必ず躁狂に近い間違方だらうと丈は思つてゐた。今實際に見たやうな沈鬱な人物であらうとは、決して思つてゐなかつた。此時よりずつと後になつて、僕はゴリキイのフオマ・ゴルデエフを讀んだが、若しけふあのフオマのやうに、飾磨屋が客を擺まへて、隅田川へ投げ込んだつて、僕は今見たその風采ほど意外には思はなかつたかも知れない。

飾磨屋は一體どう云ふ男だらう。錯雜した家族的關係やなんかが、新聞に出たこともあり、友達の噂話で耳に入つたこともあつたが、僕はそんな事に興味を感じないので、格別心に留めずにしまつた。併し此人が何かの原因から煩悶した人、若くは今もしてゐる人だと云ふことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼けになつて、豪遊をするとなると、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依つて意識をぼかしてゐようとするものである。さう云ふ人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違ふやうだ。一體あの沈靜なやうな態度は何に根ざしてゐるだらう。あの目の血走つてゐるのも、事によつたら酒と色とに夜を更かした爲めではなくて、深い物思に夜を穩に眠ることの出來なかつた爲めではあるまいか。強ひて推察して見れば、この百物語の催しなんぞも、主人は馬鹿げた事だと云ふことを飽くまで知り拔いてゐて、そこへ寄つて來る客の、或は酒食を貪る念に驅られて來たり、或はまだ迷信の霧に理性を鎖されてゐて、こはい物見たさの穉い好奇心に動されて來たりするのを、あの血糸の通つてゐる、マリシヨオな、デモニツクなやうにも見れば見られる目で、冷かに見てゐるのではあるまいか。こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考へれば考へるほど、飾磨屋と云ふ男が面白い研究の對象になるやうに感じた。

僕はかう云ふ風に、飾磨屋と云ふ男の事を考へると同時に、どうも此男に附いてゐる女の事をも考へずにはゐられなかつた。

飾磨屋の馴染は太郎だと云ふことは、もう全國に知れ渡つてゐる。併しそれよりも深く人心に銘記せ

られてゐるのは、太郎が東京で最も美しい藝者だと云ふ事であつた。尾崎紅葉君が頬杖を衝いた寫眞を寫した時、あれは太郎の眞似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の寫眞は世間に廣まつてゐたのである。その紅葉君で思ひ出したが、僕は此藝者をけふ始て見たのではない。

此時より二年程前かと思ふ。湖月に宴會があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社の人達が、客の中で最多數を占めてゐた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もう大ぶ更けてゐて、紅葉君は火鉢の傍へ、肱枕をして寐てしまつた。尤も紅葉君は折々狸寐入をする人であつたから、本當に寐てゐたかどうだか知らない。僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵縞物を着てゐるのに、黒羽二重の紋付と云ふ異様な出立をした長田秋濤君が床柱に倚り掛かつて、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わつてゐる若い藝者と話をしてゐた。その藝者は少し體を屈めて据わつて、沈んだ調子の静かな聲で、只の娘らしい話振をしてゐたが、島田に結つた髪の毛や、頬のふつくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、「君まだ太郎を知らないのですか」と、その人がさも驚いたやうな返事をした。

太郎が藝者らしくないと云ふ感じは、その時から僕にはあつたのだが、けふ見れば大ぶ變つてゐる。それでも矢張藝者らしくはない。先きの無邪氣な、娘らしい處はもうなくなつて、その時つゝましい中にも始終見せてゐた笑顔が、今はめつたに見られさうにもなくなつてゐる。一體あんなに飽くまで身綺

麗にして、巧者に着物を着こなしてゐるのに、なぜ藝者らしく見えないのだらう。そんならあの姿が意氣な奥様らしいと云はうか。それも適當ではない。どうも僕には矢張さつき座敷に這入つた時の第一の印象が附き纏つてゐてならない。それはふと見て病人と看護婦のやうだと思つた、あの刹那の印象である。

僕がぼんやりして縁側に立つてゐる間に、背後の座敷には燭臺が運ばれた。まだ電燈のない時代で、死斯も寺島村には引いてなかつたが、わざ〳〵ランプを廢めて蠟燭にしたのは、今宵の特別な趣向であつたのだらう。

燭臺が並んだと思ふと、跡から大きな盤が運ばれた。中には鮓が盛つてある。道行觸のをぢさんが、「いや、これは御趣向」と云ふと、傍にゐた若い男が湯灌の盥と云ふ心持てすね」と注釋を加へた。すぐに跡から小形の手桶に柄杓を投げ入れたのを持つて出た。手桶からは湯氣が立つてゐる。先つきの若い男が、「や、閼伽桶」と叫んだ。所謂閼伽桶の中には、番茶が麻の嚢に入れて漬けてあつたのである。

この時玄關て見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の眞ん中に据わつて、「一寸皆樣に申し上げます」と冒頭を置いて、口上めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて濟まないが、並の飯の方を好む人は、もう折詰の支度もしてあるから、別間の方へ來て貰ひたいと云ふ事であつた。一同鮓を食つて茶を飲んだ。僕には鄙君が半紙に取り分けて、持つて來てくれたので、僕は敷居の上にしやがんで食

つた。「お茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と、蔀君は言ひわけをするやうに云つて置いて、茶を取りに立つた。併しそんな言ひわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を氣にする程、細かく尖つた神經を持つてはゐないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなつてゐなかつた、いやいや、矢張夫婦と云ひたい、主人夫婦から目を離してゐたのは、座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考へてゐた間だけであつた。座敷を見てゐる間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出來なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かずにぢつとしてゐる。袴の襞を崩さずに、前屈みになつて据わつた儘、主人は誰に話をするでもなく、正面を向いて目を据ゑてゐる。太郎は傍に引き添つて、退屈らしい顔もせず、何があつても笑ひもせずに、をり〳〵主人の顔を横から覗いて、機嫌を窺ふやうにしてゐる。

僕は障子のはづしてある柱に背を倚せ掛けて、敷居の上にしやがんで、海苔巻の鮓を頬張りながら、外を見てゐる振をして、實は絶えず飾磨屋の樣子を見てゐる。一體僕は稟賦と習慣との種々な關係から、どこに出ても傍觀者になり勝である。西洋にゐた時、一頃大そう心易く附き合つた爺いさんの學者があつた。その人は不治の病を持つてゐるので、生涯無妻で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、傍の一人が僕に舞踏の社交上必要なわけを説明して、是非稽古をしろと云ふと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての觀察から、可笑しいアネクドオト交りに舞

踏の弊害を列べ立てて攻撃をした。その時爺いさんは默つて聞いてしまつて、さてから云つた。「わたくしは御存じの體ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出來ない舞踏を、人のしてゐるのを見ます度に、なんだかそれをしてゐる人が人間ではないやうな、神のやうな心持がして、只目を瞬つて視てゐるばかりでございますよ」と云つた。爺いさんのかう云ふ時、顏には微笑の淡い影が浮んでゐたが、それが決して冷刻な嘲の微笑ではなかつた。僕は此時人生の傍觀者と云ふことに就いて、深く、深く考へて見た。僕には不治の病はない。僕は生れながらの傍觀者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交上尊卑種々の集會に出て行くやうになつた後まで、どんなに感興の涌き立つた時も、僕はその渦卷に身を投じて、心から樂んだことがない。僕は人生の活劇の舞臺にゐたことはあつても、役らしい役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞臺に上らない時は、魚が水に住むやうに、傍觀者が傍觀者の境に安んじてゐるのだから、僕はその時尤も其所を得てゐるのである。さう云ふ心持になつてゐて、今飾磨屋と云ふ男を見てゐるうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢ふやうな心持がして來た。傍觀者が傍觀者を認めたやうな心持がして來た。

　僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壯にして鉅萬の富を讓り受けた時、どう云ふ志望を懷いてゐたか、どう云ふ活動を試みたか、それは僕に語る人がなかつた。併し彼が藝人附合を盛んにし出して、今紀文と云はれるやうになつてから、もう餘程の年月が立つてゐる。察するに飾磨屋は僕のやうな、

生れながらの傍觀者ではなかつただらう。それが今は慥かに傍觀者になつてゐる。併しどうしてなつたのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしてゐた學者のやうな、オルガニツクな缺陷が出來たのではあるまい。さうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無形の創痍を受けてそれが痊えずにゐる爲めに、傍觀者になつたのではあるまいか。

若しさうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のやうな催しをするのだらう。世間にはもう飾磨屋の破産を云云するものもある。豪遊の名を一時に擅にしてから、もう大ぶ久しくなるのだから、内證は或はさうなつてゐるかも知れない。それでゐて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になつて、人を凌ぎ世に傲つた前生活の惰力ではあるまいか。その惰力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度創作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見るやうに過ぎ去つた榮華のなごりを、現在の傍觀者の態度で見てゐるのではあるまいか。

僕の考は又一轉して太郎の上に及んだ。あれは一體どんな女だらう。破産の噂が、殆ど別な世界に棲息してゐると云つて好い僕なんぞの耳に這入る位であるから、怜悧らしいあの女がそれに氣が附かずにゐる筈はない。なぜ死期の近い病人の體を蝨が離れるやうに、あの女は離れないだらう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍觀者ではないか。傍觀者は女の好んで擇ぶ相手ではない。なぜと云ふに、生活だの生活の喜だのと云ふものは、傍觀者の傍では求められないからである。そんなら一體どうしたと云

ふのだらう。僕の頭には、又病人と看護婦と云ふ印象が浮んで來た。女の生涯に取つて、報酬を豫期しない看護婦になると云ふこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の内容としてゐると云ふこと程、大いなる犧牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖に繋がれてゐてする、イブセンの謂ふ幽靈に祟られてゐてすると云ふなら、別問題であらう。この場合にそれはない。又戀愛の欲望の鞭でむちうたれてゐてすると云ふなら、それも別問題であらう。この場合に果してそれがあらうか、少くも疑を挾む餘地がある。さうして見ると、財産でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、戀愛でもないとして考へて、僕はあの女の捧げる犧牲のいよ〳〵大きくなるのに驚かずにはゐられなかつたのである。

僕はこんな事を考へて、鮓を食つてしまつた跡に、生姜のへがしたのが殘つてゐる半紙を手に持つた儘、ぼんやりして矢張二人の方を見てゐた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ來て何か囁くと、これまで殆ど人形のやうに動かずにゐた飾磨屋が、つと起つて奥に這入つた。太郎もその跡に引き添つて這入つた。

暫らくすると蔀君が僕のゐる所へ來て、緣側にしやんで云つた。「今あつちの座敷で辨當を上がつてゐなすつた依田先生が、もう怪談はお預けにして置いて歸ると云はれたので、飾磨屋さんは見送りに立つたのです。もう暑くはありませんから、これから障子を立てさせて、狹くても皆さんにこゝへ集まつて貰つて、怪談を始めさせるのださうです」と云つた。僕はさつき飾磨屋を始て見たとき、あの沈鬱な

うな表情に氣を附け、それからこの男の瞬もせずに、ぢつとして据わつてゐるのを稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしてゐるのではないかといふやうな感じを心の底に持つてゐた。此感じが鋭くなつて、一刹那あの目をデモニックだとさへ思つたのである。さうてあるのに、この感じが、今依田さんを送りに立つたと云ふ丈の事を、蔀君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は蔀君には、只自分もそろ〳〵歸らうかと思つてゐると云ふことを告げた。僕は最初に、百物語だと云つて、どんな事をするだらうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だらうかと思つた好奇心も、今は大抵滿足させられてしまつて、此上雇はれた話家の口から、古い怪談を聞かうと云ふ希望は少しも無くなつてゐたからである。蔀君は留めようともしなかつた。

改まつて主人に暇乞をしなくてはならないやうな席でもなし、集まつた客の中には、外に知人もなかつたのを幸に、僕は默つて起つて、舟から出るとき取り換へられた、歯の斜に耗らされた古下駄を穿いて、ぶらりとこの怪物屋敷を出た。少し目の慣れるまで、歩き艱んだ夕闇の田圃道には、道端の草の陰て蟀が微かに鳴き出してゐた。

*　*　*　*　*

二三日立つてから蔀君に逢つたので、「あれからどうしました」と僕が聞いたら、蔀君がかう云つた。

「あなたのお歸になつたのは、丁度好い引上時でしたよ。暫く談を聞いてゐるうちに、飾磨屋さんがゐなくなつたので聞いて見ると、太郎を連れて二階へ上がつて、蚊屋を弔らせて寝たと云ふぢやありませんか。失禮な事をしても構はないと云ふやうな人ではないのですが、無頓着なので、そんな事をもするのですね」と云つた。

傍觀者と云ふものは、矢張多少人を馬鹿にしてゐるに極まつてゐはしないかと、僕は思つた。(完)

●本號紙數增加に付き特價金貳拾貳錢　郵稅金貳錢

○壹冊定價　金貳拾錢外に郵稅金壹錢五厘(海外郵稅拾錢但淸國を除く)

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓七拾貳錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓參拾四錢

以上郵稅共

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱符いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず寧ろ向は返信料を添へらるべし

明治四十四年九月廿八日印刷納本
明治四十四年十月一日發行

(禁轉載)

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場



時計及附屬品、ダイヤモンド其他寶石
各種貴金屬製美術工藝品和洋服裝飾品
眼鏡類、製作及販賣

宮内省御用

東京市京橋區八官町

小林時計店

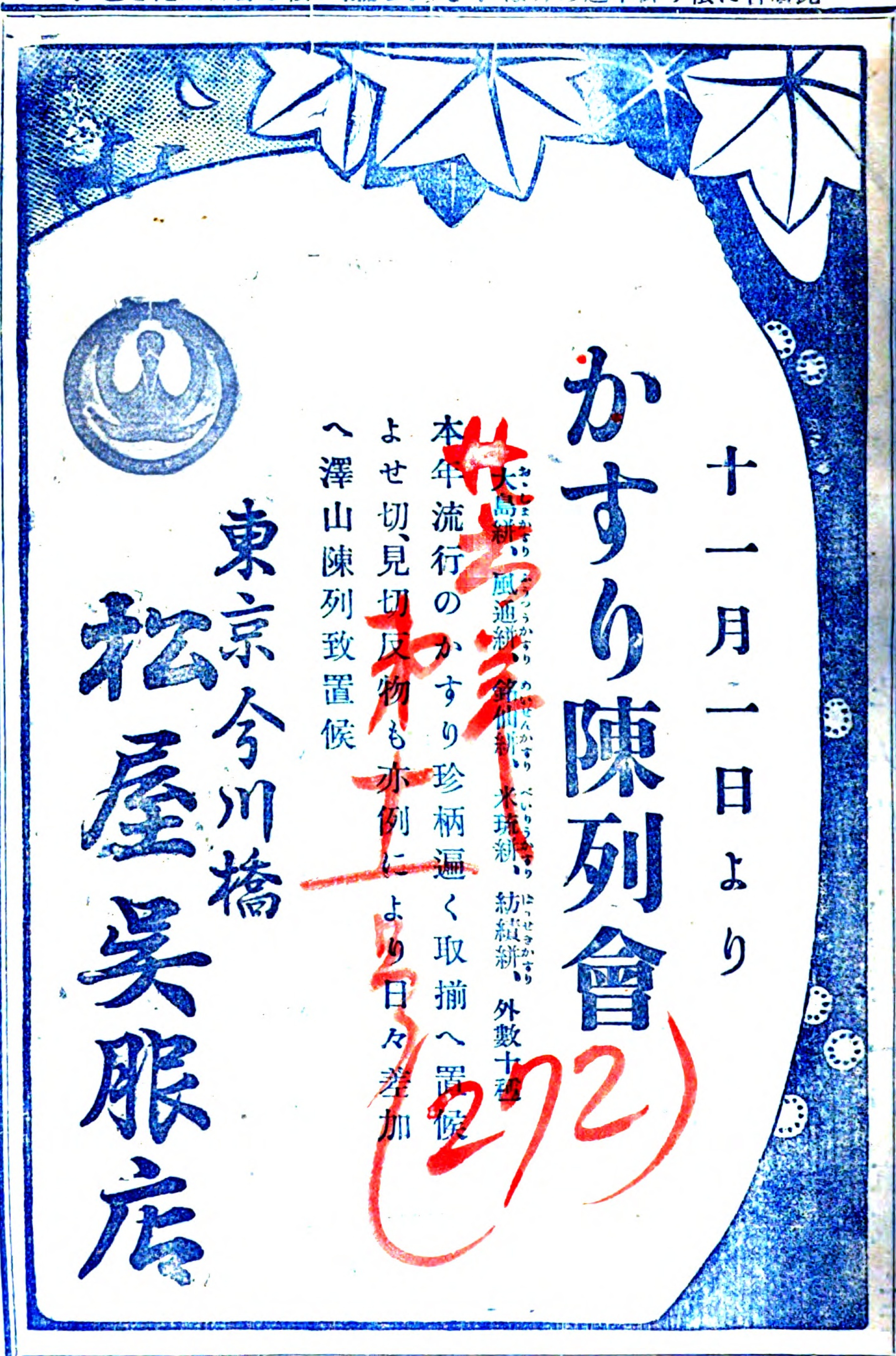
電長新橋 一〇〇三
一一〇四

振替口座七八〇七

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
中央公論第二十六年第十號

MADE IN JAPAN


十一月一日より
かすり陳列會
大島絣、風通絣、銘仙絣、米琉絣、紡績絣、外數十種
本年流行のかすり珍柄遍く取揃へ置候
よせ切、見切反物も亦例により日々差加
へ澤山陳列致置候
東京今川橋
松屋呉服店